

---

# Eternal a Contract

彩世 幻夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Eternal a Contract

### 【NZコード】

N4541Z

### 【作者名】

彩世 幻夜

### 【あらすじ】

それは、永久の約束。

それは、魂を懸けて誓った大事な誓約。

約定を果たすため、命を懸けて廻した運命の歯車が、時を越えて噛み合い、新たな物語が今、回りだした。

## 第一章 the ring of a belt (前書き)

「」の作品は、吸血鬼モノです。

吸血シーンや宗教的表現、また、バトルシーンにおける多少の残虐表現が含まれます。

恋愛を描いています。18禁表現はありませんが、軽めの性的描写があります。

苦手な方は「」遠慮下さい。

評価・感想など頂けましたら、嬉しいです。

「ハロウインパーティー？」

パンツ、と顔の前で手を合わせた彼が差し出した招待状に目を落とす。

「頼むよ千恵……助けると思つて！ 一緒に来てくれよ」

そう言つて、今度は白い封筒を差し出し、中からチケットを一枚出し、机の上に置く。

パーティーに行くのに必要なチケットだ。見ると、右端に小さく ¥1200と書かれている。

「あ、大丈夫！ そのチケット、兄貴に貰つたヤツだから」長年、自宅の隣人兼幼馴染みの腐れ縁である彼に誘われているのは、駅前にあるライブハウスで行われるハロウインイベントだ。

「でも、夜10時からって……ちょっと遅くない？」

カードに書かれた時間に渋い顔をすると、すかさず、

「それも大丈夫、俺が責任持つて送るし。それでも心配なら兄貴に車出させるから！」

と、畳み掛けるも、

「……つて、千恵ならそういう心配はいらないだろ？ けどさ」と、余計なひと言を後にくつづけるのが夏也だ。

「そのパーティーライブ、香奈ちゃんも出るんだ」

夏也の兄で、やはり幼馴染みの悠は、大学の友人たちと組んでバンドをやっている。

その兄にパシられる格好で出入りしていた例のライブハウスで彼がどつぶりハマり込んだのが、何とかいうバンドでヴォーカルを務めているという“香奈”という女の子で。

「いつもみたいに、悠兄に付いて行くんじゃタメなの？」

「それだと俺、裏方にしか出入り出来ないから、香奈ちゃんのライブが見られないんだよ。でも表から入るには……」

机に置かれた一枚のペアチケット。

「ハロウイントーさ、ヨーロッパとかアメリカとかの行事だろ？  
だから、あっちの習慣に習おうって事でや……」

つまり、男女ペアでなければライブハウスに入る事すら出来ない、  
という訳だ。

「こんな事頼めるの、千恵しかいないんだよ、頼む！」

「私、こういう場所は右も左も分からないよ？ こいつの、風  
花の方が詳しいと思うんだけど」

千恵は、もう一人の幼馴染みの親友に話を振った。

「じめん、私その日は都合つかなくて」

だが、彼女は意味ありげな目配せを夏也に送りながら肩をすくめ  
た。

「なあ、頼むよ。飲み物代くらいは奢るからや。香奈ちゃん以外  
にも幾つかのバンドがライブやるんだ。行ってみれば千恵も気に入る  
バンドがあるかもだぜ？」

夏也の台詞に休み時間の終了を告げるチャイムと風花の舌打ちが  
被る。

「まあ、私でいいなら……」

「いいのか？ 助かる！」

小躍りでもしだしそうな軽やかな足取りで自分の席へと戻つてい  
く彼を見送りながら千恵は小さくため息をつき、机に残されたカー  
ドとチケットを見下ろす。

「10月31日……、か……」

浮かれ切つた幼馴染みはすっかり忘れているようだが。

（誕生日……なんだけどな。まあ、夏也にそんな心遣いを期待す  
るだけ無駄なのはよーく分かってるけどや）

千恵の肩を軽く一度叩いて、風花も席へと戻る。

（まあ、家で一人きりで過ごすよりはマシか……）

もう一度ため息をついてから、机の上の紙片を封筒にしまい、そ  
れをクリアファイルに挟んで通学かばんのポケットに突っ込んだ。

そして、“その日”の夕刻。

玄関のチャイムが鳴った。

「おーい、準備できた？」

だが、こちらの応答を待つことなく玄関の扉が開き、玄関先から夏也の声が家中に響く。

遠慮なく靴を脱いでスリッパに履き替え、断りもなくとんとんと階段を上がつて来た。

「準備はできてるけどさ、……ねえ夏也。今さらだとは思つけど、女の子が一人で暮らしてるとて分かつてる家にすかすか上がり込むつて……デリカシーって言葉の意味、知つてる？」

「知つてる、知つてる。でも、お前相手じゃマジ今さらだろ？」

一応パーティーなのだからと、そこそこめかし込んだつもりだった千恵に、夏也はへらりと笑つて言った。

その夏也は、全身真っ黒な装いの上からジャラジャラとヒツヒシリバーアクセを幾つも身に纏つていた。それは正直

「ちょっと、それ……悪趣味じゃない？」

「何だよ、ハロ윈で仮装パーティーなんだろ？ これ、吸血鬼ヴァンパイアのつもりの衣装なんだ。アクセ類はちょっと兄貴の部屋から失敬して……」

長々と口の装いについて語りに入ろうとする夏也に、千恵は

「……いいの？ 早く行かないと“香奈ちゃん”的ライブに間に合わないよ？」

冷たく水を差した。

そうして夏也に連れられて初めてくぐつた扉の向こう。

扉を開けた瞬間、ワツと耳がおかしくなりそうな爆音の洗礼を浴びせられて怯んだ千恵の背を押し中へと入った夏也は、入口に立つ

店員に招待状を見せ、チケットを差し出す。

「ようこそ、いらっしゃいませ」

店員は受け取った紙片の代わりに、カゴに入ったキャンディーを手渡した。

「……これは？」

首を傾げた夏也に店員は意味深な笑みを浮かべる。

「今日は、ハロウインですからね」

夏也はよく分かっていないさうな顔をしたままそれを受け取り、千恵に押しつけて、

「俺、飲み物買つてくるから」

それだけ言つと、そのまま千恵を置いて人混みへ紛れて行つてしまつた。

暗がりの中、チカチカとライトがうるさく点滅を繰り返し、自分の声すら叫ばなければ聞こえない程の大音声が狭い部屋の中を圧倒する中に、ごちゃごちゃと息が詰まる程人が溢れ返る。

その、混沌の中へと割つて入つていく気にはなれず、千恵は壁に背を預け、小さく息を吐いた。

「Trick or Treat！」

君、一人なの？」

そんな彼女の前に立ち、二ツと魅惑的な笑みを浮かべながら声をかけたのは、圧縮された空間に在りながら、次元の違う存在感を身に纏つた白い少年……いや、青年と呼ぶべきか迷う一人の男性。

「いえ、連れが……飲み物、取りに行つていて……」

問いかねながら、首を傾げる。

「……あなたのパートナーは？」

今日のパーティーは、男女ペアでなければ参加できないはずなのに。

「僕は特別。……すぐに分かると思うよ？」

言いながら、彼は千恵の長い髪の一房を手に取つた。

「ちょっと……何を……」

それを自らの口元に運び、そつと口付ける。

その一連の動作は流れるようだ。

それが、あまりに自然な仕草で。

うつかり止めるタイミングを逃し、その行為を黙つて見つめているしかなかった。

彼はクスッと意地悪く笑い、

「言つたでしょ、Trick or Treat! “悪戯されたくなればお菓子を寄こせ!”……つてね。君は、僕に飴玉をくれなかつた」

わざと少し屈んで覗き込むような上目使いで千恵を見上げた。

破壊力のある美しい面おもてで。

乙女心をくすぐる表情かおで。

かされたような甘い声音で。

とろけそうに甘やかなシチュエーションの中で。

何故だろつ。

心の中に、警鐘が鳴り響いた気がして。

利き過ぎの暖房で、頬は火照る様に熱いのに。

ゾクゾクと、冷たい何かが背筋を這い上る様な嫌な感覚を覚えた気がして。

知らず、息を詰めた。

「千恵ー？ おーい千恵、どこに行つた？」

「……夏也」

人混みの向こうで聞こえた、間の抜けた幼馴染みの声が妙な緊張感を一気に弛緩させる。

詰めた息を大きく吐き出し、声の主を探して辺りを見回す。

……気付けば、彼の姿がない。

入れ替わる様に、

「ああ、いたいた。ほら、飲み物。……コーラで良かつたよな？」  
夏也がストローのささつた透明なプラスチックカップに入つた飲み物を差し出してきた。

「……うん」

「次に出てくるバンドの次が、香奈ちゃんの番なんだ。こんな端っこに居ないでもっと前に行こうぜ」

夏也は千恵の腕を掴んで、ステージ近くへ引っ張っていく。

「『杏杏』さん、ありがとうございました！」さあ、次に登場するのはお待ちかねのこのバンド……『レイブンズ』だあ！！

司会進行のアナウンスがそう告げた途端、きやああ！と女の子達の黄色い悲鳴が重なり、テンションが一気に膨れ上がる。

ステージ上の照明が、赤一色に切り替わり、目に痛いほどの赤い光が部屋を満たす。

そして、ステージ上に現れた男を見て、千恵は目を見開いた。

「あれ……」

悲鳴の嵐の中、千恵の呟きを拾つた夏也は面白くなさそうに、「何だよ、お前もあれがいいのか？こここの常連の女どもも大半がアイツのファンなんだよ。まあ面シラが良いのは認めざるを得ないけどな。ああいう奴つてのは大体がだな」と愚痴りだす。

それを、遮る様に。

「Trick or Treat！ 今宵は俺達にピッタリの夜だ！」さあお前ら！ 俺達に生贊を寄こせ！」

ヴォーカルの彼がマイクに叫び、爆音の響く部屋中に彼の声が突き刺さる。

ワッと涌いた客席から、次々に色とりどりのキャンディがステージ上に投げ込まれる。

歓声の悲鳴の中、時折「京サマ～！～」とか、「京ク～ン！」等と叫ぶ声が混じる。

あのヴォーカルは「京」というらしい。

成る程、パーティの参加者ではなく出演者だったなら確かにパートナーは要らない。

だが……気のせいだろうか。

歌いながら、彼がちらちらとこちらばかりを窺つてゐる気がする  
のは

「キャー、今、京サマと田が合つた！」

「ちょっと、今私の事見なかつた？」

「京クンに見つめられちゃたー！」

……いや。そんな台詞が前から後ろから、右から左から、引っ切り無しに聞こえてくるといつ事はやはり氣のせいなどではない。

そう、思つた瞬間。

再び背筋を冷たいものが這いあがる。

ステージライトを一身に浴び、輝く美しい人。

これだけ多くの女の子を惹きつけてやまない甘い面マスクと美しい歌声。彼は大きなバスケットを手に持ち、中身を驚掴むと、ワッとそれを客席に撒き散らした。

赤い色紙で作られた紙吹雪が、熱くたぎる人々の頭上に降る。

それを目にした千恵の心は、……本当に、何故なのだろう……冷たい手に驚掴みにされたように縮み上がつた。

「次が、俺達の最後の一曲！ 聞け！ 『プラッティ・ローズ』！」

叫んだ彼は、上着の胸ポケットに挿していた真っ赤なバラを抜き取り、客席へと投げた。

真っ直ぐ、一寸違わず、千恵へと。

目の前に迫るそれを、反射的に受け取つてしまつた千恵は、手の中の真っ赤なバラを震えながら見下ろした。

本当に、血の様な色をした真っ赤なバラ。千恵は無意識に一步、二歩とステージから後ずさつた。

「 千恵？」

蒼白な顔でガタガタ震える幼馴染みの様子に怪訝な顔で夏也が声をかける。

「ゴメン、夏也。……私、もつ帰るね」

三歩、四歩。

そろそろと彼の傍を離れ、くるりと身体を反転させる。

ぎゅう詰めの人と人の隙間に自分の身体をねじ込むようにして、一刻も早くその場を離れたくて逸る心を抑えながら早足に出口へ向かう。

何故かは……やはり、分からない。

けれど、何かを求める様に。千恵は出口の扉をぐぐり、狭くて急なコンクリの階段を駆け上がり。

そして、空に浮かぶ月を見上げた。

ツキン、と、訳もなく心が痛む。

グワーン、「ウン、グワーン、「オウン……

街外れに建つ古い教会の鐘の音が、真夜中の12時を告げる。

「……帰ろう」

凍える夜風に身を縮めながら、よく見知った街並みの中を歩き出す。

す。

悲鳴が、聞こえた。

そんな気がして、彼は目を開いた。

その目を上下左右に動かし、周囲の様子を探るが、目に映るのは闇色ただ一色のみ。

だが、自分がひどく狭い場所に横たわっているらしい事だけは、身体に触れる硬くて冷たい感触から知れた。

吐いた吐息がすぐ目の前にあるらしい障害物に当たって、冷たい息が顔に吹きかかる。

強張り、思うように動かない手足を何とか持ち上げて、自分のすぐ真上にある障害物を押しのけ、開いた空間に満ちる空気を大きく吸い込んで。

彼はそこから上半身を起し、左の後ろから右の後ろまで首の関節が許す限りぐるりと見回し

「……どこだ？」

茫然と呟き、そしてゆるゆると口の手に視線を落とし、開いた掌をじっと見つめ、

「私は……私、は……？」

もう一度、周囲を見回して。……掌を、胸に当たた。体温の感じられない、ひどく冷たい皮膚。そこには、心の臓の鼓動も感じられない。

だが、焦がれる様な熱っぽい衝動が、そこには確かにあった。

グワーン、ゴウン、グワーン、ゴオウン……

突然、頭上で耳をつんざく大音声が響き渡る。

真夜中の12時を告げる鐘の音が、無いはずの心鼓を無性に逸らせる。

（……行かなければ、ならない）

訳もなく、彼は思つた。

ガチガチに固まり、出来の悪いカラクリの様にしか動かせない強張りきつた全身の筋肉に鞭打つて、彼は寝床からのつそりと這い出た。

段を降り、幾列も並ぶ腰掛けと腰掛けの間の狭い通路をふらふらと、何度も腰掛けに身体をぶつけながら、その先にある出口の扉を目指して歩く。

一步、また一步。重たい足を運ぶ。

すぐ目の前の扉へ辿り着く。ただそれだけの行為で、体力も気力も根こそぎ失われていく様な感覚に、一步進む毎に次の一步を踏み出す事を躊躇いたくなる……のに。

何故だろう。何か、どうしようもなく抗いがたい何かに惹かれる様に、彼は一步、また一步と歩を進める。

気の遠くなる様な。そんな一步を重ね、重ねてようやく辿り着いた重々しい重厚な扉を、もう底をついて空っぽに近い最後の気力体力を限界まで振り絞り、全身で押し開ける。

開けた瞬間、すぐ目の前の空に浮かんだ大きな月が網膜に強く焼き付いた。

投げかけられる淡い月光が疲弊しきった身体を優しく包み、朦朧とまどろみかけていた意識を研ぎ澄ませていく。

彼は、思わず一つ大きく息を吐き出した。

ようよろと扉から離れ、荒れた砂利道を二歩、三歩、と歩いた所でがくりと崩折れ、地面に膝をついて蹲る。

それでも彼は疲労に震える手足を踏ん張り、再び立ち上がる。

焦がれる様な衝動は、刻一刻と時を重ねねば重ねただけ熱を帯びて燃えたり、 “急げ、” と追い立てる。

ザリツ、と砂利の上で足を引きずるようにながら、彼は心の指示示す方へと、精一杯の一步を重ねていく。

「……行かなくては」

そう呟く彼の声を聞くのは、夜空に浮かぶ月だけ

……

ライブハウスのある駅前の通りから千恵の家までは歩いても15分ほどの距離にある。明るい時なら何でもない道のりだが、こんな時に一人で歩くのはあまり気分の良いものではない。

外気の冷たさ以上に心を占める氷塊が、重くのしかかる。

（早く帰つて、暖かいホットミルクが飲みたい……）

歩く足が、早足から次第に小走りに、やがて駆け足へと逸る。

早く、早く。

寝静まつた住宅街の路地に、突如バイクのエンジン音が響いた。それは千恵の背後から迫り、不意に路面が明るく照らし出された。

「Trick or Treat! ……こんな夜道で君、また

一人なの？」

「……ケ、イ、……どうして？」

「つれない彼氏の代わりに君を奪いに来たんだよ」

「な、夏也は彼氏じゃ……。つうん、そうじゃなくて……」

「……おいで、僕のイヴ」

京は、千恵の腕をとると力任せに引き寄せ、バイクの後ろに乗せた。

「さあ、今宵は僕らに似合ひの夜だ」

すぐさま、アクセルを一杯に吹かし、急発進させる。

千恵は振り落とされないよう、咄嗟に京にしがみ付くしかなくて。

「僕のイヴ。君のその甘い果実を、存分に楽しませて貰おう」

囁かれた甘いセリフに脳髄が痺れる。

バイクは物凄いスピードで、港への路をひた走る。この道の先にあるのは、人気のない海辺の倉庫街だ。

こんな時間にそんな場所へ向かう理由。どう考へても、嫌な予感しかしない。

だが、猛スピードで駆けるバイクの上では、彼の身体に縋る以外、

千恵にできる事など無い。

制限速度を無視したバイクは、10分もかからず田的地区に到着した。

バイクのエンジンを切れば、そこにはただ静かな波音だけがうるさくこだまする。

冷たく強張った身体をぎこちなくバイクから降ろし、千恵はそろそろと後ずさり 倉庫の壁に背をぶつけた。

「ああ……そんなに怯えなくても大丈夫だよ。すぐに済むからさ。痛いのも初めだけだし、慣れればむしろ……」

月を背に、京の顔が迫つて来る。

熱っぽい白銀の瞳が見据えるのは、千恵の首筋。

「ヤツに負わされた傷を癒して、君を見つけるまでに百年かかつたんだ。……もう、我慢も限界だよ」

京の唇から漏れる冷たい吐息が、脈打つ首筋にかかる。

訳も分からぬまま、硬直した千恵は、ギュッと目を閉じた。

両の手の手首を片手で掴まれ、頭上で固定される。

もう片方の手が、首筋にかかる髪をさらい。

その吐息も、肌に触れる皮膚の感触も、ひどく冷たくて。……とても、生きた人間のものとは思えない。

「ああ、僕のイヴ。君はどんな味がするんだろうね……？」

視界が閉ざされた分、より鋭敏に研ぎ澄まされた聴覚が、耳元でささやかれたあの甘い声音に刺激され、思考が揺らぎ、乱れる。

ただ、“嫌だ”という強い感情だけが、千恵の脳裏に強く閃いて。ボグツ、という鈍い音と共に突然両手の拘束が剥がれ、間近にあつた気配が突如遠ざかる。

「……？」

恐る恐る開いた視界に映つたのは。

先程までは確かに無かつたはずの、もう一人の男の姿。

ふらふらと、立つてゐるのがやつとであるのが傍目にも一目瞭然な様子で、男は京と千恵との間に割つて入り、千恵の前に立ちはだ

かる様にこちらに背を向け京と向き合った。

その男の背を、視界に収めた瞬間。

心臓が、爆発した。それくらい強い衝撃が、千恵の胸を揺るがした。

「那由他……お前！ 生きていたのか！？」

頬を押さえて立ち上がった京が、憎々しげに男を睨みつけながら叫んだ。

「な、ゆ…………た…………」

京が叫んだその名を耳にした時、千恵の心臓が、もう一度爆発して跳ねた。

胸の内を怒涛のように満たしていくのは、言い様のない歓喜の渦。ナユタなんて名前を、千恵は知らない。目の前の男の姿に見覚えもない。

「那由他……お前はまた、僕の邪魔をするのか！？」

低く、京は唸る。こちらを見据える赤く燃える瞳が那由他というらしい男と千恵とを刺し貫く。

しかし、心が先程の様に恐怖に縛られる事はなく。代わりに心を占めるのは、焦がれる様な想い。心臓は力強く脈打つては沸き立つ血潮を全身に廻らせ、冷え切っていたはずの身体に徐々に熱がこもっていく。

とろりと、甘くて暖かい優しいものが、千恵の心の隙間を埋めていく。

分からぬ。もうさつきからずつと、自分の心の内に沸き起これる幾多の感情の理由が分からぬ。

けれど、千恵の目からはとめどなく涙があふれ、頬を流れて落ちていく。

その男に触れたくて。

恐らく初対面であろう、誰とも分からず得体も知れない異性相手に抱くにはどう考へても不相応な想いが、何故かどうしようもなく胸の奥を焼き焦がし 千恵は、背を預けていた倉庫の壁から離れ、

一步、踏み出した。

「やつと見つけた、僕のイヴだ！ 今度こそ、邪魔はさせない！」  
京が叫び、地面を蹴ったのはそれとほぼ同時だった。

瞬間、京の姿が闇に融けて消えたのを、千恵の目が捉えるのと同時に、那由他の懷に京が現れ、その横つ面を殴り飛ばし、同時にぐしゃつ、と何かが潰れるような酷く嫌な音が千恵の耳に届く。  
目と耳が伝えるその情報を、千恵の脳がとともに認識するより早く、爛々と不吉に輝く赤い瞳をギラつかせた京が、千恵の背を再び倉庫の壁に張り付けた。

「さあ、僕のイヴ……僕の永久の糧とわのかてとなれ……」

言いながら開いた口からこぼれる真っ白い歯列かみ その、上あごに生える異様に大きな対の犬歯が、千恵の首筋に迫る。

だが、今度は千恵が目を閉じるより早く、京の襟首を掴んで力任せにその身体を引き倒す那由他の、血で真っ赤に染まつた顔へと入れ替わる。

スプラッタ以外の何物でもないその姿は、大の男が悲鳴を上げてもおかしくないだらう程に酷いもので。

だが、千恵は何かを考えるより前に、反射的にその顔に手を伸ばそうとした。……その彼の瞳もまた、京と同じように赤く燃えているのを、確かに目にしていたのに。

胸に浮かぶのはやはり……恐怖ではなく、言い様のない喜びで。

「……那由他……」

しかし、彼に伸ばした手が届くより前に、彼の手を逃れて起き上がった京が振り上げた拳から千恵を庇うように立つた那由他の身体に加えられた衝撃に押しつぶされて意識が飛ぶ方が早かつた。

「……那由他……」

白銀の髪を振り乱し、殴りかかつて来る少年とも青年とも称せそうなその男の拳から咄嗟に背後の少女を庇う。  
腹に正面から入つた拳の勢いを、自由の利かないままの身体では

充分に殺し切れずに、彼の身体は背後の壁面に叩きつけられる。

当然、壁と自分の背との間に挟まれた少女も、もうともに。

せめて、押し潰してしまわぬよう、反射的に腕を引き、背と壁の間に僅かな隙間をつくる。

が、その分、肘と肩、そして後頭部を余計に酷くぶつけ、鈍い痛みに顔をしかめる。その直後、背後の少女の身体がふわりと彼の背にもたれかかってきた。

ハッと背後を見れば、氣を失い、前屈みに倒れ込もうとする少女がいて。その身体を支えるべく、無意識のうちに腕を差し出す自分が居て。

先程から幾度も連呼され、自分が那由他といふ名であるらしいことは察せられた。

この少女をイヴとよぶあの男が、どうやら自分と並々ならぬ因縁のある相手であるらしい事も、さすがに察している。

……だが。少女を抱き止めた瞬間、冷え切り温まるはずのない身体が一気に燃え上がったその理由が、分からぬ。

けれど、目が覚めた瞬間から逸り続けた衝動が、この場所で彼女の姿を網膜に映した瞬間に、大いなる安堵と、突き上げる歓喜へと昇華していくのを感じたのは確かな事実で。

「私は……。彼女は……一体……？」

きゅうと、腕に閉じ込めた少女の身体を抱きすくめるだけで、失われていた全てが、甘く暖かい優しいもので補われていく気がする。もつと、ずっと……永遠に、こうしていられたら。

ほんの一瞬脳裏を過つた想いは、無防備に晒したままだった背に迫りくる気配に焼き消された。

那由他は、腕の中の少女を横抱きに抱えなおし、やおおら振り向くと人には不可能なスピードで殴りかかって来る男に、そのすらりと長くしなやかな脚を振り上げ、脳天目掛けて踵を思い切りめり込ませた。

その滑らかな一連の動きは、それまでのぎこちないカラクリの様

だつたそれとは全くの別物だつた。

彼女に触れている部分から流れ込む熱が、凍りついた全身を溶かしていく。

一気に漲る“熱”<sup>エネルギー</sup>が、空に浮かぶ月の加護を受けて更に増大していく。

強烈な踵落としの直撃を受け、地面に叩きつけられ身体を半分固体コンクリートにめり込ませながらもまだ立ち上がろうと地面に手をついた男に向けて、那由他はその“力”<sup>エネルギー</sup>の塊を無造作に投げつけた。

「……！」

途方もないエネルギーの塊は地面を抉りながら滑り、そのまま海へと落ちても尚、その海面を大いに荒ぶらせながら水平線の向こうまで音速で突き抜けていく。

地べたに伏せっていた為に全身でその直撃を浴びる事こそ免れたものの、身体の半身を根こそぎ灼<sup>や</sup>く<sub>く</sub>衝撃をとともに喰らい、京は堪らず昏倒した。

相手がピクリとも動かなくなつたのを確認してから、那由他は改めて腕の中の少女を見下ろした。

肩ほどまで伸ばした黒髪も、ほんのり化粧を施したまし少し幼さの面影の残るあどけない寝顔も、貧乳とは言わないがどちらかと言えば小ぶりな胸も、どれもがそう取り立てて言つ程魅力あるものとは言い難い。

……正直、何処にでも居そうな至つて普通で平凡な少女。

少なくとも、外見だけを言つならそれ以上の感想を抱くのは難しいはず、なのに。

淡い月明かりに照らされた少女の姿は、いくら見つめ続けても飽き足りない。

腕に感じる少女の重みを、いつまでも感じていて思ひ。無いはずの心鼓が踊る、この感情を何と言つのか……。

クション、と腕の中の少女がくしゃみをした。

那由他は目をぱちくりさせて少女を見る。

人ではない彼が空気の寒暖を意識する事はまず無い。だから、那由他是不思議そうに首を傾げた。

だが、少女がもう一度くしゃみをし、歯をかちかち言わせながら小刻みに身体を震わすのを見て、ようやく得心がいったように頷く。

「……そうか。寒いのか」

しかしそれが分かった所でどうしろといふのか。

周囲は閑散とした倉庫街と、海どが広がるばかりの場所で。自分のこの、冷たいばかりの身体では体温で温めてやる事も出来ない。

「……仕方が無いか」

那由他是、少女の身体を片腕で抱き直し、空いたもう片方の手の親指を口に含んでブチッと犬歯を皮膚に突き立てて傷を穿ち、溢れできた血を数滴、少女の口に含ませる。

「飲め」

そして、命じる。

「お前の記憶を お前の家の在り処を私に示せ」

那由他是、そつと目を閉じ、脳裏に浮かんできた景色に意識を集中させる。

「そうか、お前の名は愛羽千恵あいはや ちえと言つのだな……」

その名を、下の上で転がす。

「千恵……」

その言靈は、この世のどんな飴玉よりも甘く蕩けそうな味がした。那由他是、もう一度丁寧に千恵を抱き直し、静かにその場を離れ、歩き出した。

その背に、月の柔らかな光の加護を存分に受けながら。

そして、その場には気を失つたままの京だけが一人、残されたまま。

月はゆるゆると宙空から西の空へと降り、東の空に太陽の訪れを

予期させる淡い青が徐々に広がりを見せる。

それを待ちわびていたカモメがうるさく鳴きながら飛び交い始め

る頃。

「……那由他」

むくりと、京は身体を起こした。

「那由他。イヴは、僕のものだ」

「

悲しくて、悔しくて。

心にぽつかり空いた埋めようのない喪失感に、どうしようもない  
やるせなさ。

固くて冷たいそれに取りすがり、声を詰まらせながらむせび泣く。  
冷徹なばかりの真っ黒い棺桶。蓋に描かれた銀の十字架は、この  
棺の中に納められたチエの大切な人を更に傷めつける為の印。  
(……せめて、安らかに眠らせて差し上げたいのに)

チエは己の無力を呪つた。

「あなたは、悪魔に騙されていたのですよ」

憐憫の情を声音に乗せ、静かにそう言いながら千恵の肩に手を置  
くのは、この教会の神父を務める祓魔師<sup>エクソシスト</sup>。

チエの大切な人を、この棺に閉じ込めてしまった張本人である。  
「彼は悪魔などではありません。……本当の悪魔に騙されている  
のはあなたの方です」

だが、海を渡つてこの国へとやつて来てまだ日の浅い神父は、チ  
エの言葉を肩をすくめただけで聞き流し、

「淑女<sup>レディ</sup>、あなたは悪魔のまやかしで混乱しているのですよ」

棺に取りすがるチエをそこから離す為に、肩に置いた手を引く。

「那由他様……申し訳ございません。今の私に、力が足りないばか  
りに……封印を解けず……苦しむあなたに寄り添う事すら叶わない

……」

男の腕力の前に、女の力で抵抗するのは難しい。意思に反し、チ  
エの身体は棺から引き剥がされる。

「ですが……お約束いたします。いつの日か必ず、あなたをここ  
からお救いする術を携えて参りましよう」

チエは棺の中の彼に、誓いの言葉を捧げる。

「どうか……その日まで……」

しかし、その後に続ける言葉に詰まる。

「那由他様……」

最後にもう一度、愛しい人の名を棺に投げかけ 棺の安置された部屋の扉が無情にも閉じられ、彼との間に壁となつて立ち塞がるのを、想いの心を断たれる痛みをじつと堪えながら眺める。きゅうと、胸の前で固く拳を握り、その心の痛みに改めて強く誓う。

「必ず、戻ります。愛しい、あなたの許へ……」

今の自分ではいつまでもここに突つ立ていた所で出来る事など泣く事以外何一つ無い。

掴まれた腕を振り払い。

チエは教会に背を向け、歩き出した。 真夏の日差しが照りつける日なたの、その向こうへと。

「いつの日か、またお会い致しましょウ……那由他様……」

最後にもう一度、再開の約束を小さく呟いて。

そして彼女は、この小さな港町の村を旅立つた。

いつ終わるとも知れない旅路へと。

その背に、昼の12時を告げる教会の鐘の音が響いて

グワーン、ゴウン、グワーン、ゴオウン……

「なゆた、さま……」

呟き、腫れぼったい目蓋を持ち上げる。……泣き過ぎたせいだろうか、頭が痛む。

「……田は、醒めたか？」

額に当たられた冷たい手の感触が気持ち良い。

遠くで、教会の鐘の音がする。あるあると時計に田をやれば、針は十一時を指している。

「あれ……私……」

涙に滲む視界を乱暴に拭いながら、千恵は半身を起した。

「もう、良いのか？……気分は  
耳朵に響く、落ち着いた声音が心地良い。

「あ……、はい……」

「ここは……保健室。

「……あれ、私、何でこんな所に……」

いるんだっけ、と。その先の思考へと頭を切り替える前に、背筋が凍る様なあの視線の記憶が蘇る。

「京……」

それは今朝の ホーリーム H.R. が始まる少し前。

「昨日はどうしたんだよ、千恵？」

いつもと同じくがやがやと騒がしい教室で、そう夏也に問われ、千恵は予め用意していた答えを返した。

「ゴメン、人混みとか大音量に酔つて気分が悪くなっちゃって」「は、酔つた……つて、千恵が……？」

しかし、夏也は怪訝そうに眉をひそめた。

「乗り物はもちろん、遊園地のコーヒーカップをメチャメチャに回しまくってさえケロッと平気な顔してるお前が？？」

遊園地　　と言つてもデートとかの話じゃない。大昔、夏也の家族と千恵の家族とで一緒に出かけた、まだ普通に幸せだった在りし日の記憶。

全く、こりう時、幼馴染みというのには厄介だ。なまじ互いを知り尽くしている分、この手の誤魔化しを成功させるのは至難の業だ。

だが、真実を話した所で……どうなるといつのだらう？

千恵はため息をついた。

京に港の倉庫街に無理矢理連れて行かれて襲われそうになつた所を、見ず知らずの男に助けられて……その途中で気を失い、その後の記憶が一切無いまま、目を覚ましたらいつの間にか自宅のベッドの上で眠つていただなんて。

京の目が、赤く光つて……まるで人じやないみたいな動きで襲いかかつて来て……。

そして、助けに入つた見ず知らずのはずの男に胸を焦がしただなんて。

夏也どころか誰一人……正直、自分自身だつて納得させられる自信が無い。

……昨日の様に、自分自身の預かり知らぬ心の奥の感情が、自分の制御の利かない場所で揺れ動くのは、何も初めてでは無い。これまで、幾度かそういう事はあった。

例えば、泊まりがけの旅行に行つたりして、この街を幾日か離れると、何故だかどうしようもなく不安な気持ちになる。

いつでも、何か欠けている気がして。

だが昨日、彼を見た瞬間、その欠けた部分の隙間を埋めてくれた甘くて暖かい優しい何かが、今朝起きて彼の姿を視界に収めることが叶わなかつた時、再びそれが溶けて流れ出した。

そうして再び冷たく空いた心の隙間を、千恵は自覚せざるを得なかつた。

チャイムが鳴る。HR開始の鐘。そしていつもと同じように、チャイムが鳴り終わるとほぼ同時に教室の前の扉が開き、担任の男性教師が教室に入つて来る。

だが、今日に限つてはその後ろからもう一人、先生に続いて教室に入つて來た。

瞬間、女子が浮足立つた。

カツカツと、担任は黒板に白チョークで大きく彼の名を書き出した。

百世京  
ももせけい

透き通るような白銀の髪。真っ白な肌。くりつと幼さを強調する丸っこい目に埋まる瞳の色は 髮色に比べて少し灰の色味の濃い白銀。

甘い面に、魅惑的な笑みをのせて。

「転校生の百世君だ」

「じく短い、担任の紹介の後で、

「……皆さん、すでに僕の顔と名前は『』存じいただいているかもしれませんが。改めまして、今日からお世話になります百世京です。放課後はバンドやつてて。『レイブンズ』って言つんんですけど。そこで僕はヴォーカルやつてます。ちなみにこの髪と瞳の色はたつた8分の1の北欧の血が強く出ちゃつたせいで、僕自身は完全に日本人。もちろんカラオケとか大好きなんで。バンドの練習ある日はダメだけど、そうじやない日はぜひ誘つて貰えると嬉しいな」

……と、ライブのステージ上や、ましてやあの時の様な攻撃的な態度はあくびにも出さず、甘い声音で語る声を聞きながら。

千恵は、全身の血の気が一気に引いて行く音を、耳の奥で聞いた。恐怖に息を飲み。

怯えを隠す余裕さえ無い千恵を見つけた京は、楽しげな微笑みを浮かべてこちらに視線を向ける。

彼の視線に射竦められた千恵の背筋を滑り落ちて行つた氷塊が、全身の血を凍りつかせていく。

千恵の精神が、その恐怖と緊張に耐えられたのはそこまでだつた。

千恵は、教室で卒倒するといつ、夏也に言わせれば真夏に雪が降るくらいに珍しい失態を演じ、保健室にかつぎ込まれて。

彼は一体何者……といつかそもそも人間なのだろうか？

……人でないとするなら。一体、何だといつか？

「京、というのは昨日の男の名か？」

「……え？」

投げかけられた問いに、千恵は声の主を見上げた。

「……そうか。完全にのしたつもりだつたが、日が昇るまでの僅かな時間にこれだけ回復できるとは……大したものだな。成る程、

それで同じ室の中でも共に勉学に励む事になつたらしい、と  
千恵が答える前に、微妙に焦点のずれた彼の瞳が、宙に浮かぶ視  
えない何かを読み解く様に揺らぎ、千恵の記憶ほほそのままの今朝  
の様子を口にした。

あまり具合の良くなさそうな青白い顔の眉間にしわを寄せながら、  
彼は気遣わしげな視線をこちらへ向けた。

その、思わず惹き込まれそうになる綺麗な黒い瞳に映り込むのは、  
驚きに目を見張る千恵の顔。

「愛羽千恵よ。あれが何か知っているか？」

咄嗟に言葉が出ず、辛うじて首を左右に振つた千恵を見た彼は  
困つた様に、さらりと流れる癖の無い艶やかな黒い髪を無造作に搔  
き上げ、

「何やら、私とも因縁のありそうな様子であつたからな……。外国とくべいから参つた私の同族、というのは分かるが……」

じつと千恵の瞳を視線で捉えたまま、  
「余りに長きに亘り封印されていたせいで記憶が混乱してい  
る」

まるで道着の様な、上下とも墨染の袴を着こなした男は、  
「身体も、まだ万全には程遠い……」

その襟の合わせから覗く胸板に右手を置き、

「だが、一つだけ確かな事がある。私を封印の眠りより喚び起しよし、  
今この瞬間も私を乞うてしているのは……」

静かに告げる。

「……お前だろう？ 愛羽千恵」

名乗つた覚えもないのに、彼は当たり前の様にその名を口にする。

「目覚めた瞬間から、こうも私の心を占める……お前は一体、何  
者だ？」

だが、問われた所で千恵には答えようがない。

というかむしろ、千恵こそが彼に聞いたかった。

「私は、気の遠くなる程の昔に大陸から渡つてやって来た、生き  
血を糧とし存在するモノノケだ。この辺りに棲まうよになつてか

らはこの地の民に祀られ土地神を名乗る様になつたがな」

西暦も2千を数えて久しい科学の時代で、彼はそう平然とのたまつた。

……生き血を求めるモノノケ、といふのはつまり

「吸血……鬼……？ 京も？」

赤く光る瞳と、上顎の異様に大きな対の犬歯が、脳裏に蘇る。

「そうだ。……私と比べればはるかに若いが

京に感じる恐怖と嫌悪。

しかし、彼と同族だと自ら認めたこの男に千恵が抱くのは “今この瞬間も私を乞うて” と、男が言った通りの、京に抱くそれとは真逆の感情。

「封印にあらかたの力を奪われ弱体化している今の私では、正直どこまで渡り合えるか自分でも分からない」

自らの手を眺めながら、

「一応、土地神を名乗る以上は、この土地の者に害を為すものを放置できない。だが、今ままでは力が足りない」

苦い笑みを浮かべ、

「あれは、お前を狙っている様だつたが。お前に、あれから身を守る術はあるか？」

千恵に問うた。

首を横に振る千恵に、那由他は

「愛羽千恵。……私と、契約を結ばぬか？」

一つの提案を交渉の卓に乗せた。<sup>テーブル</sup>

「……私は、長き封印の最中、糧を得られず飢え渴いていり

さつき、彼は言つた。

「糧を得さえすれば混乱した記憶も、力も、自然と戻るはずだ。

……私はモノノケだ。本来神と呼ばれる存在とは違うが、それでも土地神を自負する身だ。狩りと称してそこらで見境なく人を襲う化け物に身を堕とす様な真似はしたくない

生き血が糧なのだと。

「 愛羽千恵よ。お前の血を供物として私に捧げる。代わりに、私の加護をお前に授けてやる」

千恵の血を糧として差し出す代わりに、那由他が千恵を守る。

それが、彼の提案。

現状、京という差し迫った危険から身を守る術など持たない千恵がその案に否やを唱える余地など、あるはずもない のに。

「 ……案するな。今ここで無理強いするつもりはない。いきなりでは、混乱もあるだろ？。一晩、考える時間をやる」

言いながら、那由他是そつと千恵の手に何かを握らせた。

「 ……考えを決めるまでは、それを持つていろ。長くは保たないが、一晩くらいの間なら、京避カシけ程度の効果はあるはずだ」

そつと掌を開いてみれば、それは真っ赤な勾玉ストラップの根付ルートで。

「明日の朝、神社の祠で待っている」

それだけ言い置いて、彼は部屋から出ていく。窓から、身軽に飛び降りて……。

そうして、目の前から彼の姿が消えた時、千恵の心の奥に浮かんだのは一抹の寂しさで。けれど、手に残された勾玉を見下ろせば、心の奥がほっこり暖かくなる。

「 千恵え？ 田え覚めたのか？」

からり、と保健室の戸が開き、夏也の声がした。

「 全く、千恵が倒れるなんて……何の天変地異の前触れなんだか。昨日といい今日といい……そんなに体調悪かったのか？」

すかすかと、遠慮なく千恵のベッドの脇に歩み寄ると、丸椅子を引き寄せて腰掛け、ベッドの上にドカッと千恵のカバンを乗せた。

「 もう、昼休みだ。……どうする？ 早退するか？」

決まり悪そに、夏也があさつての方を眺めながら、

「 ……悪い。昨日も気付かないで夜遅くに連れ出したりして……。帰るなら、俺、送つて行くよ。おふくろに頼んで粥くらいは差し入れてやるし」

そう呟くのを、騒々しく扉を開ける音が遮り、

「千恵、大丈夫！？」

「ここがどこだか分かっているのか甚だ疑問の浮かぶ、通りの良過ぎる大きな声で割って入つて来たのは

「……ゴメン風花、心配かけちゃって。大丈夫、大した事は無いから」

夏也をどついて椅子を奪つた親友に苦笑を向けて千恵は答えた。

「やあ、大丈夫かい？ 2日続けて僕に会えたのが気絶するほど嬉しかつたとか？」

もう一つ続けて部屋へ入つて来た声に、

「千恵つてば、あのレイブンズのヴォーカルといつ仲良くなつたの？ 私、前からファンだつたのに！」

この幸せ者め、と、何も知らない風花は千恵を肘でつついてからかうが。その横で、夏也は面白くなさそうに尋ねた。

「風花、お前もか……。でも、転校生が千恵に何の用だ？」

「やだなあ、保健室で寝ている女の子を尋ねる理由なんて一つしかないだろう？」

千恵は、縋る想いで手の中の勾玉をギュッと握りしめ、身を固くした。

クスリと微笑んで、京は平然と千恵の居るベッドへ近づいてくるが、途中でギクリと突然歩を止めた。

「……君。その手に何を持つてる？」

微妙に強張り、引きつった表情で京は尋ねた。

「ん？ ……あ、勾玉のストラップ。千恵、そんなの持つてたつけ？ へえ、可愛いじゃん、どこで買ったの？」

「……那由他か」

京は小さく呟き、そして踵を返した。

「京クン？」

風花が不思議そうに呼び止めると、

「……隣の彼氏クンに噛みつかれそだだから。今は身を引いておく

よ

不敵な笑みを浮かべつつも、足早に部屋を出て行く。

「あー、行っちゃった……」

風花は残念そうに呟いたが、千恵はホッとしながらもう一度掌の中の勾玉に手を落とした。

今彼のあの反応は、やはりコレのおかげなのだろうか……？

「風花、お昼は？」

「んー、購買行こうか学食行こうか迷つてたトロ

「なら、一緒に学食行かない？」

ベッドから降りながら、千恵は風花を誘う。

「ちょっと、疲れが溜まつてただけなの、ホント。午前中ずっと寝てたら随分楽になつたし、お腹も空いたし。この後は現国と日本史だけでしょ？……それより夏也、帰つたら今日の午前中分のノート、貸してくれない？」

「わつきメールで……おふくろが、今晚メシ食いに来いつてい。そん時にもう一回やるよ。それより、俺も学食行く。ラーメン食いてえ……」

「じゃあ行いへ、早くしないと席が無くなるよー。」

追い立てる様に2人の背を押し、保健室を出る。せめてあともう数時間、当たり前の日常に浸つていたくて。

千恵は、那由他の勾玉を制服の胸ポケットにさりと詰ませた。

「那由他様！ ああ、こんなに傷だらけになつて……」

身に着けた着物を、流した血でぐつしょり湿し、息も荒く地面に膝をついた彼に、チエは慌てて駆け寄つた。

「……すまない。若造だと侮り、油断した私が悪かつた。京、と言つたか……全く悪知恵だけは天下一品だな」

「モノノケ相手に、こう言うのも何ですけど……でも、それでも卑劣過ぎます！ よりにもよつて祓魔師エクソシストと組むなんて！」

「私も、モノノケだぞ？ 京あれと同じく、生き血を啜る鬼……化け物だ」

「違います！」

那由他の皮肉なセリフを、チエは即座にきつぱり否定した。

「人にだつて、徳高き良き人も在れば、業深き悪しき者も居ます。モノノケだつて、きっと同じです。那由他様は良きモノノケで、古よりこの地を守り続けて下さる土地神じていじん ありがとうございます」

チエは、大量の出血で冷たくなつた那由他の身体に寄り添い、誇らしげに笑う。

「私は那由他様にお仕えする、あなたの巫女。あなたを癒す糧となれる事、私は嬉しく思います」

そつと頬に触れたチエの手から流れてくる熱を感じながら、那由他はそつと目を伏せた。

「……巫女など。この地の民が私に供えた供物、要は生贊だ。なに何故お前はそうして私に笑みを向けられるのだ？」

頬に触れるチエの手に、那由他是自分の冷たい手を重ねる。

「私がこの地で土地神と呼ばれるようになったのは、遙か昔の事。代々に亘り捧げられてきた巫女の数は両手両足の指の数では到底足りないが……皆、心底怯えた目をしていた」

「それは……村で行われている次代の巫女様を選ぶ儀式と言つの

が、代々の村長の占いで。その占いというのが、……村の年頃の娘たちの名を書いた切れ端を貼り付けた的目掛けで村長が矢を射るという……そのう、大変原始的……というか……正直いい加減なもので、その矢に貫かれた切れ端に名を書かれていた娘が、次代の巫女として那由他に捧げられる。

「自分が巫女になるなんて、考えもしなかった娘が大半なんです。普通に恋をして結婚して、子を産んで育てて……。そんな普通の幸せを望む娘が、突然巫女にされるのです」

当たり前と思っていた未来の幸せを、突然奪われれば

「不安に思つて当然なのです。決して、那由他様のせいではない

……」

コツンと額を合わせ、

「私のうちは……貧乏なくせに、きょうだいがたくさんいて。大姉さまは舶来物の反物を扱う大店へ、小姉さまは港の宿屋へ奉公していましたし、私や妹たちも、遅かれ早かれいはずれは何処か他所へご奉公にあがる事になつていきました」

チエは静かに目を閉じた。

「でも、私は巫女になりたかった。あなたの巫女になるのが、私の夢だったから」

遠くで、祭り囃子の笛と太鼓の音がする。 今日は、村の春祭りの日。

「昔、村の禁域で迷子になつた私を助けて下さつた、優しくて綺麗な土地神様に、もう一度お会いしたかったから……」

「迷子……もしかして、10年前の……あの？」

「はい。あの時は……両親やきょうだいが、揃つて風邪をこじらせて寝込んでしまつて。でも、うちちは貧乏でしたから。薬はもちろん、精のつく食べ物も買えなくて」

土地神である那由他が祀られた社のある山は、薬草も、木の実や山菜も豊富に採れるが、ここは神域であり、村では禁域とされている。

「けれど、まだ幼かつた当時の私は必死になるあまり……禁を破つて山へ登り……」

田につく薬草や山菜を夢中で採るうちに脇道へそれ、帰り路が分からなくなり……

「迷子になつて、途方に暮れて……。泣きたくなつていた所へ……ふと現れ、麓まで手を引いてくれた方がありました」「面倒くさそうな顔をしながらも、幼子の足に歩調を合わせて歩き、別れ際には貴重な薬草を黙つて渡してくれた。

それはとてもきれいな黒い髪と黒い瞳をした男の人。

「あの後、うちへ帰つてあの薬草を煎じて家族に飲ませたら、皆の具合もすぐに良くなつて……。あの方が土地神様だつたのだと……もう一度お会いして、お礼を言いたかつたけれど……」

本来は、巫女に選ばれた者のみが入る事を許された場所だ。子どもがそう何度も立ち入れるような場所ではない。

「だから、あの年の春祭りで次代の巫女様を選ぶ占<sup>せん</sup>で、私が選ばれたと知つた時……本当に嬉しかつたのです」

5年に一度だけ、そこから先の路は拓かれる。前任の巫女が任を降りて山を下り、新たな巫女が任に就く為に山を登る路。

5年間、那由他に血を捧げ続けた巫女がそそくさと逃げる様に去つていいくのを見送つた翌日、新たな巫女を出迎える為、那由他是そこに立つていた。

哀れな生贊に、残酷な事実を告げる為、怯えきつているだらうはずの巫女を待ち受けて。

那由他とて、無駄な恐怖を抱えたくてやつてている事ではない。

下手に誤魔化すよりは、実際の所を正直に伝えてやる方が彼女たちの為には良いだろうという那由他なりの考え方。

だから、縁日の屋台を見に来た様な、実に楽しげな笑みを浮かべながらその路を上つて来た、歴代の巫女の中でも比較的年若い娘を

見て、まず拍子抜けした気分になつたのだ。

そして、那由他の姿を見つけた少女の顔に、“花が綻んだような”と称すに相応しい、喜色に満ちた笑みが浮かぶのを見て、驚くと同時に憐みを覚えた。

きっと、まだ幼すぎて、自分に課せられた運命の意味をよく分かっていないのだろう。そう思い、那由他是子どもにも分かりやすい簡単な言葉を選びながら告げたのだ。

自分は村で言われている神と呼ばれる存在ではなく、ただのモノノケで。血を糧とし存在する鬼なのだと。

そう告げたところ、彼女はニコニコしながら「そうなんですか」と普通に相槌を打ち、「私はチエと申します」と、平然と自己紹介など始めた。

大いに調子を狂わされながらも、那由他是どうにかもう一つ、一番肝心な事を告げた。

巫女の一番大切な“仕事”の内容。那由他の糧として血らの血を捧げる事こそが、“巫女”としての最大の務めなのだと。

お前は生贊で、だから血を化け物への供物として差し出せ、と。そう告げられた途端、顔が恐怖で染まり、逃げ出そうとするも腰を抜かし、泣き喚く娘も少なくなかつた。　といふのに。

彼女はただ、不思議そうに少し首を傾げただけだった。

那由他はさすがに不安になつてきた。

（どうしよう、この娘……馬<sup>バ</sup>……いや、少々頭が弱いのかもしね……）

とにかく告げるべき全てを伝えるべく、言葉を継いだ。

巫女の任期は最低5年。任期を務めあげた後で巫女を降りて村へ戻ればその後の生活は充分な年金が保障されている事。しかし、任期の途中で逃げ出せば、一族郎党村八分にされるだろう事。運悪く貧乏くじを引いたのだと諦め、5年我慢しろ、と。

そう、あの時那由他是言った。

そして、今日はあれからちょうど5回田の春祭りの日。5年に一度のその日、ここから先の路は拓かれる。

「お前にはもう、巫女でいなければならぬ義務は無い。私に血を捧げる必要も、もう無い。村へ……あの祭りの賑わいの中で、他の年頃の娘たちと同じように……」

那由他は、意地の悪い皮肉な笑みを浮かべながらチエに言つ。

「好い男を見つけに行つても良いのだぞ？」

そつと、チエの首筋に視線を落とし、指で肌をなぞりながら。

「5年前のあの日……巫女として私の糧になれと言われて動じもしなかつたお前なら、きっとどこででも強く生きていけるだろう」  
言われて動じもしなかつた……どころか、そう聞かされた直後に那由他の牙を受け、実際に血を啜られても尚、平然と笑い、この5年、くるくると良く働き甲斐甲斐しく那由他の世話を焼いてきた娘の、間近に迫る瞳に瞬間、怒気が閃いた。

ガツンと鈍い音と共に、視界に星が散る程の衝撃がもろに額に加わる。

……チエに頭突きを喰らつたのだ。不意に離れたチエの体温を名残惜しく感じながら、那由他是顔を真つ赤にして憤慨するチエを呆けたような顔で見上げる。

両手を腰に当て、仁王立ちしたチエは、尻餅をついた格好の那由他を見下ろし、声高に宣言した。

「チエは、今も、これからも、ずっと那由他様の巫女です。村には戻りません！」

いつも笑つていて、滅多に泣く事なんか無かつたチエの田から涙がこぼれた。

「だつて……私が好いた方ならもう田の前にいらっしゃいますもの」

チエの顔が、更に赤く染まつていく。

「不敬だと……大それた想いである事は良く分かつております。でも、もしも許されるのなら……那由他様のお傍に在りたいのです

「不敬……？ 私は、神ではない。モノノケだぞ……？」

それも、生き血を啜るおぞましき化物<sup>モノノケ</sup>。

それを怖れ忌避した村人たちが、自らに害が及ぶのを避けようと生贊を供物として捧げたのがいつしか因習として根付き、そのおぞましさを包み隠す様に、生贊は巫女と呼ばれ、化け物はいつしか土地神と呼ばれるようになつていていたというだけで。

「生き血を啜らねば 巫女<sup>かで</sup>を欠かせば私は存在できない。私の傍に……私の巫女として在るという事は、私の糧で在り続けるという事だ。それを、お前は望むのか……？」

祓魔師につけられた傷は、モノノケであるが故の圧倒的な回復力で大半はもう治りかけているが、出血により大量に失つた熱は、新たに生き血を吸い補充しなければ戻らない。

冷たく凍りついた身体は、チエの血<sup>ねつ</sup>を欲して飢え渴いている。耳に届く、トクトク高鳴る心鼓が こちらを見つめる、熱っぽく潤んだ瞳が 血が上り赤く上氣した頬が そして何より、真っ直ぐ那由他に向けられたチエの偽り無き想いが 那由他の欲を煽る。

そう、あの時も 。

本当なら、その必要はなかつた。一昨日、前任の巫女から最後の吸血を済ませたばかりで、身体にはまだ熱と力が満ち溢れていたから。

しかし、百聞は一見に如かずと。実際に血を吸われば、さすがに理解<sup>わか</sup>るだろう、と。

那由他是彼女の首に牙を突き立てた のに、彼女は。牙が肌に食い込んだ瞬間こそ痛みに顔を歪めはしたが、すぐにポーつと酔つた様な表情に変わつて。

……那由他と同種のモノノケには、血を吸う際に人を酔わす力がある。

元は本当に、酒に酔つたような酩酊感を与える程度のものだが、

年を重ねる毎にその力は強くなり、百も歳を重ねれば性的な快楽に溺れさせる事も可能になる。

那由他ほどに年月を重ねれば、その力は更に強まり、吸血された人間は途方もない多幸感に酔わされることになる。

だがそれも、血を吸われている間だけの事。酔いから醒め、自分が何をされたのかを知れば……きっと。

そう、思っていたのに。

ハッと、我に返り那由他を見上げ、彼女が最初に浮かべたのは笑顔だった。

不安や恐怖を隠す為に無理に貼り付けたものではない、心からの笑み。

あの時、那由他是言葉を失い、脱力して近くの木に懐くしかなかつた。

「私は、初めてお会いした10年前のあの時からずっと、那由他様の事が好きでした。この5年、毎日那由他様のお傍でお仕えし、日々を過ごす毎にこの想いは募るばかりで……もう、私一人では抱えきれません」

強張る身体でぎこちなく立ち上がり、餓えに揺れる瞳で那由他が見つめる先。

チエは着物の襟元を寬げくつろて首筋を晒し、那由他を抱き込むように彼の頭部を引き寄せ、そこへ導く。

「この想い……私の心血の全て……那由他様に捧げたい」

本能に抗い切れなくなつた那由他が堪らず牙を剥き、チエの首筋に咬みついた。

牙が肌に刺さる瞬間に感じる痛みは決して小さくはないが、その痛みをやり過ごした後にやつて来る感覚に、痛みなど記憶の彼方へ軽く押し流される。

酔いそうなほどの、強烈な多幸感。

過去に那由他の巫女としてあがつた少女たちは、当たり前の未来

を奪われたせいでただでさえ不安感で一杯のところへ、自分が化け物へ捧げられた生贋なのだと告げられ、血を吸われて恐怖で満たされているはずの心が感じる、その感覚に強い違和感を覚えて面食らい、畏れた。

だが、チエは最初から人ではないと知りながら、那由他を好きになつたのだ。

だから彼がまず初めに告げた“神ではなくモノノケ”宣言も、彼の自己紹介くらいにしか思わなかつた。

血を捧げろと言われたのにはさすがに戸惑いはしたけれど、元々彼と再び会えた喜びで一杯だった心に雪崩れ込んだ多幸感に酔わされて、そんな瑣末な感情など忘却の彼方へ吹き飛び、ただ彼の傍に居られる幸せに、チエは心からの笑みを浮かべたのだ。

そして今も、チエの血が、奪われた生命力を満たし、凍りついていた那由他の心身を温め、傷ついた彼を癒しているのだ。

彼を癒す糧になれる事を嬉しいと思う事はあっても、血を吸われる事を嫌だと思った事は一度もない。

飢えを満たし、血で染まつた唇を手で乱暴に拭う那由他を、やっぱりにこにこ嬉しそうな顔で見上げるチエを見て、彼は諦めたようにため息を吐いた。

「モノノケである私はお前たち人と違い、糧を断たれるか、余程の損傷を負わされぬ限りは老いも死もない」

寂しそうな顔で那由他は言った。

「チエよ、私と永久を生きる覚悟はあるか？」

「……かく、『J』……？」

見慣れた我が家の中室に鳴り響くのは、風花に貰った昨今大人気のアイドルグループの最新曲の着メロ。目覚まし代わりのケータイのアラームだ。

「夢……？」

そういえば……昨日、保健室で寝込んでいる間にも妙な夢を見た様な気がする。

ベッドから身を起こし、ケータイで時間を確認する間に、眠気と一緒に夢の記憶も霧散して消え、代わりに昨日の記憶が蘇る。

『お前の血を、私に捧げる。代わりに、私の加護をお前に授けてやる』

彼から渡された勾玉は、確かに昨日一日京から千恵を守ってくれた。いや、それ以前に京と初めて会ったあの夜も、千恵は彼に助けられている。

その貸しにかこつけて血を要求する事、だつて出来ただろうに、彼は律義に契約を持ちかけ、一晩の猶予とその間の護りまで与えてくれた。

モノノケだと言いながら、神であろうとする、おかしな男。

一晩じっくり考えても、やはり彼の助力に頼る以外に京に対抗する手段など思いつかない。

……十字架とか、ニンニクとか、思い至らなかつた訳ではないけれど。本当にそれが有効である保証はない。

現に京は真っ昼間の学校に現れた。……太陽は、平氣だったという事だ。と、なればそれに続く弱点の数々の信憑性も怪しくなつてくる。

何故、那由他を見て心が揺らぐのか。何故、本性を現す前から京に恐怖を覚えたのか。……まだ分からない事だらけだが。

今、千恵に選べる未来が一つだけなのは理解する。  
為す術もないまま京に好いようにされるか。

那由他の提示した契約を飲み、血を捧げる代わりに彼に守られるか。

迷うまでもなく、選ぶなら当然後者だ。

……でも。那由他にそう持ちかけられるより前 初めて彼の姿を目にしたあの瞬間から、それを望んでいた様な気がするのは……本当に気のせい？

彼のあまり具合の良くなさそうな青白い顔を見て、首のあたりが疼いた様な気がしたのも、本当の本当に気のせい……？

霧散したはずの夢の名残が耳奥で囁く。

（ 那由他様…… ）

「……もう、行かなくちゃ。早くしないと、『寄り道』する時間が無くなっちゃう」

朧な夢を振り払うように、千恵は急いで身支度を整え、家を出る。

この街には神社は二つある。一つは少し前まで正月の度、毎年家族で初詣に出かけていた氏神様の社。そしてもう一つ、今は既に廃神社となっている社が、千恵の通う高校の裏にある山にある。

昨日那由他はどちらの社が明言しなかった のに。

千恵は当たり前の様にいつもの通りに学校への道を辿っていた。

高校までは、自転車を飛ばせば10分程度で着ける。

千恵は一度校門を入つて学校の駐輪場に自転車を置き、裏門へ回った。表の路を通るより、こっちの方が幾分か近道ができる。鍵がかかった門をよじ登り、向こう側へ飛び降りる。まあ、慣れたものだ。一本、舗装もされていない狭い路地を挟んだ向こうに、その荒れ放題の小山が鎮座している。

今はもう、誰も通る事のない獣道の様な参道の小道は、傾斜は大したことはないが、手入れのされていない下草や小枝が道を塞ぎ、

搔き分け搔き分けしながら進まねばならず、体力にはそこそこ自信のある千恵も、山の中腹にある祠を見つける頃にはさすがに息が上がりっていた。

ずっと昔、戦前より更に前には、頂上に小屋の様な社があつたらしいが、今は鳥居すらなく、申し訳程度に古ぼけた小さな祠だけが残っているだけ。

那由他は、その祠に背を預け、地面に座り込んでうつらうつらと眠り込んでいた。

衣服が朝露に濡れている。もしかして、こんな所で一晩明かしたのだろうか？

風に吹かれた木々がざわめきを奏で、彼の前髪が風に遊ばれさらりと揺れる。

もう、11月だ。朝晩の冷えは厳しく、風も冷たい。野宿をするには辛い季節だ。

だが彼の寝顔は比較的穏やかで、木々に囲まれたこの場所で眠る彼の姿は一枚の絵画の様だつた。

その画に、千恵は何故か既視感を覚えた。いつだつただろうか、こんな風な景色を何処かで見たような……そんな気がするのも、やはり氣のせいなのか……。

起こしてしまつのが躊躇われる程、良く眠っている様子の那由他に、千恵はそつと近づき、肩に触れた。

熟睡しているらしいところを起こしてしまつのは心苦しいが、一応約束の時間だし、あまりゆっくりしてると学校に遅刻してしまふ。

そうして触れた那由他の肩は、氷の様に冷たかった。

「もう、こんな所で眠るから……」

でも、ここには確かにこの土地の土地神を祀つていた神社の跡で、彼は確かにこここの土地神で。

もしかしなくとも、昔はあつたという社が、彼の家だつたのだろうと思い当たり、ツキン、と心の奥が痛んだ様な気がして。

それを振り払つよつて、名を呼び、肩を揺すりつけて はた、  
と。

……さて、何と呼ぶべきだらうか？

いきなり呼び捨て、といつのはどうかと思つて。くんとかさん付  
けで呼ぶのも何だか違つ氣がする。

「……那由他様？」

呼びかける、といつよつその響きを試す様に口の中で頃がした名  
前に、ずっと規則正しく上下していた那由他の肩がピクリと動き、  
呼吸のリズムが崩れた。

「……チ、ヒ？」

ゆつくつと皿蓋を重たそうに持ちあげ、寝起きで掠れた声で名を  
呼ばれた。

こつして間近に見ても、顔色こそ不健康そうな青白い色をしてい  
るが、まつ毛は長いし、彫りが深く鼻も高過ぎず低過ぎず、形の良  
い唇も 全てが完璧な造作をしており、それを全て詰め込んだ綺  
麗な顔で、上目使いに無駄に色氣のある声でささやかれたら……

「ああ、……もう朝か。すまない、寝過してしまつたよつだ」

周囲を見回し、空を見上げてから、那由他は少し目を伏せ、

「私にとつて血ハネルギーは生命力そのものでな。長く欠かせば身体は冷えて  
凍り、動く事すらままならない。……もしも今、身体に大きな  
損傷を負えばひとたまりもなく私は消滅するだらう」

肩に置かれた千恵の手に自分の手を重ねた。

直に触ると、まるで冷凍庫から出して来たばかりの氷水みたい  
に冷たい、那由他の手。

だが千恵は、それよりも彼の言葉に冷や水を浴びせられた気がし  
た。

力チンド、急激に冷えた心と反比例するように頭に血が上り、ス  
イッチが入る。

「そう。じゃあ、あなたと違つてたぶん生命力に満ち満ちて元気  
一杯なんだろう京クンをどうにかする方法は？ 十字架とか二二二

クとかで何とかなる?」

自分で思うより随分と低い声が、思わず口をついて出た。……しかしもタメ口。

「……ならないな。ついでに言えば、聖水や流水、<sup>じゆいすい</sup>外国の神の書とやらも役に立たないぞ」

しかし那由他がそれに目くじらを立てて咎める事はなく。

「銀と炎は……喰らえば確かに大きな痛手となるが、……」

淡々と答えを返す途中で那由他が濁した語尾に続く内容は、あの日の夜の戦闘を目の当たりにした千恵には良く分かっていた。

「当てられなきや、意味がない?」

語尾を引き取りながら、ふつふつと沸き立つてくる感情に千恵は満面の笑みを浮かべる。

「ねえ、あのさ。何で私がこんな朝っぱらから山登りしてまでこんな所へわざわざ出向いて来たと思つてるの?」

無駄に綺麗な顔が何だか小憎らしく見えてきて、思わず手が出る。

「分かってるよ、私の力じや京をどうにかするなんて逆立ちしたつて無理だつて事くらい、最初から…」

むによ〜ん、と両手で彼の両頬をつねり上げ、左右に引っ張つてやる。

触れた肌はやはりひどく冷たかつたけれど、存外に柔らかく、人のそれと変わらない。

「あれだけ人並み外れて暴れる様を目の前で見せつけられたら、どんなバカでも分かるよ。私じゃ……普通の人間じゃ、到底適わない。京にも、あなたにも」

良く伸びる頬を力いっぱい引っ張り、つねり上げる。

「京は私を狙つてる。どういう理由かなんて知らないけど、初めて声を掛けられた瞬間からずっと、心の中は恐怖と嫌悪で一杯。……それこそ、うつかり気絶なんかして保健室に担ぎ込まれちゃうくらい。……でも、」

その暴挙にさすがに驚いたのか、見開いた目をぱちくり瞬かせた

彼を見て、千恵は少し溜飲を下げ、彼の頬から手を離す。

「でも、あの時あなたは私を庇ってくれた。昨日くれた勾玉の効果もてきめんだったし」

その頬は僅かに赤くなつていて。

「何よりあなたが言つたのよ、『契約しろ』、『守る代わりに血を差し出せ』って」

その片頬に、千恵はそつと手を伸ばした。

「学校の成績は正直良い方じゃないけどさ。でも、そこまで馬鹿じやないつもりだよ、私」

那由他の目を真っ直ぐ見つめて言う。

「今なら私の力でもあなたを消せる? ……そんな事していったい何になるの?」

唯一助かる可能性のある道を自ら潰すなど、愚行の極みとしか思えない。

「……肚はらを決めた、と?」

「そうだよ。一応これでも、それなりに覚悟は決めて来たつもり。だって、その為に来たんだよ。あなたが言つた“契約”を成立させる為に」

そのつもりで来たのは本当だけど。でも今、彼をこのまま放つておいてはいけない様な気もして。

「で、私はどうすればいいの? 契約書かなんかにサインとかすればいい?」

「書状の類など、我らモノノケ相手の契約には必要ない。我らモノノケにとつて、言靈の契約は絶対だからな。お前はただ宣言すれば良い。だが、一度成立した契約を破棄する事は不可能だ。破れば最悪の場合お前の命がその代償となる可能性もある」

那由他と名の通り、遙かな時を重ね続けてきた威儀を最前面に押し出し、彼は千恵の問いに答えた。

今の今まで、外見は千恵とそつ変わらない年頃に見えていたのに。

……その途端、彼が悠久の時を生きてきた“モノノケ”なのだと改

めて思い知らされる。

「 厳かな迫力に満ちた雰囲気。たとえ身体は弱っていても、その精神は健在。」

外見の、人並み外れた美しさ以上に、それがとても綺麗なものに思えて。

自分の預かり知らぬ所で動く心の奥の感情とは関係なく、千恵自身で確信した。

この那由他と京とはまるで違う存在なのだと。

同族だと、那由他是言ったが。確かに種族としては同じなのかもしない。でも、違う。

だから、大丈夫だと。この選択は間違いなんかじゃないと、信じられた。

「私は、あなたと契約する。あなたに私の血を捧げる。代わりに私を守つて。」

「…………」

千恵の宣言に、那由他是一呼吸の間を置いてから、

「…………いいだろ。お前の血と引き換えに、私の守護をお前に与えよ。」

頬に触れていた千恵の手を取る。

もう片方の手の指を、自分の口元に運び、ガリッと牙で傷をつけ、ジワリと滲んで来た血で千恵の手の甲に何かの紋様を描いた。

血で描かれたその紋様は、完成すると同時に肌に吸い込まれていくようにして消える。

「えつ、…………これは？」

「私の“印”だ」

那由他は苦しげな吐息と共に答えをこぼした。

「我らモノノケは本来、己より永き時を存在したものには逆らえない。私より後にこの世に生じたものに、私の“印”に逆らう事は出来ない」

……心なしか、彼の顔色が更に白くなつた……ような

「あの勾玉と、原理は同じだ。あれは、私の“印”そのもの。私より若い京が私の“印”に抗うのは難しい」

眉間にしわを寄せて田を閉じ、背後の祠に体重の殆どを預けてもたれる。

「だが、ああいう形態かたちの“印”は長くは保もたない。一日か、長く保つてもせいぜい三日で消えてなくなる……が」

ゆっくり息を吸い、そして吐き出して。

「……こうして刻んでおけば、私との契約を続ける限りは消えず、に効果も持続する。取り敢えず一先ずの護りにはなるはずだ」

意を決した様に、祠に縋りつくようにしてふらふらと立ち上がる。

「しかし、あの京というものの、侮ってはならない気がする」

言いながら、よろよろと今にも倒れそうな足取りで一步踏み出し、

「それに、“印”でただ守るだけでは何も解決しない。私が直接赴く必要があるだろう」

ここへ來るのに千恵が使つた道を降りて行こうとする。

「ちょっと待つた」

千恵は那由他の腕を掴んで引き止めた。

「赴く……つて、学校に行くの？」

……掴んだ腕が、さつきより更に冷たくなつていてる気がする。

「そのつもりだが。……何か、問題でも？」

「いや、学校に來るのは構わないし……つていうか私的にはむしろ心強いし、ありがたいんだけどさ」

振り向いた那由他の顔はやはり辛そうにしかめられている。

「そんな状態のままで行くつもりなの？ そんなふらふらな状態で行つて、京に勝てる？ ……無理だよね。だつて昨日、自分で言つたんだよ。『力が足りない』から『どこまで渡り合えるか分からない』って。それに、今さつき言つてたよね。『血がないと動けない』って」

那由他の腕を掴んだまま、千恵は彼に一步近づいた。

「……報酬とは、何かを為した謝礼として支払われるべきもの。

……私はまだ契約の約定を何一つ為していない

千恵は、その彼の誠実で律義な答えに感心しつつも呆れ返るしかなかつた。

「あのね、だからってあなたが京にやられちゃつたら意味ないじゃないの、もつ……」

掴んだ腕を強く握りしめて、

「なら、昨日の勾玉分と、その前に庇つて貰つた分のお礼つて事ならどう?」

彼と向き合つた。

「だつて、山を下り切るまでに倒れそつに見えるんだもん。そんなじや、私が困るの。だから、行くなりまづはちゃんと力を回復させたからにして」

「……良いのか?」

那由他は苦笑みを千恵に向ける。

「怖いのだろ?……心の臓が先程から騒ぎつぱなしだぞ?」

ここで那由他を見つけた瞬間からドキドキしつぱなしだつた心を見透かされ、千恵は思わず那由他の着物の胸倉を掴み、

「そりや、平気じやないよ!? 当たり前でしょ!」

力任せに揺さぶつた。

「いきなりモノノケだのなんだのつて分からない事言われて、悪夢みたいな事態に巻き込まれてパニくるなつて……そんなの無理に決まつてるじやない。しかも、血を差し出せとか言われて、平常心を保つてられる訳ないでしょ?」

火照つて熱くなつた顔を、那由他の冷たい胸板に埋める。

「でも……何でかな。分かんないけど、怖いとか嫌だとか……どうしても思えないんだ」

合わせの裾を強く握りしめて。

「……平気じや、ないけど。怖くはないから……大丈夫」

那由他の手が、どんどん熱を孕んでいく千恵の頬に触れる。その冷たさが、今は心地良い。その冷たさが肌をなぞりながら首筋へと

降りていき、制服の襟元辺りで止まる。千恵は意を決してブラウスのボタンを一つ、二つ目まで外し、那由他の顔を見上げた。

「お願いだから、なけなしの覚悟を溝に流すような真似はしないでよね」

少しの強がりを含めて、軽く睨んで。

「良いんだな？……それなりに痛みも伴つが、それでも？」

据え膳を前にしながら……本当に、どこまで律義なんだろう、このモノノケ様は。思わず心の中で突つ込みつつ、脱力しそうになる。

「何、私の覚悟を試してるの？　あのね、ここまでしといて今さら嫌とか言うワケないでしょ。いいから、せつやとその今にも倒れそうな状態、何とかして」

「……分かった。私からすればありがたい申し出だ、正直助かる」  
那由他の片腕が、千恵の背を支える様に後ろに回され、首元の手がうなじにかかる髪を後ろへ梳き、襟を開く。

「すぐに済ませる。痛むが、少しの間我慢している」

そう言って、那由他は口を開いた。

綺麗に並んだ真っ白い歯列の上あごで鈍く光る一本の牙。千恵の首筋を見つめる瞳は、やはり相当抑制していたのだろう、熱っぽく揺らぐ瞳に渴望が見え隠れしている。

それは、あの時の京に襲われた時と殆ど違わぬ光景であるはずなのに。

こうして千恵を捉えているのが那由他であるだけで、喰われようとしている事に変わりないのに。

それでも、あの時の様な恐怖や嫌悪は涌いてこない。

唇が首筋をなぞり、ある一点で止まる。

あ、……と。思つた次の瞬。

肌から唇が僅かに離れ、グッと、牙が肌に押し当てられた。服の裾を握りしめた手に力を込め

そして。

ブツツ、と、思つて以上に生々しい音がして。那由他の牙が肌を貫き、深々と打ち込まれる。

「 」

牙が刺さる瞬間の鋭い痛み。牙が埋まつた傷口を強く吸われる、鈍く疼くような痛み。思わず上げそうになつた声を何とか喉の奥で押し殺し、服の裾を握つた手を更に強く握りしめる。

……大丈夫、我慢できない痛みじやない。

耳元で那由他が傷口を強く吸い上げ、血を啜りあげては飲み込むかなり生々しい音を聞きながら、詰めていた息を静かに吐き出す。

本当に、血を吸つてゐんだなあ、などと埒もない事に思いを巡らせた。その時。くらりと、一瞬、酩酊感を覚えた様な気がして。

「 ？」

ドクン、と一拍心臓が跳ね、続けてトクトク刻まれる鼓動に高揚感が高まる一方で、暖かな春の日だまりの中でうとうとしているようなぼんやりとした夢心地気分が瞬く間に物凄い勢いで心に満ち満ちて。

溢れんばかりのそれに押し流される様に、抱えていた不安やら何やら、今の今まで我慢していたはずの傷の痛みも全部が意識の外へ消えていく。

そうしてまつさらになつた心は至福一色に染まる。

それは……例えば宝くじに当たつたとか、そんな時に感じる安っぽい幸せではなく。もっと深くスケールの大きい……安心感に満ちたもので。そう、きっと大切な人と想いが通じ合つた瞬間に感じる様な……

「……千恵」

名を呼ぶ那由他の声に、ドクン、と。一際心臓が大きく跳ねた。心地の良い酔いの中にあつた意識が、現実に舞い戻る。

いの一番に間近にある那由他の顔が視界一杯に映り込み、ドカンと心臓が爆発した。

「……大丈夫か？」

熱を測る様に額に那由他の手が触れる。

「あれ……あつたかい？」

さつきまで、氷みたいに冷たかったのに、ちゃんと人肌の温もりがある。気付けばそれは額に触れる手だけじゃない。背を支えている腕も、合わせから覗く胸板も。

青白かつた顔色からも具合の悪そうな青さが消え、小憎らしい程白くて綺麗な顔に、那由他は柔らかく慈愛に満ちた苦笑を浮かべていて。

「……もう、いいの？」

強く握り過ぎて皺くちゃになつた裾から手を離し、やけにトコトコ「うるさい心音を誤魔化す様に尋ねた。

「この通り……冷えて強張つていた身体も程良く解け、全身に熱が満ちている。体調は万全だ。力も幾分か戻つた様だしな」

言いながら、那由他は一步千恵から離れ、そつと背を支えていた腕を解く。

「それより、お前の方は大丈夫か？ 一度に吸い過ぎないよう加減したつもりだが……何しろ余りに久方ぶりだつたものでな……」

僅かに目を逸らす彼の足は力強く大地を踏みしめ、先程の様にふらつく事なく真つ直ぐ立つてはいる。

「多分……大丈夫だと思う。私、血の氣多いから貧血で悩んだ事なんか一度もないし」

とは言え傷口に絆創膏を貼るくらいはしておくべきだろ？ が、と傷に手を伸ばし

「……あれ？」

そういえば、傷の痛みを感じない。……と、いうか

「傷は……？」

「もう、治つているはずだ。お前は私の“印”を持つてはいるからな」

「え……、何、どういう事？」

「私は『永らく』の地に棲まい、この地に棲まつ地靈の主も務めていたからな。……封印されている間にだいぶ減つてしまつた様だが

……まだ、この位は　」

おもむろに手を伸ばし、山を下る道の先を指し、

「この地を加護する風伯、その眷族たる鎌よ　我が名のもとに具現せよ」

威厳ある厳かな声で静かに告げる　その直後、ざわりと何かの気配が急激に高まり、凄まじい鎌鼬かまいたちがまるで衝撃波の様に放たれ、道を覆っていた下草や枝葉が一瞬のうちに切り裂かれて伐採され、下へと落ちる。

「……と、まあ、この地の地靈を従えているのでな。私の“印”を持つお前もその力の加護を受けられる。今の様に治癒力を高めて傷を癒したり……な」

モノノケの頂点に立つ、山の主　那由他。

「さて、では行こうか

木々の向こうからチャイムの音が小さく聞こえ。

千恵は差し出された手をキュッと握りしめた。

夢と現実の狭間に居る様な不思議な気分になりながら、彼について歩く。

繋いだ手の温もりに、懐かしさと切なさとを感じながら……

「……ちょっと待て」

那由他に手を引かれ、来た時の半分以下の時間で学校の裏門まで戻つて来た千恵は、来た時と同じように門を越えようと、門に手を伸ばし足を掛けようとした所で、微妙に引きつった顔をした彼に止められた。

「千恵。……お前、何をしている?」

「うん? そりや、もちろん門を越えようとしてるに決まってるじゃない。ここを越えなきゃ中に入れないし」

昔は夏也や悠兄たちとあけこめでわんぱくをしてはしおつちゅう親に叱られていた千恵にとって、この程度の門を越えるなど朝飯前。だから、当たり前の様にそう答えると、

「その格好で、か? 千恵……取りあえず、まずはそこから降りろ」

那由他是引きつり具合の増した顔で千恵の身体を門から引き剥がし、

「千恵、お前はもう少し年頃の娘としての自覚を持つて……」

説教染みた台詞を呟きながら、そのまま千恵の身体を抱えてその場で軽く跳躍し、ぽーん、と人間離れした跳躍力で軽々と門を飛び越えて見せた。

「さて、……千恵。この学舎の長はどこに居る?」

「長……って、校長? 校長室……ううん、この時間だと職員室で朝の職員会議中かも」

「職員……そとか成る程、関係者が一堂に会しているとは 手間が省けて良いな」

「手間……、ね。……まあいいや。じゃあ、職員室に案内するから……そろそろ降りしてくれない?」

「ああ……」

「さて、と。表に回ると色々面倒そうだよね。取りあえずそこか

ら入つて……」

千恵が指さした場所を見た那由他は一瞬押し黙つた後で、再び顔を引きつらせた。

「……千恵、お前の言つ“そこ”とやらは……まさか、とは……思つが……あの窓の事ではあるまいな?」

「うん?  そうだよ」

「……私の見間違いでないなり……その窓……かわや廁に見えるのだが?  ……しかも配色からして男用なのではないか?」

「うん、この校舎つて殆ど特別教室とクラブ棟でさ、滅多に人が来ないの。だから不良連中のたまり場になつててね、ここによく煙草とか吸つてたりするワケ。だからこの窓も……あ、やつぱり。力ギ開けつ放しになつてる事がよくあるんだ。大丈夫だつて、こんな朝早くから登校してくるマジメな不良なんてそうそういないから」胸程の高さにある窓に飛びつき、這い上がろうとする千恵を見て、「そういう問題じやないだる?」つて、おい、こら待つて

慌てて止めよつと手を伸ばすが、間に合わず。千恵は慣れた様子で身軽くヒョイと窓の向こうへ飛び降りた。

「大丈夫、思つた通り誰もいないよ」

「年頃の娘……以前に女としての自覚をもつ少し持て……」

ため息をつきながら、那由他は呆れたように咳き、渋々といつた様子で千恵に続く。

人気のない廊下。隣の校舎への渡り廊下の先に職員用の玄関と事務室があり、

「今の時期のこの時間帯、用務員さんは表の門で落ち葉掃きしてゐ事が多いから……うん、いない。で、その階段を一階上がればもう職員室なんだけど」

ここまでは誰とも会わずに来れたが、さすがに上階からは人の声がする。

職員会議中は生徒は職員室に入れなくなる。日直が日誌を取りに

来たりするので、この時間はいつも混み合っているのだ。

「まあ、もうすぐ予鈴が鳴るはずだから。そしたら皆、HRが始まる前にって一気にいなくなるはずだから、もう少しうつとこいで待つて」

「お前は、行かなくて良いのか？」

今日は遅刻決定かなあ、と思った所へ那由他が言った。

「ここまで来れば、後は私一人でもどうにかできるだろ？　お前は先に行つていろ」

「……いいの？　別に一回や一回の遅刻くらい構わないよ。別に皆勤賞狙つてる訳でもないし」

HRには間に合わないかもしけないが、一時間目の授業には充分間に合う時間だ。

「いや、京の出方を窺う意味でもその方が都合が良い。“印”があるから問題は無いはずだが、もし何かあれば迷わず私の名を呼べ。いつでも駆けつけ、お前を護ろ？」「ひろう？」

そつと、頭に手が添えられる。大きくて、少し骨っぽい男の人の手。

相手はモノノケ様とはいえ、未だかつて異性からこんな扱いを受けた覚えのない千恵の心臓を揺るがすには充分過ぎる行為。

「あ……ありがと」

またしても騒ぎだした心臓の鼓動をさとられたくなくて。

「じゃ、じゃあ先に行つてるね」

階段を駆け上がる。

一回りして一つ階を上がつて職員室の前を通り過ぎ、もう一回りして三階へ上がれば一年生の教室が並ぶ廊下に出る。

HRが始まる前の廊下はまだ賑やかで、その喧騒の中にそつと紛れる様に自分のクラスへ向かう。

一年二組のプレートが掛けた扉をカラリと開けると同時に同時に、予鈴が鳴った。

「あれ、千恵。今来たのか？」

真っ先に声をかけてきたのは夏也だ。

「どこ行つてたんだよ？ 今日、随分早く家出ただろ？ 駐輪場に自転車はあるのに、下駄箱に靴は無いし教室にカバンもないし……」

怪訝な顔で問われ、千恵は心の中で舌打ちする。

「野暮だねえ、君。朝早く、人目を忍んで……って、そんなの大体相場は決まつてるだろ、ねえ？」

更に横から口を挟んできた輩に千恵はもう一度舌打ちした。

「……何だ、君、愛羽さんのカレシじやなかつたんだ？」

「違う違う、夏也は千恵のお隣さん兼幼馴染みの腐れ縁 今のところは、ね。……でもホント今日はどしたの？」

その隣で、大好きなバンドのヴォーカルに目をキラキラ輝かせているのは風花だ。

「ん……ちょっと、野暮用でね」

「んん、何？ なーんか怪しいなあ。千恵が目を逸らすつて事は、なーんかしら隠してる時だもんね？」

夏也も手ごわいが、同性の幼馴染みはもつと厄介だ。

タイミング良く鳴つた本鈴に感謝しながらも、ドクンと心臓が期待に跳ねる。

「もう、後できーっちらりお話聞かせて貰いますからねー」

悔しそうに風花は席へ戻り、夏也も不満顔を隠す事なく次々離れていく。

「……京」

人の席に陣取つたまま動かない、一番厄介な敵を見下ろす。

「そこ、退いてくれない？ 座れないんだけど」

「野暮用つて、何？ 朝っぱらからこそこそこそどこへ行つていた？」

顔だけ二口二口微笑んだまま、低い声で脅す様に京は尋ねた。その仄暗い瞳に心を逆撫でされ、ぞわりと全身に鳥肌が立つ。

「あ、あなたに答えてあげる義理なんかないけど。……すぐに

分かると思うよ

千恵は、ちらりと扉の方へ視線を向けて言った。

「ふうん、今日は倒れたりはしないんだね？」

「あなたがどうしてそうも私にこだわってるのか知らないけど。私はあなたとは関わりたくないの。だから……放つておいてくれない？」

「それは無理な相談だ。君は僕の大事なイヴなんだからね」

「……イヴ？ それ、初めて会った時も言ってたけど、一体何の事？」

「知りたい？」

京が不敵な笑みを浮かべた時、千恵の耳に待ちわびていた音が届いた。

カラリ、と。耳慣れた扉が開く音と共に担任が入つて来る。そして。

さすがに2日続けて、しかも同じクラスに転校生という異例の状態。

瞬間、女子の一部が浮足立つ。が、男子の大半は迷惑そうに呻いた。

さすがにクラスはざわめいた。

担任も、今にも首を傾げたそうな顔をしながら、それでも昨日と同じくカツカツと黒板に白チョークで大きく彼の名を書き出した。

若宮那由他

「転校生の若宮君だ」

そしてやはり短い担任の紹介の最中、ガタつと音を立てて京が席から立ち上がつた。

「 那由他っ」

さすがに人目がこれだけある中で暴れるつもりはないのか、低く唸る様にその名を憎々しげに咳き、睨みつける。

「こら百世。本鈴はもうとっくに鳴つたぞ。早く自分の席に戻りなさい」

「はーい、すみませーん」

担任に注意され、瞬時に外面を取り繕つた京は、ギリッと千恵にもはつきり聞き取れる程に歯ぎしりしながらよじやく千恵の席から離れる。

「……大人しく、眠つたままでいれば良かつたものを。くたばり損ないめ」

人間の聽覚では到底知覚不可能なその声を、那由他は拾い、そして警告を返す。

「我が名は那由他。この地の主として幾多の年月を重ねしもの。若きものよ、那由他の命である。千恵は私の大事な契約者。かの者に危害を加える事は私が許さぬ」

「……契約……者、だと……ー？」

その言葉に、京は目を見開き、そして心の中で呪いの言葉を吐いた。

「ふざけるな……つ、あれば僕のイヴ。この世に生じて百年、ようやく見つけた僕好みの娘<sup>イヴ</sup>、その最優良血<sup>ヴァンティージ・ワイン</sup>を……あの時、お前に邪魔されたせいで更にもう百年待つハメになつたんだ。だが、今度こそは……見ていろ、必ず僕のものにしてみせる」

……仄暗い笑いを、にこやかな仮面の下に隠して、京は自分の席に着いた。

「え、若富君つて、千恵のイトコなの？」

チャイムが鳴り、担任が教室を出て言つた途端、人だかりのできた千恵の隣席の前で風花が嬉々とした声を出した。

「は……、いと……こ？ ちょっと待て。俺はこんな奴知らねえぞ。つーか、見た覚えすらないぞ？」

千恵の机の前で呆けた声を上げるのは夏也だ。

「山に棲んでいたのでな。この街に来るのも随分久方ぶりだから、千恵に案内やら何やらの世話を頼んでいたのだ」

「じゃあ、千恵の言つてた野暮用つてそういう事だつたんだ？」

「え……と、まあ……」

千恵は曖昧に頷く。……だって、そんな事は今初めて知ったんだから。

「ああ。今朝は千恵のおかげで色々助かった。これからも、しばらくは何かと千恵を頼る機会は多くなるだろ？」「

ちらりとこちらに目を向けた那由他の視線を遮る様に、クラスメートの女子たちが机と机の間に割り込み、

「愛羽さんばっかじやなくて、私たちにも頼つていいんだよ？」「

「そりそり、ねえ、良かつたらメアド交換しない？」

「今日の放課後、ヒマならこの辺り案内するし！」

「えー、その前に学校内の案内のが先じゃない？ 曜休みとかどう、一緒に？」

きやいきやい騒ぐ。

それまで、少し面倒くさそうな顔をしながらも、会話の中心で律義に答えを返していた那由他が静かに席を立ち、女子の群れから頭一つ半ほど飛び出た顔をこちらへ向け、真顔のまま至つて平然と/or>たまつた。

「すまないが、私は千恵と共に居ると決めているのだ。 そう、約束したからな」

その言葉に一瞬、ドキッとするも……瞬間、那由他の周りに集つた女子たちの幾多の冷たい視線が痛い程突き刺さり、千恵は心の中で悲鳴を上げて青ざめた。

（け、京も怖いけど……この子たちも怖い……）

「ま、待て……お……お前……共に居る約束、って……まさか……ホントにそういう事じゃないよな？」

那由他と千恵とを見比べつつ、夏也が声を引きつらせた。

「きやー、ちょっと千恵つ！ 今日の昼休み、きつちりじつくりばあ～つちりお話聞かせて貰いますからね！」

風花が興奮気味に抱きついてきた所で、一限開始のチャイムが鳴る。

不満げな声と共に、人垣が崩れてざわめきが少し静まる。

「ん、そういえば昼休みって……ねえ、ちょっと」「……どうした？」

「あのさ、お昼……なんだけど、『『』飯』って……どうするの？」  
千恵は小声で尋ねた。

「やつぱり……三食三度、血が『』飯とか……」

「そうだ、と言つたらお前はどうするつもりなんだ。全く……そんな訳ないだろ。術や損傷などで何か熱源を一度に大量に失う様な事でもない限り、十日に一度の補給で充分事足りる。そんなにしょっちゅう血を吸われていたら、お前は三日と保たずに死ぬぞ？」

那由他は苦く笑いながら答えた。

「心配せずとも、普段は人と同じ食事で空腹は満たせる。……ただ、人の食事を欠かしても死ぬ事はないが、血の糧を欠かせば私は動けなくなる」

……こういう答えを返す時、彼は毎回こんな顔をする。

「ふうん、そななんだ？ でも……今日はお弁当もお金も持つてるはずないよね？ ジャあ今日は購買に行こう、奢るからさ。……でも、あれ？ 待つて、」

朝にも思った、もう一つの疑問。

「……今日、学校終わった後はどうするの？」

もう、社もなくただ祠があるだけの山の上の廃神社。

「どこか、他に行く所が」

問いを遮る様に扉が開き、日直が起立の号令をかけた。

答えを聞く前に途切れた会話の続きを、那由他はもう一度苦い笑をこちらへ向けて返した。

彼が名乗った名字　　若富は、あの神社の名前であり、そしてこの街の名前もある。

いや、本当は逆なのだろう。遙か昔からこの土地に棲まい、この土地を見守り続けた主の名が彼の住居であつた社の名となり、やがては土地の名となつた。

だが社は既に廃れ、街も　　千恵の幼かつた頃の記憶と比べてさ

え、街の様子は随分変わったと思うのだから、彼の目にはもう全く違う街に見えるのかもしれない。

……彼の答えなど、聞かずとも簡単に察せられる。

……だったら。千恵は、もう一つの大きな決断を下した。

「……家に、来ない？」

教科書を見せるフリをして、ページの端にそつ書きなぐる。

「……“イト””なんだから、一緒に住んでもおかしくないでしょ？」

千恵が意地悪く笑つてみせるのを、那由他は信じられないと驚いた顔で目を丸くした後で、渋い顔をしながらペンを走らせた。

「お前、自分が何を言つているか理解つていてるのか？」

「大丈夫、お父さんは単身赴任中だし、お母さんもほとんど戻つて来ないし。たまに夏也が押しかけてくる以外は私しか家に居ないから。ちょうど部屋も空いてるし」

それを見た那由他は疲れた様に机に突つ伏した。

「お前、やっぱり理解つてないだろ？……」

頭を抱えて那由他が咳く。

「私は人ではなくモノノケだが、……それでも“雄”だ。分かっているのか……？」

「そりやあ、まあ。どう見ても女の子には見えないし

「……そつか」

千恵の答えに那由他是短くそう返しただけで盛大にため息をついてそのまま押し黙り、それきり授業終了のチャイムが鳴るまでうんともすんとも言わずに机に伏したまま動かなくなってしまった。

「……？」

千恵は首を傾げたが、ジロリと先生に睨まれたのに気付いて、忙しく教科書の問題を解き始めた。

授業が終わり、先生が教室を出ていくと、待つてましたとばかりに再び那由他の周りに人垣ができる、その僅かな間に那由他是のそりと起き上がり、千恵の耳元でポツリと咳いた。

「一応念の為に忠告しておこづ。……モノノケとて人の姿かたちをとれば、子作りはできる。今後の為にも……良く覚えておけ」

「……え？」

しかし、聞き返す前に那由他の姿は黒山の人だかりの中に埋もれてしまう。

代わりに、群れの中の一人にジロリと睨まれた。

もう、同じクラスになつて半年経つけれど、滅多な事では話したりなどする事のない、いつもキラキラと派手なグループのリーダー格の子。確かに名前は……

思いだす前に、ケータイが鳴つた。見ると、メールが一通届いている。

Time 11/2 9:56  
From お父さん  
Sub 誕生日おめでとう

遅くなつたが、16歳おめでとう。お母さんも、ひとまず元気にしている。

年末にはなるべく帰るつもりでいるから……

さつと、文面の最初だけ流し読み、最後まで読まず途中でクリアボタンを押して待ち受け画面に戻す。

「お父さんてば、娘の誕生日を間違えないでよね……」  
パクンと携帯を折りたたみ、カバンに戻す。

人だかりの向こうで、京が恨めしげにこちらを眺めている。  
弱みを見せたくないくて、落ち込む気持ちを振り払い、一つ大きく息を吐いた。

そして、またチャイムが鳴り、一限が始まる。二限、三限、四限……。

時計の針が十時、十一時、十一時と進み、教会の鐘が鳴り、それからじばらじばらして四限終了のチャイムが鳴る。

「じゃーん、これが今日の戦利品ー。」

「そうか。……一応聞くが、千恵、お前今度は一体何をする気だ  
……！？」

「決まってる、上に登るんだ」

千恵の夏也とこうらじに幼馴染みの少年は、呆れる那由他の隣で  
平然とそうのたまつた。

「そうそう、この上が六場なんだよー」

風花とこうらじのやはり千恵の幼馴染だという少女もその光景を当  
たり前のように眺めながら言つ。

あれよあれよという間に千恵は屋上へと出る扉のそのせりに上、  
給水塔がある屋根の上に登るためのハシ「に手を掛けたかと思えば、  
慣れた調子でするすると登つていく。

「教室じゃあ女子どもがつるせえし、……ただ屋上つてだけでも  
昼メシスポットとしちゃメジャー過ぎてやつぱり女子に囲まれるだ  
ら、……さつきみたいにお前がさ。」

最後の一言に少々の敵意を含ませ、夏也は言つた。

購買とこうらじの戦場から意氣揚々とパンやおにぎりで一杯のビニ  
ール袋を引っ提げ戻つて来た千恵を、那由他ともどもほほ強制的と  
言つべき強引さでここまで引っ張つて来たのは主に風花であったが、  
不機嫌そうな顔をしながらも、他の友人の誘いを断つてまでついて  
来た夏也は先程からどうも刺々しい態度ばかり向けてくる。

「いーら、夏也！ 自分がモテないからつてひがまなーい！」

千恵に続いてやはり慣れた様子で上へ登つた風花が、悪戯っぽく  
こちらを見下ろす。

「誰がいつ、ひがんだー？ つーか、モテねーとか決めつけんな  
！」

そして、夏也が続きた。

「若宮君も登つておいでよー。気持ちいーよー」

那由他は仕方なくハシゴに手を伸ばした。

今日は天気も良く、朝方こそ冷えたが、陽の当たる屋上は爽やかな風が通り、街全体を見下ろせる絶好スポット。

ここから見ると、かつて禁域とされた山はぼつんと時代から取り残され、肩身も狭そうにこじんまりとして見える。村も、随分と様変わりしたものだと思つ。正直、あの山と向こ見えて見える海とが無ければ、同じ場所とは到底思えない。

「うーん、京クンも誘つたんだけど。断られやつたんだよねえ

「……この面白い女め

「私も……あの人は、やめておいた方がいいと思つな」

ビニール袋の中身を那由他の前に並べながら、千恵は苦笑を返した。

「え？ でも千恵、転校していく前から京クンと知り合いだつたんじやないの？」

「夏也に連れて行かれたライブハウスでちょっと声掛けられただけだよ」

「……あの時か。クソッ、そんな事ならチケットなんか風花にでも高く売り付けときやよかつたぜ」

「馬鹿だよねえ、夏也も」

風花がクスクス笑う。

「でも、ホントに千恵の家に住むの？ 若宮君

「千恵は、そのつもりらしいが」

「そつかあ、……千恵にはその方が良いかもしねないね。ま、夏也にとつちや大ピンチだらうけど、半分以上は自業自得だからねえ。千恵の事を思えば絶対その方が良いと思つ。……思うでしょ、夏也？」

物凄く不機嫌そうな顔をしていた夏也だったが、風花に迫られて渋々、

「……まだ、一年ちょいしか経つてねえんだもんな。俺だつてまだ

変な感じがする。ああクソ、お前が野郎でせんぬきや、もろ手を挙げて大歓迎してたとこなんだけどな！」  
とぼやきながらも、一先ずの肯定を返した後で、ボソッと低く呟いた。

「おー」「ア、テメー。一つ屋根の下に2人つきりだからってへんなマネすんじゃねーぞ？」

「……元よりそんなつもりはないが。しかしそれより前に千恵の方にもう少し自覚を持たせるべきなのではないか？」

さすがにそろそろ夏也が微妙に非好意的である理由を察し始めていた那由他はため息を吐きつつやう返した。

だが、それに対して風花は

「あははー、それは否定しないけど。でも大丈夫だよお、千恵だもん

と笑つて流し、

「……まあ……そりだな。千恵だしな」  
夏也ですら少し遠い目をした。

「すぐに分かるよ。……多分、一、二日中には嫌でも分かるはずだ

「ぜ

そう、一、二日ビリのうちの僅か数時間後に、那由他は知る事になる。

「引つたくりーーー！」

放課後、帰宅途中の出来事だった。

夏也は軽音部、風花は調理部の活動日なのだそうで、那由他は千恵と二人で街をスーパーで買い物をしたいと言つ千恵に付き合い、人通りの多い駅近くの道を歩いていたその時、後方から女性の金切り声が聞こえて。

すぐ隣を駆け抜けて行こうとする、全身黒っぽい服を着た二十代から三十代くらいの中肉中背の男に、那由他の前を歩いていた千恵が即座に反応した。

「こおら、この不届き者があ！　いい歳した大の男がお婆ちゃんの荷物盗むな！」

押していた自転車をほっぽり出して、腕を掴み豪快に投げ飛ばしたかと思えば、即座に男の手を捻り上げ、関節技をかけて地面にねじ伏せる。

「だれかー、そこの角の交番からサブちや……お巡りさん呼んで来てーーー！」

「よう、ちーちゃん。今年はこれで32人目だな。……で、今日のこいつは？」

「引つたくり。あのお婆ちゃんからバッグ盗ったの」

「だ、そうだ。おい磯野、奥でこいつの聴取取つとけ！」

「……千恵。一応聞くが、32人目、とは？」

「ちーちゃんがとつ捕まえた小悪党どものべ人数ぞ。この辺、強盗やら殺人やらみたいな凶悪犯罪なんかは滅多に無いんだが、引つたくりやらコソ泥やら万引きやらの軽犯罪は絶えなくてねー」

「そういう不心得者の現行犯逮捕件数は、正直な所、正規の警察官より彼女の方が成績優秀でね。よく街中で大立ち回りなんかする

から、この辺じゅあ結構有名なんですよ」

豪快な笑いが印象的な、五十歳代に見える男性警察官の部下であるらしい、磯野と呼ばれた彼が完全に世間話のノリで喋りながら、お茶を淹れてくれる。

「で、ちーちゃん。この連れの優男は?」

お茶を音を立てて啜りながら、田代ひづらを描して尋ねられ、

「え、……ああ、イトコ……で」

しどろもどろに答えた。

「イトコ? あんま似てねえな。何だ、折角ちーちゃんにも春が来たのかと思つたんだけどな」

「……この辺りの悪ガキ連中は、彼女の武勇伝に怖れをなしますからね」

「橘<sup>たちばな</sup>さんとこのクソガキは今日は?」

橘、とは夏也の名字だ。

「部活ですよ、軽音部。何とかいうバンドの某ちゃんだかに影響されたっぽくて」

千恵の答えを聞いた彼はあちやー、と頭を搔いた。

「あーあー、父親に似たのかえ。全然ダメじゃねーか……」

そこでようやく、千恵が彼を

「ああ、えつと、この人はこの交番勤務のお巡りさんでね、普段から色々お世話になつてて。名前が船越三郎<sup>ふなこしやさぶ</sup>だから、私はサブちゃんって呼んでるけど。で、夏也のお父さんも警察官なんだ。サブちゃんは、その元指導員なの」

と紹介してくれる。

「おひ。まあ、俺は今も昔もしがない交番勤務。けどヤツは今じや所轄の刑事課長だがな」

と、陽気な調子で会話を続けていた“サブちゃん”がふと表情を改め、「親父とおふくろさんは……まだ相変わらずかい?」  
目を伏せながら尋ねた。

「うん……まだ家に居ると色々思い出しちゃうからって……」

「そうか……。」口もコソコソ聞き込みやなんかしちゃあいるんだが、……すまねえな、まだコレっていう手掛けりが見つからないでなあ」

引つたくり犯を引き連れ、奥へ引っ込む磯野氏の背を見送りながら、サブちゃんは湯呑に残った茶を一気に干し、

「橋のとこ<sup>おやじ</sup>の親爺<sup>おやじ</sup>さんも心配しどたぞ。近頃のちーちゃんはちと根を詰め過ぎだつてな。今日もこれから行くのかい?」

壁にかかつた時計で時間を確かめる。

「ううん、今日はスーパーに用事があつて」

「ああ、今日は木曜、か。駅前のスーパーの特売日だつたな、そついえば。ああ、もしかしなくてもタイムセールが用意だつたか……婆ちゃんも?」

「そう! タマゴトイレットペーパー! !

「うーん、相変わらず現役ぴつちぴちの女子高生とは思えぬ台詞だなあ」

「もー、船越さんも、ですよ。そのセリフ、一体どこの助平オヤジですか?」

呆れたサブちゃんのセリフに被せて、奥の部屋から磯野氏が更に呆れた声を出す。

「でも、それなら千恵ちゃん、急ぐんじゃないかい? 今日はもういいから、行きなさい」

磯野氏に促され、千恵が席を立つ。

「じゃあ、お言葉に甘えて。あ、お婆ちゃんも気をつけて。手提げバックだと狙われやすいからね、カバンはリュックの方がお勧めだよ。両手も空くから安全だし」

被害者の初老の女性に一言かけ、

「行こ! つ?」

会話の最中に殆ど口を挟む余地もなく立ち尽くしていた那由他の手を引いて交番の外に出る。

「じゃあな、ちーちゃん。ああ、そうだ。今度、橋のにたまには呑みに付き合へって云ふといってくれるか?」

それを見送りに出てきたサブちゃんを振り返り、

「もー、下戸なの良く知ってるくせに面白がって呑まうとするから、嫌がつてこの辺に近付きたがらなくなるんだよ、ねじたそ」

千恵が答える。

「まあ、一応云えるだけは云えておけナビセ」

「おう、頼むばせ」

にかづ、と笑つて中へ引っ込んでいくサブちゃんを眺め、千恵は自転車を押して歩き出す。

この時期、5時を過ぎれば辺りはだいぶ暗さを増してくる。

「夏也のお父さんは刑事さんなんだけど、夏也のお祖父さんは街で道場をやつてね、警察で武道の師もやつてゐる」

那由他はそれに、「さうか」とだけ返し、賑わう街中を黙つて千恵の後について歩いた。

「たつだいまー！」

誰も居ない、静かな家の玄関をバタンと音を立てて開け、玄関の明かりをつける。

「荷物持ちさせてごめんね？ 取り敢えずそこに置いて」  
生鮮食品の入った袋だけ持つて、千恵はダイニングキッチンの扉を開けた。野菜やら肉やら魚やら、冷蔵庫に押し込むだけ押し込んで、和室の居間に置かれた仏壇の前に座り、線香を焚き、チン、と一回、鐘を鳴らす。

仏壇の前に置かれた写真は、若いと云つよつまだ幼い男の子のもの。

「……弟なの」

那由他が尋ねるより前に、千恵が口を開いた。

「秋刀<sup>あきと</sup>つていつてね、私より五つ年下だつたんだ」

それに、那由他が言葉を返そと口を開くより前に、今度は玄関のチャイムが鳴り、それが鳴り止むのを待つ事なく扉が開いて。

「おい、千恵ー、帰つてんだろー？ おふくろがー、そのイトコとやらを連れてメシ食いに来いつてよー！」

夏也の騒々しい声が響いた。そのまま、断りなく靴を脱いで上がり込み、

「ああ、いた。……もしかして、今帰つて来たとこ？」

遠慮なく部屋へ入つて来た。

「うん、ちょっとサブちゃんといこ寄つた後でスーパーにも寄つてたから……。ちょっとここで待つて。すぐ着替えるから」

キッチンの流しで手を洗い、千恵は那由他を連れて2階へ上がる。

「いじ」、秋刀の部屋だったんだけど、今はもう誰も使つてないから。……それと、はいこれ着替え。お父さんでの悪いけど

渡されたのは、道着の袴。

「うちのお父さんも、昔は夏也のお祖父さんがやつてる道場に通つてたんだよ。そこで、やつぱり武道を習わされてた夏也のお父さんと知り合つて……。そういう縁で、私も武道習つてたからね。……昼間、夏也や風花が言つてたのはそういう事」

千恵は那由他に苦笑を向けた。

「小学校の頃に一度だけだけど、合氣道で県大会までいった事もあるんだよ、私。だから、人が相手なら男にだつて負けない」

それからくるりと後ろを向いて、ちえ、と下手なひらがなで書かれたプレートの下がつた扉を開けた。

部屋の壁一面に、症状の入つた額縁やメダルが飾られ、棚には幾つもトロフィーや楯が並ぶ。

「だから、余計に悔しい。あの時、もし私が傍にいたら……あんな事になつてなかつたんじやないかつて。あれから、お母さんは泣くばっかりで笑えなくなつちやつて。この家にこの街に居る、辛い事とか色々思い出しちやうからつて、お母さんは滅多に家には帰つて来ない。お父さんは元々仕事で単身赴任中だし。……も

しもじの上私までひうにかなつちやつたひ、お母さん、本当に壊れ  
ちやうひ

那由他は、田の前の引き戸を開けてみた。部屋は六畳ほどの和室。  
「京が、私をひうしたいのか知らないけど。京の言ひ、『イウ』つ  
て何なのか、分かんないけど。お母さんをこれ以上悲しませるよつ  
な事にはさせたくないの。だから」

「おーい、まだかー？」

階下から、夏也が叫ぶ声がして。

「まだに決まつてゐじやない、もひー 別に急ぎじゃないんだか  
ら、いいでしょ？」

階下に叫び返し、

「……もう。夏也もひるわこーし、わひわと着替えちやうひ」

那由他是急かされる様に部屋へと押し込まれた。

ピシヤンとひるわく閉められた扉越しに、千恵が一言、呟いた。

「これから、しばらく……よろしくね。それと、遅くなつたけど。  
ありがとひ」

千恵の気配が扉から離れ、向かの部屋の扉が閉まる音がして。

「……」

那由他是部屋を見回した。

押し入れの襖を開けてみると、ちやんと手入れのされた布団が入  
つていた。

だが、他に家具といえる様なものは壁にかかつた時計くらいのもの  
で、少々ガランとした印象は拭えない。

ただ一つ、押し入れ脇の柱に刻まれた、背比べの跡らしき傷跡が、  
かつてのこの部屋の主の面影を思わせた。

那由他是その前にしゃがみ込み、そつとその傷跡に触れた。

「 家神よ」

「 」

那由他の囁きに、周囲の靈気が揺らいだ。

家神とは、各家に憑くモノノケの一種で、神と名はつけど、地靈

の一種だ。主の声に応え、寄り集まつた靈気がぼんやりと像を結ぶ。

昔は実体化などして座敷わらしと呼ばれる事もあつた、それなりに力のあるモノノケであったのだが、……これはどうやら実体化どころか姿を保つ事すらままならない程に弱体化しているらしい。

「……それでこの邪氣、か」

玄関に入るまでは那由他にも分からなかつたが、家に入った途端、表とは明らかに濃度の違う邪氣を感じた。

「それは、居つきたくないだろうな。肉体の健康に差し支える程の邪氣ではないが……弱つた精神には痛すぎる毒だ」

こんな中で、千恵はよくぞああもつよくいられたものだ、と那由他は感心する。

「この邪氣の質……京、か？」

この程度の邪氣なら、本来は家神が祓つてしまえるはずなのだが。「その様子では、悪靈一匹祓えまい……。仕方ないな、おい、愛羽家の家神よ。我が那由他の血を分け、お前を私の分身の力を<sup>わけみ</sup>与えてやる。その力を以つて、家神としての本分を全うせよ」

那由他にとつて血は生命力 力そのもの。モノノケにとつて力は存在の証であり、年月を重ねる事により増大させていくもの。

那由他の血は、那由他の存在の証。それを喰わせるということは、自分の存在を喰わせるという事。

自分より永い時を存在した者の力を喰らえば、通常では<sup>ヒ</sup>り得ない力が得られる。

「これは契約。我が力を得る代わりに、私の従となれ」

那由他は自分の牙で手首を噛んだ。傷口から滴つた血が朱玉となつて零れ落ちるのを、朧な靈体が飛びつくよに受け止める。

実体のない、霧の様な靈体の身体に落ちた血は、それに触れた途端、赤い色の霧になり霧散するように消え、陽炎のようにゆらゆら揺らいでいた像も呼応するように霧散する。

瞬間、グラグラっと家が揺らいだ。

「きや、じ、地震？」

隣の部屋で千恵の声がして。

「おわ？」

階下からは驚く夏也の声もした。

揺れはすぐにおさまり、天井からぽたりと、一滴の水滴が落ちた。ぽたり。ぽたり。まるで雨漏りの様に。ぽたり、ぽたり。落ちる滴が置敷きの床に水たまりをつくる。

ある程度まで溜まつた水が、突如その粘度を急激に増し、ぐにゅぐにゅと動いた。と思えば見る見る間に膨張していき、一つの姿を成したところで固まり、パリン、と氷が砕けたような音と共に殻を破つたそれが姿を顯わした。

大鴉。  
レイヴン。

鷹ほどの大きさの、真っ黒な鴉が翼を広げ、一度、二度、三度と羽ばたき、旋風を起こす。

家に充満していた邪氣はその風に吹き飛ばされる様に消え、代わりに清浄な氣が満ちる。

「い、今地震つ、大丈夫だつた！？」

バタンと、ノックもせずに扉を開けた千恵は、通常ではありえないサイズのからずに

「わ！？」

思わずといった様子で叫んだ。

「おい、今地震が……つ、大丈夫だつたか千恵？」

バタバタと階段を駆け上がりつて来て、千恵と似たようなセリフを口にしたのは夏也で。

しかしこちらは部屋を覗き込んで特に驚く事はなく、

「どうした、千恵？」

むしろ不思議そうに千恵を見た。

「え……？」

部屋の中を指さし、那由他とからすと夏也とを見比べた後で、

「あ……、と。何でもない……」

何かを察したのか、千恵は夏也を促し部屋の戸を開める。

「さ、着替えの邪魔してごめんね？……私たち、下の居間で待つてるから。着替え済んだら降りて来て」

那由他は大きく長いため息を盛大に吐き出し、

「あー……、お前、名は？」

威厳も緊張感も厳粛さも中折れした気分になりながら問うた。

だがこの家に憑いた家神は、当然こうした事態など日常茶飯事なのだろう、全く動じる事なく問いに応えた。

「天羽<sup>あまつ</sup>、と申します。お懐かしゅう御座います、那由他様……」

「……お前は、私を知っているのか？」

「はい。……とは言え手前はしがない家神風情。直接お目にかかつた事は御座いませんでしたが、人の世が江戸から明治へと改められた時代より、この家に憑いております故。この度、この地の地靈の主たる那由他様から直に命を賜れました事、これもチ工様の想い故と信じ、この天羽、誠心誠意お仕え致します事を誓いましょう」

「ああ、……では。聞いていたな、ひとまず私は出掛けるが。留守は頼んだぞ」

そそくさと着替え、そして鴉に告げた。

「……行つてらっしゃいませ」

天羽は丁寧に頭を下げた後、するりと融ける様に床へ消えた。

（珍しく義理堅そうな奴だな。しかも鴉、ときたか。……もしかすると小笠か富士の天狗に縁あるものか？）

この地からそう遠くない山に棲まう天狗の一族。よく晴れた日に望める富士の山にもまた由緒ある天狗の一族が棲まっている。

「おーい、まだかー？」

階下から、夏也の急かす声がして。那由他是思案を中断し、扉を開けた。

「いや、もう済んだ。……待たせて悪かつたな、今行く」

メール着信を知らせる着メロが鳴り、彼女はケータイを開いて届

いたメールを開いた。

Time 11/2 18:12  
From 京クン  
Sub 初メールだよ

みんな、昨日今日と一日色々ありがとうございました  
なにかお礼したいなーと思ってメールしたんだけど(\*^-^\*)v  
今日これから、僕とカラオケ行かない?

即座に返信メールを打ち、送信する。

少女は、慌てて髪にくしを当て、クローゼットを開け放ち、鏡との睨めっこを開始した。

Sub 行く行く~!!

Sub 誘つてくれてありがとう(^-^)ノ

Sub 嬉しい

....

引っ越し無しに鳴り続ける携帯の画面を眺めながら、京はほくそ笑んだ。

「別に、僕が動かなくても、僕のお願いを聞いてくれる娘はこれだけいるんだ」

ケータイを上着のポケットに滑り込ませ、京はカラオケチェーン店の扉をくぐった。

「いらっしゃいませ、お一人様ですか?」

「いえ、連れが後から大勢来るんで、広めの部屋をお願いしたい

んですけど。……そうだな、取りあえずまずは3時間からで

カウンターの店員から、リモコンやらマイクやらの入ったカゴを受け取り、告げられた部屋番号をメールする。

「駅前のカラオケBOX、301号室で、待つ、て、る……よ、

と」

ケータイの送信ボタンを押し、京は部屋の扉を押し開いた。

部屋の明かりをつけ、カゴをテーブルに置き、機器や部屋のセッティングをしながら、

「待ってるよ、たっぷり酔わせてあげる」

冷笑を浮かべた。

「代わりに君達の大事なもの、僕にくれたら嬉しいなあ」

夏也と千恵との後ろに続き、那由他は隣家の敷居を跨いだ。

「おーい、母さん？ 連れて来たぞー」「

靴を脱ぎ散らかしながら奥へ叫んだ。

「おじやましまーす」

と、口でこそ定型の挨拶をしながらも、千恵も遠慮のえの字も見当たらない慣れた様子で靴を脱ぎ、勝手知つたる……と言わんばかりに玄関わきの戸棚からスリッパを当然の顔をしながら一組取り出しそ。

「悠兄、昨日ぶりー」

夏也の案内を待つ事なく、ダイニングへ顔を出す。

「ねばさんも。2日も続けて」飯に呼んで貰つちゃつて。助かりますー」

「あら、こーのよー……って、そちらが……こと」わん？」

千恵の後ろで軽く会釈した那由他を見て、

「ああ、これは……。夏也、男ってのは諦めも肝心だぞ？」

夏也の兄、悠は開口一番、弟の肩をぽんと叩き、諭すように言った。……が、ああも肩が いや、良く見れば全身ぶるぶる小刻みに震えていれば、笑い出しそうなのを必死で堪えているらしい事など一目瞭然。

「それにしても、まあ道着が良く似合つ事ー それ、柚鷹さんのですよ？」

ちりり、と田で問うと、千恵が「そつと耳打ちしてくれた。

「柚鷹って、ウチのお父さんの名前」

「でも、なんでおじさんの……しかも道着なんか着せられてるんだ、お前？」

「えつ、と。ちょっと急だつたし、事情も色々あつたりで、荷物

類届くの、もうじばらく先になりそうで…」

夏也の問いかに、千恵が慌てて誤魔化しにかかる。

「取りあえず、家にあつたお父さんでの間に合わせる事に…。  
もちろんフツの服でも良かつたんだけど。……何でかなあ、こいつ  
いうカツコの方がしつくりくるつていうか。今日一日制服姿見てた  
けど、……ホント、何でなのかなあ、違和感…つていうか…  
しつくづくする言葉が見つからなかの、言葉を探して田を泳がせ  
る千恵に、

「これだけイケメンだとどんな格好でも似合いそうだけど。……で  
も確かに洋装より和装の方が似合いくつうな顔立ちと身体つきかもし  
れないわねえ」

夏也の母親がうんうん、と同意するよつに頷き。

「……いいわ、着物男子！ いいじゃない！ ウチの息子達つて  
ば、じつちもジャラジャラつにアクセサリーぶら下げるばっか  
りで面白くないつたら！」

田を輝かせた。勢い良く迫られ、那由他は思わずのけ反る。

「ちょーっと、失礼」

一体どこから取り出したのか、いつの間にかその手にはメジャー  
が握られており、その場でシャツ、シャツ、と実に手早く手際よく、  
口出しそる暇もないままあつとこつ間に全身採寸されてしまった。

「……おふくろ、ウチの親父と結婚する前は和裁の仕事してたん  
だよ」

夏也がボソッと呟く。

「今でもたまーに作るんだけど。……祭りん時とかな」

「そりー、千恵ちゃんは喜んで着てくれたのに、ウチの息子ども  
つたらー。」

「だつて、おばさんを作る浴衣、その辺で売つてるのよつ可愛か  
つたし」

「あ、ああ……た、確かに……ち、千恵のは……か、かか、か

「うん。浴衣姿の千恵ちゃん、可愛かつたよねー」

詰まつた夏也のセリフに被せておひつとこいやか爽やかに悠が言った。

「女の子の浴衣姿は眼福だけど……」

「野郎の見ても、楽しくないしな」

悠に盗られた台詞に渋い顔をしつつも夏也が言へ。

「これからー 分かつてないのよねー」

「分かります。あのビミョーなチラリズムが……えと、『ホン』

ふんふん怒る彼女に千恵が勢いづいて同意し、途中から小声でボシヨボシヨ咳く。

那由他は心の中だけで小さくため息をつくと、ぐるりと部屋を見回してみる。

(……なんと、まさか。あの状態でも愛羽家の家神はま強い方だった、とはな。この家にはすでに家神の気配すらない、か。この様子では、他の地霊たちも似たりよつたり……かもしれないな) 那由他是自分の掌に視線を落とした。

(私の加護が絶えたせい……だらうな。もはや土地神でもなくなつた。地霊の主の名も返上すべきか……)

まだ、今しばらくはこの力を手放す訳にはいかない。……京の件を解決するまでは、まだ。

だが、それが片付き、千恵との契約を満了した暁には拳を握り、目を閉じる。

「おい、どうした?」

……目蓋に、少し力が入り過ぎていたらしい。眉間に寄つたしわ

を見て、夏也が、

「何だよ、そんなむつかしい顔しちゃつて。……もしかして、秋刀のことか?」

怪訝そうな顔をする。

「いや。それに弟の事もまだ詳しくは聞いていないが……千恵の母

は滅多にこじらへ戻らないとは聞いた。しかし……千恵も共に

家族ごと引っ越し越す訳にはいかなかつたのか？」

「ああ、うん。千恵の為にはその方が良いくて、俺も分かつて。でも……どうしてもここをこの土地を離れたくないんだって……千恵が、言つたんだ。それで、俺、つい喜んじゃつて。……サイテーだよな」

夏也は、千恵の耳に入らぬよつ、小声で呟いた。

「でもホント、何でだろうな。小学校の時も、中学校の時も……修学旅行とかで泊まりがけの遠出をするといつも決まって辛そうな顔をするんだよ、あいつ。毎回、友だちとワイヤワイヤ騒いでる間は、楽しそうな顔してるんだけど。夜とか、ちょっと一人になつた時とか……すごく、寂しそうな顔をするんだ」

ぐるりと、そっぽを向いて。

「千恵に聞いてみた事はあるんだ。だけど、あいつも『何でかは分からない』って。でも、この街を長く離れてるどどうしようもなぐ不安になるんだって、言つてたな。けど確かに、ここへ帰つて来ると、すごくホッとした顔をするんだ」

そして、悔しそうな顔を一瞬こじらへ向か、悔しそうを滲ませた声で付け加える。

「今日の朝の教室で担任がお前連れて入つて来た時、千恵がお前に向けたのと同じ顔。昼間、メシ食つてる間中、あいつがお前に向けてたのと同じ顔をするんだよ」

食卓の椅子に腰を下ろしながら、

「悔しいけど。カラ元気じやなく、ちやんと自然に笑つてるトコ、久しぶりに見た」

テーブルに肘をついて頬杖をつき、この上なく行儀の悪い恰好で夏也は那由他を睨み上げた。

「……くそ、何なんだよお前。一体千恵に何した？」

とんとんと、地団太でも踏むよつと貧乏ゆすりをしながら恨みがましい目で見上げられて。

「何を、と言われても困るのだが……」

那由他が、千恵と出合つてからの僅か2日余りのその間にした事と言えど。

京に襲われていた彼女を庇い、その後で持ちかけた契約を無事に結び、その上で彼女の血を吸つた……だけのはず。

「くそ、俺はまだ諦めねえからな」

「いや、私は千恵とそういう関係をもつつもりは……」

ない、と続けようとした時。

「ねえ、おばさんが普段着用の新しい着物を作ってくれるつて。色とか柄の好みとかある?」

屈託のない笑みを向けられて。

「は、あー……いや、あんまり派手な色柄でなければ……特には……」

続けようとしていたはずの言葉が何処かへ迷子になつて。

無いはずの心鼓が、トクンと一拍

高鳴つた気が、して。

那由他是胸を押さえ、その手を見下ろして。

「チ、H……?」

ぱそりと、呟いた。

「ゴクリ、ヒ、グラスに直接口をつけ、しゅわしゅわと泡の立つメロンソーダを一口含み、飲み下す。

「次、この曲聞きたい!」

楽曲の検索機をいじつていた女の子たちが、その曲の画面を京に見せた。

「……いいけど、いいの? センターパート歌っちゃつてるけど」

そう口では言いながらも、京はマイクに手を伸ばす。

「いいのいいの、京クンが歌うの、こんなに間近でこんなにいつ

ぱい聞けるなんてそうそうないもん

「ホント、超ラッキーじゃない、私たち？」

「うん。京クンがウチのクラスに転校してきてくれてマジ嬉しいから

「そういうって貰えるのは、僕も嬉しいな。……でも

もう一度グラスを口元に運び、一口飲み。

「その心、僕の歌で一杯にしてくれたらもう嬉しいんだけど？」

意識して色っぽい笑みを浮かべてみせる。

ソファに並んで掛ける女の子たちはたまち顔を赤らめ、我先にと

「もう一杯だよー」

「もうとっくだって

きやいきやいと争う様に言つ。

「ふふっ、じゃあ、少しの間だけ。君達の心……僕にくれない？」

もう一口、ソーダを口に含み。京は会心の笑みを浮かべた。

グワアン、ゴウン、グワアン、ゴオウン……

教会の、鐘が鳴る。

「け、い……くん」

うつとうつと、夢心地の少女を腕に抱き、京は魅惑的な微笑みを浮かべる。

「僕が欲しいなら……ねえ、君の全てを僕に捧げてくれる？」

そつと、彼女の頬を掌でなぞりながら、親指で唇に触れる。

「君の心と身体……、全部僕のものにしても良い？」

少女はこくこくと言葉もなく首を縦に振る。

「ダメ。ちゃんと言葉をちょうだい。……ちゃんと言えたら、『

褒美にキスしてあげる』

「京……クン……。好き……私の心も身体も、全部あげるから……

だから……」

その言葉を聞いて、京はニヤリと笑う。

「ああ……いいよ。最高の快樂を君にあげる」

唇と唇を、僅かに触れあわせ、キスをする。ただそれだけの軽い触れ合いに不満そうな顔をする少女の首筋に、顔を埋め、その肌に

牙を突き立てる。

「あつ……いつ……痛……」

少女の訴えも無視して無遠慮に血を啜りあげる。

そして数分後。

氣を失い、くたりとした少女の身体を抱えながら、京が顔をしかめた。

「……やつぱりワインテージには程遠いな。葡萄味の砂糖水みたいだ」

ペツ、と唾を吐き捨てる。

「だが……目的は達した。契約は成った。さあ、……明日は僕の為にしつかり働いてくれよ?」

クスッと笑いながら少女の身体を抱え、京は夜の闇の中へと姿を消した。

……こんな風に曇りのない笑顔を誰かから向けられたのは、いつ以来だつただろう。もしかしたら、初めてだつたかもしれない。言葉を失い、木に懐いた那由他に向かつて、元気良く頭を下げ、「え、えーと、ふ、ふつつか者ですが！ よろしくお願ひします！」やる気に満ち満ちた眼差しでこちらを見上げてくる。

「えつと、えつと。村の長さまは、お仕事について何にもお話ししてくれなかつたんですけど、私、何をしたらいいですか？」

「先程、話した通りだ。私の糧となる事が、巫女の仕事。いけにえ日に一度、私に血を差し出せばそれで良い。住まいへ案内する。後はそこで好きに過ごすと良い」

木から身体を引き剥がし、何とか立ち直つた那由他は路の先にある小屋へと彼女を導いた。

村の長屋の一屋分程の広さの小屋。歴代の巫女達が日々戦々恐々としながら、任期満了の日を待ちわびつつその日暮らしを続けてきた場所だ。

扉を開けて入るとすぐ土間があり、水場とかまどが据えられている。板の間には囲炉裏があり、寝具一式が部屋の隅に畳んで置かれている。

鍋やら何やら生活用品は一通り棚に並んでいるし、生活に困る事は無いはずだ。

「今日登つて來た路の途中、先程のあの場所に祠があつたのを覚えているか？」

チエが頷くのを見て、那由他は続けた。

「週に一度、あそこに村人らからの供物として農作物などが捧げられる事になつてゐる。それと、山の山菜や木の実などは自由に採つて良いから、それで日々の食事は間に合わせると良い」

「分かりました！ 早速ですが那由他様、好き嫌いなどございま

すか？」

「は、いや、特には……つ、て、おいこいら、何処へ行く！？」

勢い込んで尋ねてきたかと思えば、即座に踵を返し、山の奥へと駆けだしていく元気な少女の背に、那由他は慌てて声をかける。

「もちろん、那由他様のお夕飯の為の材料調達に参るのですよ！……あれ。ええと、那由他様はもしかしてお食事は……血以外はお召し上がりにはならないので？」

「いや……そんな事はないが……」

ああ良かつた、巫女の“お役目”はきちんと理解しているようだ……と那由他是少しホッとする。もしかして……まだよく理解できていないのでないのか、といつ疑惑が晴れたからだ。

「では、行つて参ります。少々お待ち下さいね、今夜はとびきりのじちそうをじ用意いたしますから！」

だが、安心したのもつかの間。キヤツキヤとはしゃいで山へ分け入つていく少女に、

「こり、だから待て……！ 山には獣やモノノケも多く棲んでおるのだと！？」

「きやー、おつきくて美味しそうな猪！」

「は、猪！？ あつ、危なつ！……」

慌ててついていくハメになる。

それは、これから続いて行く、ドタバタな始まりの日。

「こり、チヒ！ 待て！」

京、と名乗る同族が、海を渡つてやつて来るその日まで続く……幸せな日々は、こつして始まったのだ。

教会の鐘の音が聞こえて。

那由他はふと目を覚ました。暖かに温もつた布団の中から天井を見上げる。

ここは愛羽家 千恵の家だ。自分にあてがわれた和室に敷いた布団の上に、今、那由他是いる。

「今のは……何だ。夢……？」

既に、夢の記憶は大半が霧散し、搖らぐ残像だけが脳裏に焼き付いている。

自分に向けられた、屈託のない笑み。

「チエ……、千恵？」

口の中で転がすたび、甘やかに響く言靈。

「何故だ。……何故、まだ記憶が戻らない？」

封印されていた間に弱体化した身体は、今朝方吸った千恵の血のおかげで大方は元に戻った。混乱していた記憶も戻った。

が。肝心の、封印された頃の記憶……まさに、今必要とされる京との因縁が記されているはずの記憶だけがじつそり抜けおち、どうしても思い出せない。

「今の夢……は」

歴代、幾人もの巫女が自分に捧げられてきた。その事は既にちゃんと想いだした。那由他是その歴代の巫女を全て、少なくとも顔と名前は全部覚えている。

だが……。

「あれ……は、誰……だ？」

夢の少女の笑顔が、思い出せない。思い出そうとするが、取つて代わる様に千恵の顔と入れ替わる。

もう一度。あの夢へ戻れないだろうか？

那由他是目を閉じる。

そう、もう一度あの幸せな日々へ。

ふと気付くと、……何故だろう。暖かい……が 僅かに息苦し

い。何か、少し重たいものが乗つかつてている様な。

けれどそれは不快な感覚ではなく、むしろ程良い熱がじんわりと

身体に浸透していく様で心地良い。

つつらつらとまだ夢の半ばに意識を漂わせながら、その温もりを楽しむ。

今の時期の朝晩はまだ冷える。血の熱さえ足りていれば、外気の寒暖　暑さ寒さを不快に感じるなどあり得ない身体だが、この温もりの心地良さと言つたら。

しばらく布団から出たくくななりそつだ。

(……ん、布団？)

……妙だ。

普段の寝床は、いつでも小屋の外。

例えばそちらの草むらか、丈夫な木の上だとか、枯れ木の洞うつの中だとか。

猛吹雪の中に素つ裸で居ても平氣な身体だ。当然、野宿をするのに布団など使わない。場合により、枕くらいなら持ち歩く事もあるが……。

しかしこれは間違いなく敷布団を敷き、掛け布団を掛け、しつかり全身布団に包まっている状態だ。

しかも、敷布団の下にあるのは霜に濡れた草はらや、『じつじつ』した小石が散らばる地面や、やや安定性に欠ける木の枝などではない。れつきとした床だ。

この山で、寝床となり得る床面など、たつた一か所にしかない。

巫女の住まいである小屋にしか、そんな物は存在しない。

もう一つ。布団だつて、ただ一組だけしか無かつたはずだ。……

そう、もちろん巫女の住まいである小屋にある、ただ一組だけ。

……これが夢なら良いが。もしも夢でないとしたら、今自分は巫女の住まう小屋で、巫女が寝るはずの布団に転がつて寝こけている、という事になる。

考えれば考える程、ふわふわしていた夢心地がとぐろを巻いてそこを漂う意識を締め付ける。まるで真綿で首を絞めるかのよう。心地良い眠りにあつたはずの意識を慌てて水面へと引き上げ、那

由他は恐る恐る目を開けた。

真っ先に目に映つたのは、小屋の天井。そしてそこから視線を斜め右下へと持つていったところで、那由他は全身を強張らせた。

身体の上に掛けられた布団のその上で、布団にしがみ付く様につ伏せに眠る一人の少女。温もりと、重みと、少しの息苦しさの正体は、つい昨日、新たに迎え入れたばかりの巫女だつたらしい。告げられた事実の全てをあつさり受け入れ、怖がるどころか意気揚々と山で食材集めに励み、実際に楽しそうに鼻歌など歌いながら集めた食材を調理し、出来た料理を嬉々として那由他の前に並べ、綺麗に空になった食器を満足げに眺めた後で、せつせと後片付けに勤しんでいた。

そう、そうだ。食材集めの為と山に分け入った少女は、食材に関する知識は一通り持つていてる様で、食べられる山菜やキノコ、木の実と、毒がある等で食べられないものとをしつかり見分け、きちんと必要な分だけ採り分けていた。

が。この山には獣も、モノノケもいる。

まずから、大きな成獣の猪を見て、最初に浮かぶ感想が「美味しい」とは……。

前足で地面を搔き、突撃開始までの秒読みに入る猪を前に、少女は目を輝かせていた。

その巨体が幼い少女にぶつかればどうなるか。那由他是慌てて間に入り、一言命じた。

「退け、獣よ」

九十九神でもない、ただの獣が相手だ。その一言で、猪は脱兎のごとく逃げ出す。

「あー……牡丹鍋の主役が……」

那由他の後ろで、少女は残念そうに呟いた後で、

「次は、逃がしません！」

めらめらと闘志を漲らせ、さらに山の奥へと駆けだしていき

「あっ、じら待てっ……」

……と。こんな調子で一畠中山の中を駆け回るハメになつたのだが。彼女の作った料理は、美味しかつた。物凄く旨い、とはもちろん言えない。あくまで家庭料理として、普通に食べて美味しい、と思える程度だが、それは久々に食べた暖かな手料理で。

那由他がぼそりと無愛想に「つまい」と呟いた言葉に、少女は嬉しそうに笑つた。

朝から調子も狂いつぱなしで、身体はともかく精神的に相当疲れていたのに違ひない。食事の後の記憶は曖昧、しかも途中で完全に途切れている。……食事の後でつい眠り込んでしまつたらしく。野宿が常の那由他だ。眠りこんだ後で無意識に布団に潜り込むなんて事は多分ないはず。……と、すると。

くしゅん、と小さくしゃみをしたこの少女の仕業だらう。

……それにしても。例え寒いからなのだとして、那由他も眠つていたとはいえ、よくもまあ、この自分にこんなにくつついでいるものだ。

寒さのせいか、身を縮こまらせてしまつてはいるが、実に平和で幸せそうな少女の寝顔。

と、不意に規則正しい寝息が途切れ、少女の目がぱちりと開き、那由他とばつちり目があつた。

一瞬、間があつた。彼女が現状を把握しつつ、昨夜の出来事を回想するだけの間が。

そして次の瞬間、蒼白な顔で飛びのき、部屋の隅で平伏し。

その様子に那由他は（ああ、やつぱりか）、と心の中で呟いたが。

「も、申し訳ございません！」

チエは思い切り良く土下座をしながら謝罪の言葉を叫んだ。

「すみません、すみません、昨日は確かに囲炉裏の端つこで寝ていたはずだったのに。い、いつの間にか那由他様のお布団に潜り込もうとしてたなんて……」

良く見れば、目には涙まで浮かんでいる。

「た、大変な失礼をいたしました。本当に申し訳ございません、この通り、謝りますから。お願いです、巫女を辞めるとか山を降りるとか仰らないでください」

「……は、今……何と？」

那由他は聞き間違えたのかとつい聞き返した。今の言い様はまるで巫女を辞めたくない、山を降りたくないと言っている様に聞こえたから。

「昨日、言つたはずだ。巫女の任期は5年。それが過ぎるまで、山を降りて村へ帰る事は出来ぬのだと。ところで……昨夜、私を布団へ寝かせたのはお前か？」

「はい、お食事の後、そのままお休みになつてしまわれたので。それで……あ、あの……無礼を働いた分のお咎めは……？」

恐る恐る顔を上げて尋ねる少女に、那由他是片眉を上げた。

「無礼？」

「おつ、畏れ多くも山神様のご寝所に潜り込むなんて、とんだ御無礼を……」

どうやら今、彼女が畏れているのは那由他自身ではなく、自分がやらかした行為に対する那由他の反応であるらしい。

「それも、昨日言つたはずだ。私は神などではない、ただのモノノケだと。布団の件ではむしろ私が謝らねばならん。……人の身、それも女子供の身ではこの時期の山の上の朝晩の冷えは堪えるだろうに、お前の布団を私が使つてしまつたからな。寒かつたのであるう？」

「あ、はい……いえ、あの。わ、私、うすにはたくさんのかょうだいがいて。いつも狭い部屋でぎゅう詰めて寝るのが当たり前で。こんな広いところで寝るのは初めてで……それで、人恋しくなつて……つい」

涙目のまま、必死に訳を言い募る。

「巫女は、私の大事な糧。体調を崩されでは私が困る。この布団は本来お前の為の物。お前が謝る必要はないし、もちろん咎めなど

せぬ

そう言つてやると、少女は身体の緊張を解き、明らかにホッとした顔でよみがへく床から立ち上がった。ペニント、一度頭を下げ、「ありがとうございます。すぐに朝食の支度を致しますので。少々お待ち下さいね」

そしてやはり嬉しそうな顔で言つ。

さすがに那由他も認めざるを得なかつた。

彼女が、那由他を畏れはしても、恐れや嫌悪の感情などただの一かけらも抱いていないのだという事實を、那由他の巫女である事に、真実喜びのみを感じているのだと。

那由他の心に、かつてない程大きな疑問が渦巻いた。何故、と。

野菜の煮物とみそ汁に白米と言ついたつて純朴な朝食を、やはり彼女と2人で摂る。

あからさまな恐怖や嫌悪を向けられるのが当たり前だつた那由他にとつては実に新鮮な光景である。

今、彼女から向けられるのは純粹な畏れと好意。

少しばかり決まり悪く、尻の座りが落ち着かない気もするが、悪い気はしないし、居心地も良い。

「チエ、今日も山へ行くのか？」

「はい。でも、その前に弓矢か釣り竿など調達できないものかと思つております……」

「弓と竿？」

「兄さまについて川へ釣りに行つたり、弓の稽古などもよくしておりましたので。狩りや漁ができるれば、お肉やお魚料理を那由他様に召し上がっていただけます」

少女は張り切つて言つた。

「弓矢の腕前は、兄さま達より上手いと、師範にお褒めの言葉も頂きました。村へ迷い込んで来た鹿を仕留めた事もございます。昨日は逃げられてしましましたが、今日こそはあの猪で牡丹鍋を……」

グッと、箸を握りしめ堂々とその決意を宣言する。

「チエよ。この山には獸だけでなく、モノノケも多く棲まっている。人の子が一人、山の奥まで分け入れば、あつという間にそれらの餌食となるう」

空になつた茶碗を静かに置きながら、那由他は言った。

「私は、神ではない。私は、モノノケ この山に棲まう全てのものの主だ」

湯のみに、淹れたてのお茶が注がれる。

「私の命に逆らえるものは、この山には居ない。この小屋の周辺には決して近づかぬよう厳命してある故、この小屋周辺は安全だ。だが、山に於いては自然の規律が唯一かつ絶対の掟であり、弱肉強食は当然の理。一步そこへ踏み入れば、お前もその理に組み込まれる事になる。」

注がれた茶を一口啜り、湯のみを置く。

「この山に棲まう八百万ものそれら全てにお前を紹介して回るのは不可能だ。そうである以上、そうなればお前がただの非力な人の子である限り、お前はそれらの餌となる定めにある」

安い茶葉だが、割合に美味しい。

「お前に、私の“印”をやろう」

それは、全ての巫女に提示してきた提案だ。

「その“印”は、お前が私のものだという証。主の所有物に手を出す輩はこの山には居ない。……お前が眞実、私の巫女である事を受け入れるのならば、お前にこの那由他の“印”を授け、刻んでやう」

これは、より確実な身の安全を保障する為の提案。

だが、これまで誰一人として那由他の印を受け入れたものは無かつたのだ。

当然だ。化け物の所有物である証を欲しがる者などいるはずがない。

これまで気の遠くなる程の間ずっと、そう思つていたのに。

この少女は、那由他の当たり前をいとも容易く打ち碎く。

少女は、あつさり頷き、期待に満ちたまなざしをこぢらへ向けた。

「……では、手を貸せ。お前、利き手はどうぢらだ、右か？ そうか、では右手を出せ」

差し出された手を取ると、好奇心で輝いた瞳で、ジッと那由他の手元を見つめるチエの頬がほんの僅かに赤らんだ。

その手の甲に、血で己の印の紋様を刻む。

印は、証。ある一定以上の力を有したモノノケのみが有する、己の力の象徴。

血は、那由他の力そのものであり、全てのモノノケにとって、力こそが存在の証。

血あかを用い描いた印は強力な“力の誇示”

それを刻むという事は、これは自分のものだという主張 獣が己の繩張りを主張して行う匂いつけと意図は同じ。

刻まれた印は皮膚から身の内へ取り込まれて見た目には消えるが、獣やモノノケはそれを感覚で察知する。

だが、自身では分からぬのだろう。チエは印の消えた右手の甲を左手で撫でさすりながら、首を傾げている。

「……目には見えずとも、山に棲まつものたちは必ず気付く。お前が、私のものだとな

もう一口、茶を啜り。

「そうと知りながら、お前に手を出す輩はこの山には居ないはずだが、もし万が一そういう輩に会くわしたら、私の名を呼べ」

印を刻んだ手の手に視線をやる。

「その印は、私の一部。それを持つお前の声ならば、この山のどこに居よと私は察知できる」

そう、だからこれで一安心だ……。

そう、那由他は思っていた……の、だが……。

「ただ今戻りました！」

朝食の片付けを済ませ、洗濯をし、洗ったものを表に干して。太陽もだいぶ高く昇り、気温も朝より上がり過ごし易くなつてきた頃合いを見計らい、今日も元気に山へ出かけて行つた彼女が、やっぱり元気いっぽいに戻つて来たのは毎前の事。だが、その彼女には連れがいた。

「あ、主……」

大きな体躯に似合わない声を出したのは。

「迅……？」

大陸に棲むものと比べればやや小柄ながら、山の王者であるはずの日本狼の九十九神。

それが、目に涙を一杯にためながら、得意げな笑みを浮かべるチエの後ろにつき従つてゐる。

狼は本来家族単位の小さな群れをつくる。その中の順位は絶対で、自分より強いものの前に立つて歩くなどあり得ない。逆をいえば、自分より弱いものが前に立とうとしたなら、当然それ相応の報復をし、自らの位を主張する。

それは、長く生きて九十九神となつた後も変わらぬ狼の性だ。

この山に、迅より強いものは那由他以外には居ない。この山で迅を従えられるのは那由他のみ。確かにチエにはその那由他の“印”があるが、あれはあくまで“所有印”だ。単に危害を加える事を禁じているだけで、それ以上の意味は無い。

しかし、狼はチエの後ろに黙つてつき従つてゐる。……今にも泣き出しそうではあるが。

群れの中で順位を上げようと思えば、上位のものに闘いを挑み、勝つて奪い取らねばならないはずだが……。

「……迅？」

「主……あの娘、何者ですか。巫女？ 人間？ 嘘でしょう？」

ついに堪え切れずに溢れた涙を滂沱と流し始めた迅がこぼした言葉に那由他は啞然とするしかなく。

「ええ、ええ。主の“印”を持つてましたからね、しかも相手は

人間の女、それも子供でも非力だし、怪我させちゃマズいと油断してたのは認めますよ。でも、まさか……この俺がこんな小娘にしてやられただなんて……」

「うおう、うおう、と泣きながら愚痴る狼と、機嫌良く笑うチエを前に、那由他は、顔を引きつらせながら黙り込むしか、なかつた。

「良いのか、本当に。……たかがモノノケ一匹の為にお前は命を捨てるに申すのか？」

チエに問うたのは、人づてならぬモノノケづてによつやく見つけた神だ。

「必ず戻ると、お約束したのです。の方を、あそこからお救いする術を携えて、必ず戻ると。再びお会いできるその日を夢見て……それだけを支えに私はここまで参りました」

降つて来るような荘厳な声に、チエは首から下げた赤い勾玉を胸に抱き、静かに答えた。

「長く、辛い道のりでしたが……今もあの方が感じてらっしゃるであろう苦しみを思えば、大した事ではございません。そして、今ようやくあの方をお救いする術を見つけることができたのです」

あの日　あの町を旅立つたあの日から、チエは歩き続けた。

那由他を封じた術がどういったものなのか。

それを知るため、遠く他所の教会へ出向き、彼を封じた神父と同類の者らが集う中で、彼を害した教えを必死に学んだ。

エクソシスト  
祓魔師が扱う術は基本的に彼らの「神」に仕える天使の力を借りたものである事。

あの時展開された魔法陣から、地水火風を統べるとされる大天使の力を用いた術である事も知つた。

だが、その力を打ち消す為の術など、当然と言えば当然だが、どの教典にも載つてはいなかつた。

だが、チエは考えた。彼らの言う天使とは、位の高い精靈の一種の様なものなのではないかと。

それならば、同等の力をぶつけて相殺すれば、術を打ち消せるの

ではないかと。

そう考えたチエは、今はもう懐かしい、那由他と過ごしたあの山へと出向き、彼から預かつた力を使い、山のモノノケたちに話を聞いて回った。

そこで得た情報を頼りに、モノノケからモノノケへと、噂を集め回った。

……モノノケ相手に、ただで情報を得る事はできない。

例えば、髪や生爪だったり。例えば血や肉だったり。あるいは寿命の一部だったり。まさに文字通り身を削りながら辿り着いたのは、四獸と呼ばれる神の獸。

地の玄武、水の青龍、火の朱雀、風の白虎。

彼らの棲まう地を、これまたモノノケ伝いに探し当て、彼らの“印”を分けて貰つて歩いて。

そうして集めた力を今、術として成す為に訪れたのは、四獸の長である神、応龍のを祀る社の奥、異界との狭間の谷間で。

「これは私にとつて最後の試練なのです。もう一度、の方にお会いするための……の方との幸せな永久の日々を得る為の試練を受ける代償が、今世の命なのだと、ただそれだけの事です」

山の山頂。深い霧のかかる幻想的な景色。そこは既に人の世とは一線を画した神域。

「その術を扱うのに、人の身では耐えられない。一度魂だけの存在になる必要があるだろう。その身体で死を迎へ、転生を待つ間に魂の中で術は熟し、再び転生してこの世に戻つて来た時、初めてその術は発動する。が、一度転生すれば今ある記憶は全て魂の奥へ封じ込められ、新たな生ではまず思い出せなくなる。……事実、前世の記憶など今思いだせるか？思い出せないであろう？だがその術は、そのモノノケとやらが封じられたという棺に直接触れるかもしくはほど近い場所に十余年あまりもの間居続けねば効果は無い。まあ……一日たりとも離れてはならん、とまでは言わぬがな」

それを聞いたチエは、胸を撫で下ろした。

「……“あれ”を、彼らに託してきて良かった」

だから、大丈夫。

「応竜さま、お願ひ致します。術の完成の為、お力を貸しください」

チエは迷う事なく応竜に頭を下げた。

「決心は、揺るがぬのだな。良いだろ？、承知した」

とぐろを巻いた竜神が、三つ指の手に持った龍玉を掲げた。

「お前の死後、術を仕込んだお前の魂を確實に天へ送り届けると約束してやろ？」

龍玉が、淡く光る。　　と、チエの前に杯が一つ現れた。杯は透明な何かの液体で満たされている。

「杯を干せ。すれば、魂を穢れさせる事なく確實に死ねる。ただし、苦しまずに死ねるなどとは思つなよ。自ら命を断つ行為が罪である事に変わりはないのだからな」

「……ありがとうございます」

神に、助力の礼を告げ、チエは杯を手に取った。そのまま口元へ運び、くびつと一息にあおる。「ぐり、と、ほんの一口分の量の液体を飲み込んで　杯が、手からこぼれ落ちた。

杯は、地に落ち割れる前に霧の様に消え失せ、代わりにチエの身体が地へと倒れこんだ。

全身に雷を打ち込まれた様な凄まじい痛みが走る。

せめて、この神の前で悲鳴を上げてみつともなく転げ回る様な失態だけはすまいと必死に地面を掻き、歯を食いしばって悲鳴を堪える。

痛い、痛い、痛い。頭の中にそれしか思い浮かばなくなるが、それでも脳裏に焼き付いて離れないのは、那由他の顔で。

この痛みは、彼を救うための試練の一つ。そう思えば、この位は

耐えられる。

次第に思考がぼやけ、那由他の顔もぼけていく。

「の凄まじい痛みすらも、暗闇の奥の更に奥底へと沈んでいく

そして、何も分からなくなつた。

「……あ、いけねえ。俺え、もしかして寝過しちまつたかも？  
うわあ、やべえ！ い、急がねえと、チ工様にブチ殺される……！」  
むくりと、ほら穴から顔を出し、辺りを見回してから、慌てた様にそこから飛び出し、深い山の奥、生い茂る森や林の中を、神速で駆け抜ける大きな獸があつた。

「大事な預かり物、主に届けろつて」命令だつたな。……ああ、  
懐かしい。確かに、主の匂いと氣配だ」

獸は、嬉しそうな顔をした。

「チ工様、やつたんだな。さつすがチ工様！ もうしばし、待つ  
てて下せえよ！ 今すぐ、馳せ参じます故！」

山の獸 猿や鹿が怯えて逃げまどい、冬眠前の食い溜め中の熊  
でさえ、慌てて路を譲る中、獸は巨体に似合わぬ軽快な足取りで疾  
走を続け

……何だろ？ またまた、またしても何だか妙な夢を見た気がする。

炊飯ジャーの蓋を開け、きちんとご飯が炊けているのを確認し、  
湿したしゃもじで十字を切り、ふんわりとかき混ぜながら、千恵は  
ため息をつきつつ眉間にしわを寄せた。  
妙な夢を見た、という気はするのに、やはりといつか夢の内容が  
思い出せない。

考え込みながら、鰹出汁と薄口じょりゅを煮たてた鍋に、溶き卵を流す。

と、キッチンタイマーが鳴った。

コンロ下の魚焼きグリルを開け、ジュウジュウと鮭の皮皿に程良く焦げ目がつき、良い焼け具合なのを確認し、皿に盛る。

塩茹でしたブロッコリーをゴマで和え、盛り付けた皿を食卓へ運ぶ。

四人掛けの食卓に掛けながら、興味深そうにテレビを見ている那由他の横に、もう一人、いやもう一羽居る。

「……これはテレビ、という機械……道具でござつて。遠く他所で写したものを、これで見る事ができるのです。これは毎朝やつている報道番組で、いわゆるかわら版の映像版みたいなものでして……」

と、文明の利器について説明しているのは、あの昨日のからす。

「え、……と。」飯、出来たんだけど……そぢは?

那由他の前に皿を並べつつ、尋ねると、からすが頭を下げ、

「我が名は天羽 約150年、この家に憑いている家神に御座います」

と、人の言葉を喋った。

「……千恵。お前、天羽が見えるのか?」

その横で、那由他がからすと千恵とを見比べながら尋ねる。

「え……? そりやあ、まあ。だって……普通に居るし。……でも、そういうえば夏也は気付いてなかつたみたいだつたよね、昨日」

「千恵様の持つ魂の御力 なのでしょうな、やはり……」

天羽はポツリと小さく呟き、その言葉に2人が怪訝そうな表情をするのを見て、

「……迅め。一体何処で道草を食つておる。よもや、まだどじやその穴ぐらで寝こけている等とは申すまいな」

忌々しげに呟く。

「……待て。今、迅、と申したか? 迅を知つてゐるのか?」

「……迅の事は、覚えておられるのですね。はい、存じ上げております。那由他様が封印されてしまわれた後の事ではございますが、直接会いましたので」

「……お前は当時の事を知っているのか？」

「直接は、存じ上げておりません。私は、とある方から事情を伺い、そのお話の内容を存じておられるのみでございます」

「……とある方？」

「はい。その御方は那由他様にお仕えしておられた最後の巫女様に御座います」

那由他の脳裏に一瞬、夢の中の笑みがちらついた。

「最後……、私の記憶にある一番最後の巫女の名はユリ……そう、任期を終えた彼女を見送つて」

見送つて、そして

「……その後の記憶がない。封印から目を離めた直後はまるで頭にもやがかかるつた様で、自分の名すらまともに思いだせなかつたが……」

那由他は、ちらりと千恵を見やつた後で目を伏せる。

「あの夜、千恵に触れた時に感じた熱がそのもやを掃い、私は自分の素生を思い出せた。それでもまだ朧だつた記憶も、千恵から血を得て取り戻した。だが、その記憶だけ、未だ深い霧に覆われ、良く思い出せない」

「……ユリ様は、かの方の前任の巫女にござります。彼女に代わり、次代の巫女として選ばれたかの方は、那由他様が封印された後も、那由他様の巫女として、那由他様の為に、その封を破る術を探し続けておられました」

「……巫女、が？ まさか」

天羽は、ふさふさの胸元の羽毛を搔き分けるように嘴を挿し入れ、そこから何かを咥えて取りだした。

それは、赤い珠 いや、それには見覚えがあつた。赤い、勾玉。

「これは、かの方から託され、今日まで丁重に御預かりしていた物。記憶の封を完全に解く為に必要な三つの鍵の内の一つにござります」

天羽は、それをそつとテーブルに置いた。

那由他は怪訝な顔でそれを眺めながら手に取り、そして首を傾げた。

「……特に、何も感じないのだが」

「はい。……残念ながら、それ一つだけでは何の用も為しません。三つのうちのもう一つの鍵は、迅がかの方から託され、護っているはずなのですが」

「迅、が？ 巫女の……人間の頬みごとを聞き入れた……と？」

ポカーンと大口を開けて啞然としながら、那由他是信じられない、と小さくぽそりとこぼした。

「鍵は、三つある、と言つたな。後の一つは……」

「すでに、揃つてござります。ですから、迅が持つ鍵が最後の一

つ　それさえ揃えれば」

天羽は、千恵を一度真つ直ぐ見据えた後で時計を眺めて言った。

「ですが……今は、迅がそれを持って参らぬ限り、どうにもなりません。　お時間もそろそろ無くなつてまいりましたし……この続きはまた後ほどにして、今はお食事をお召し上がりになられては如何ですか？」

天羽の視線につられて振り返った千恵が悲鳴を上げた。

「ぎやあ、もうこんな時間！！　早くしないと遅刻ーーー！」

慌ただしく食卓につき、猛然とご飯を掻き込む。

「……」

那由他是まだ何か考え込んでいる様だつたが、それでも茶碗と箸を手に持ち、黙々と食事を始めた。

微妙に固かつた表情が、一瞬、和らいだ。それは、ブロッコリーの胡麻和えを口へ運び、一度、一度と咀嚼した時の事。

「どうやら好みの味だつたらしく、……「つまご」と千恵の耳にさりげなく程の小声でポソリと呟いた。

もぐもぐと、皿に盛つた分をあつと、う間に平らげてしまった。

時間は正直結構切羽詰まつてきている状態なのに、自宅での食事とくに朝食に限つては一人で食べるのが当たり前だつた千恵は、なんとなく漂うほのぼのとした空気に思わずそのまま和んでいたい気分になる。

が、もちろん現実にはそつはいかない。食後のお茶を啜る那由他をしり目に、大急ぎで2人分の弁当を用意する。

そして。十数分後。

隣で小馬鹿にした視線を向ける夏也と、張り切る千恵とを那由他是引きついた顔で交互に見比べた後で、ため息をつき、顔を引きつらせたまま一応、尋ねてみた。

「……千恵。私に、一体何をしる?」

「うん? だつて那由他の自転車は無いし、そもそも乗つた事無いでしょ? だから取り敢えず私の後ろに乗つてつて」

千恵が、自転車の荷台を指して言つた。

「もうちょっと時間に余裕があれば歩いてでも行けるんだけど……」

「今から歩いて行つたんじゃ、確実に遅刻だな。別に、一日か一日位なら、兄貴の自転車貸しても良いけど、……乗れないんだろ、お前?」

「……確かに、乗つた事はないが……」

へへん、と少々得意げな表情を隠しもせず鼻で笑つた夏也に、少しムツとしながら答えるも、

「今は『初めての自転車講習』やつてる時間はないんだ。……とはいえ、お前と千恵とで二人乗りなんかさせられるか。おい、お前。千歩譲つて俺のに乗つてつてやるから、うだうだ言つてねーでとつと乗れ」

千恵の後ろに乗るよつは……と、渋々彼の後ろで荷台にまたがるハメになる。

忙しない朝の街を、2台の自転車が軽快に走り抜けて行く。

今日も、天気は良さそうだ。その分朝の空気は冷え、頬に当たる風が冷たい。

那由他は、遠い青空を仰ぎ、眩しい日差しに目を細め。

千恵は、それを少し後ろから眺めつつ、朝の話を思い返しつつキン、と心にできたささくれ傷が地味に痛むのを感じ、首を傾げながら、自転車のペダルを思い切り踏み込んだ。

そうして、昨日と同じく京を警戒しつつも、当たり前の日常が過ぎていく……と、思っていたのだが。

「まさか……今時、こんな場所で吊し上げ？ そんな一昔前のマングみたいな事、本気でやつてるの、コレ？ で、『ご用件は？』ついつい半眼になりながら、千恵はいかにもな場所 学校の校舎裏の中庭で、自分の周りを取り囲む女子の集団を眺め回した。そう、昨日と同じく那由他や風花とお昼を食べようと教室を出ようとしたところで、同じクラスの女子に呼び止められた。

昨日、那由他を囮んでいた女子の中、きつい眼差しでこちらを睨んで来た そう、思い出した……確かに名前は音矢夕子。

どうやら、彼女がこの集団の頭田らしき。

彼女に声を掛けられた時点で、そのシンケンした態度にあまり良い予感はしていなかったとはいえ。

まあ、用件に關してはなんとなく察してこる。おそらく大方

……

「ねえあんたさあ、若宮君のコト、どう思つてるワケ？」

あまりに予想通りの答えに、千恵はため息をついた。

(……ああ、やっぱりか)

「イトロつて聞いたけど……まさかホントに一緒に暮らしてゐるケ？」

「確かに那由他はイトロで、今一緒に住んでるナビ。それがどうかした？」

イトロ、というのは大ウソだが。眞実を告げたところで彼女たちは信じまい。

「ホントにそれだけ？ 単なるイトロつてだけにしてはちょっと

親密過ぎる気がするんだけど」

千恵は先頭切って詰めよつて来る彼女を負けじと睨み返しながら

言った。

「彼の事をどう思つてるか……だけ？」

千恵は当たり前に言い放つ。

「那由他は、私にとつて大事な人だよ」

「なつ、だ、大事な人つて！ ま、まさかあんた、若宮君と付き合つてるの？」

夕子がカツと叫ぶと、後ろの集団からも、

「えー、全然似合つてなーい」

だの、

「昨日も駅前で暴れたつて噂になつてたんだよ。もう、女じゃないよね？」

「若宮君、この子に脅されて付き合わされてるんじゃない？」

「えー、若宮君かわいそー」

だのとブーブー罵る声が次々に上がる。

「あんた、若宮君には似合わないって自分で分かんないの？ さつさと別れなさいよ！」

それを総括するように、彼女は千恵に突きつけた。後ろからは尚

も「別れる」コールが続いている。

「……私、那由他とそういう関係だなんて一言も言つてないんだけど」

千恵は一段低い声で言いながら腰に当て、

「私と彼はそういう関係じゃないし、人の恋路に口出しする趣味もないけど。でも、あんた達に彼を好きだなんて言つて欲しくない」

周囲を睥睨する。

「なつ……、何であんたにそんな事言われなくちゃならないのよ！」

「それはこっちのセリフ。もし仮に私と彼が付き合つてたとしても、ううん、そしたら尚更、何であんた達に別れるなんて言われないやならないのよ、それもこんな形で集団を、真っ向から睨み返し。

「ねえ、大事な人つて言われて即イコール恋人だとしか思えないの、あんた達つて？ 親とかきょうだいとか……家族は？ 友だちは？ あんた達にとつて大事なのは彼氏だけとか言つ？ 他は大事じやないワケ？」

問い合わせを突き返した。

だが、その問い合わせに応える声は意外な場所から上がった。

「 全くもつてその通りだな」

女子の集団の背後から声がした。彼女たちは慌てて振り返る。

「え……あつ、わ、若宮君……」

「恋人、というのはつまり将来は夫……すなわち家族になるやもしれん相手の事だろう？ 友や家族を大事にできない者が、果たして本当に恋人を大事にできるのか……。甚だ疑問に思えるのだが」はなは「那由他は、肩をすくめて見せた。

「え、那由他？ 何でこんな所に……？」

「お前の友人に、えらい剣幕で助けに行つて来いと詰め寄られた。だが見たところ、お前一人で充分対処可能のように見受けられたしな。むしろ私が割つて入つた方がかえつて厄介な事態になりそうな気もしたから、少々見物していたのだが」

言いながら、那由他はあさつての方を睨みつけた。

「うーん、全く期待ハズレだつたねー」

その視線の先 ストン、と2階の窓から身軽に飛び降りたのは。

「京……」

「嫉妬に狂つた醜い女共に囮まれて滅茶苦茶にされて、『きやー那由他様ー！』とかつてそいつに縋りつくト』とか見たかったのに」

クスツ、と嫌な笑いを浮かべた京。

「その芯の強いとこ、変わつてないね。……面白くないなあ

パチンと指を鳴らして。

「正気のまんまの彼女たちじや、君の相手には役不足だね？」

京は可愛く首を傾げて見せた。

「……こうすれば見られるかな、僕の期待する光景が」

千恵は京を警戒しつつも、その言動の意図が掴めず訝しげに彼を睨んだが、その隣で那由他が激昂し、叫んだ。

「 貴様！」

京はその様をさも愉快そうに眺める。

「フフッ、さあどうする？」

おかしそうに笑いながら、那由他に問う。

「馬鹿な生き物だよな、人間なんてさ。ちょっと甘く言い寄れば簡単に墮ちてくれる。一時の享樂と引き換えに、彼女たちは僕に心を差し出した」

ゆらりと、集団が動いた。

「まあ当然分かってると思うけど、一応念押し。僕が彼女たちと交わしたのは單なる言靈の契約。彼女たち、生物学的にはまだ人間のままだけど……」

ヒュウ、と耳元で空を切る音がして。

千恵は反射的に避け 直後、トスッと背後で軽い音がして。

背後の木に、カッターナイフが突き刺さった。

「ちよつ……、何つ、刃物つて……冗談じゃ済まな……つ、て！」  
やけに素早く後ろに回り込んだ一人が、拾った枝切れを千恵の頭目掛けて降り下ろそうとしたのを軽げて逃れる。

ぼきつと、狙いを外して地面に当たった衝撃で折れた枝切れが飛んでくるのを更に跳んで避け、落ちたそれを拾つてクルリと後ろへ向き直り、振り下ろされるもう一本の木切れを受け止める。

庭木のか細い枝木に、女の細腕とはいえ、こんなものに目一杯の力を込めて頭をぶん殴られれば軽傷では済まないだろう。  
がつちり正面で受け止めたのを跳ね返して立ち上がり、ブン、と木切れを振り回して牽制し、間合いを確保する。

頭で考える余裕などない。それら全てを脊髄反射でこなした千恵は、いつの間にか自分一人だけ校舎の中で、窓から顔を出してひらひら手を振つて笑つている彼を睨みつけた。

千恵の視線に気づいた彼は満足げに微笑み。

「君の持つその“印”。それがある限り、僕自身は君に手を出せないけどね……こうしてお願いすれば、君を痛めつけるなんて朝飯前……おっと、この時間じゃ昼飯前だつたね？」

そうおどけてみせた。

ヒュッと小石が頬を掠め、ピッと一筋頬に傷が走り、ジワリと血が滲む。

それを皮切りに、ヒュンヒュンと幾つも石つぶでが宙を舞い、千恵は慌てて手近な木を盾にする。

「ほーら那由他様、大事な大事な契約者様が傷めつけられますよ？ わーあ、どうしますー？ ねえ、これでもアンタは彼女たちを救う？ お優しい土地神様？」

那由他是憤怒の形相で京を睨みつけるも、そこから動こうとしたい。

千恵がいて、女子の集団があつて、那由他がいて。

女の子たちは京の盾となる様に、校舎の前に陣取る集団と、千恵への攻撃に加わっている一つに分かれ、那由他に直接構う者は一人も居ない。

ちょうど、那由他の周りだけぽつかり空間が拓けていて。距離的には、京を攻撃するにも千恵を助けるにも、一步踏み出せばすぐにも女の子たちに手の届く距離。

だが、呆れるほどに誠実で律義で 土地や人を守る土地神を自負する彼は、その拳を痛そうな程に握りしめ、怒りと悔しさで震え、京を見据えるその目は、常の黒からほのかに赤みを帯びている。

京を攻撃するにも、千恵を助けるにも、間には女の子たちが居る。京に操られた彼女たちが、黙つて通してくれるはずがないだろう事など、容易に察せられる。

那由他は、彼女たちを傷つけたくないのだろう。

京の好い様に言い包められたらしい彼女たちに責任が無いとは言えない分、单なる被害者と言うにはさすがに抵抗があるが、今回の場合、彼女らは巻き込まれた側である。

千恵だつて、彼女たちを巻き込んだ責任は感じている。 でも。

「ねえ、京。 確かあなたは、私が滅茶苦茶にされて『きやー』とか可愛く悲鳴をあげてる姿が見たかつたって言つたわね？ でも残念、……お生憎様<sup>あいじやく</sup>。 悪いけど私、そんなキャラじやないの。 それともう一つ、『愁傷様<sup>しゆきょうじやく</sup>。 私はね、那由他みたいに優しくなんかないんだよ』

隠れていた木の陰から飛び出し、京の前に並ぶ女の子たちの首後ろの急所を狙つて素早く手刀を繰り出し、彼女たちの意識を強制的に奪う。

次々と倒れ伏す女の子たちを冷たく見下ろし。

「私は、ただ守られ底われしてきやーきやー悲鳴をあげてるだけなんて、とてもじゃないけど我慢できないもの。自分の大事なものは自分で守る。……その大事なものを壊そうとする相手にまで情けをかけられる程、私の心は広くないから」

ピッとまた一筋頬に傷が走る。

「ただの人間でしかない私も、京……あなたに直接手出しするのは難しいけど。 素人の女の子が相手ならこの位は」

千恵は飛んでくる石つぶてに構わず突っ込み、もう一つの集団に迫る。

顔や腕、脚 直に空に触れている箇所に、細かな傷を幾つも掠<sup>く</sup>ら

えながら、それでもしなやかな動きで一人一人確実に仕留めていく。

「 私にとつては朝飯前……じゃなかつた、昼飯前だったわね」

最後の一人が地面に沈んで。

「うーん、確かにこれは僕のミスキャストだねえ」

やけに芝居<sup>しばゐ</sup>がかつた声で、いかにも残念そうに京が言つ。

「 ……京よ。 私の契約者に傷をつけ、私の庇護<sup>ひご</sup>下にある者たちにまで手を出した以上、覚悟はできているな」

今や完全に赤く染まつた瞳で京を静かに睨み、那由他がようやくそこから一步踏み出す。

そしてまず先に千恵の許へと歩み寄ると、頬に幾つも走る傷から

滴る血をそつと指で優しく拭い、指を染めた血をペロリと舐め。

「……すまなかつた。護ると言いながら、お前に怪我をさせた」

那由他は、謝罪の言葉を口にした。

「こちらを見下ろす優しい眼差しを向ける瞳の、人なりざる赤い色がとても綺麗で。

「大丈夫だよ。だつて私があなたと結んだ契約内容は、京から私を守る事。言つたでしょ？ 普通の人間相手なら負けないつて。この程度の傷、舐めとけばすぐ治るし……つてか、あなたの“印”的お陰で既にもう殆ど治つてるし」

実際、腕や脚にできた傷のあらかたはもうとつくて血も止まり先にできた傷は既に塞がりかけている。

今、那由他が拭つたのは一番新しくできたばかりの傷だ。

「あーあー、見せつけてくれるねえ。『こちそつさまー。……でもそ、ちょっと油断し過ぎ』

京にとつては万事休すな状況のはずが、彼は余裕の笑みを浮かべる。

「……まあ、ちょっと旗色が悪いから。今日のところは退散するけど

「私が、お前を見逃すと思うのか？」

「見逃さざるを得なくなるだろうね。僕は彼女たちに、僕と一緒にカラオケで楽しく過ごす代わりに、『君達の心を僕にくれない？』つてお願ひしただけだつたんだけど」

一様に倒れ伏した少女たちの中、むくりと身体を起こした少女が一人。

音矢タ子、だ。

起き上がった彼女に、意識がないのはすぐに見て取れた。なのに、ゆらゆらと不安定な足取りながら、こちらへ歩いてくる。

「彼女は僕ともつと深い関係になる事を望んだ。僕の口づけ一つと引き換えに、彼女は心だけでなく、身体もくれたんだ。……僕のキスは特別製だからね」

那由他は京にのみ聞こえる声で尋ねた。

「……彼女の血を、吸つたのか」

「まあね。でも、そこはお互いまじやない？……吸つたんでしょ、僕のイヴの血を。ねえ、僕のヴィンテージ・ワインの味はどうだった？」

京はニヤリと笑い、同じく那由他にのみ聞こえる声で答えを返し、悔しげに睨んだ後で、小さく肩をすくめ、京はわざとらしくひらひらと手を振りながら、悠々と廊下を歩いて去っていく。

「じゃあね、後よろしく頼むよ」

「……キス一つと、引き換え？ 何、じゃあこの子、京とそんな事しどきながら、私に那由他と別れただなんて言つてたワケ？ あつきた！」

いくら自由恋愛が基本、遊び半分の付き合いも珍しくない時代とはいえ限度はある。

そうふんふん怒る千恵の横で、那由他が一步前に出る。千恵の前に腕を差し出し、自分の背後に庇おうとする。

「千恵、下がつていろ

だが千恵は、

「大丈夫だよ。……女の子相手に怪我はさせたくないし、巻き込んだ事は謝んなきゃだけど、正直あんまり同情してあげる気にはれないし。悪いけど、ちょっと痛い思いをしてもらつて……」

言いながら、那由他の影から飛び出した。

既に意識は無いのだから、失神狙いの急所突きが無意味なのは分かっている。取り敢えず、関節を固めて動きを止めるつもりで軽く組み合い、捉えようとした身体が……するりと、腕をすり抜けた。

それは、素人の女子には不可能な動き。

「え？」

千恵をかわした拍子によろめき、木にぶつかる彼女を振り返れば、先だって投げつけられたカッターナイフを力任せに抜き、那由他へ

と向かっていくのが見えて。

那由他は、身軽に木の枝へ飛び上がりつてそれを避け、そこから更に跳躍して千恵の前へ飛び降り、那由他是苦々しく言った。

「下がつていろ、千恵。彼女は確かにまだ人間ではあるが、今の彼女は普段秘められているはずの力……いわゆる火事場の馬鹿力が、京に無理矢理引き出されている」

ゆらりと振り返りながら、一瞬ガクリと崩れかけ、彼女の顔が僅かに歪む。

「本来備わつてゐる筋力の全てを行使しようとすれば、身体が耐えられず、筋肉が壊れる。本来であれば、無意識にそれを抑制するのが当たり前なのだが、京に操られ続ける限り、彼女が己の心身を省みる事は無い」

「そんなつ、酷い事……」

「……安易にモノノケに心身を捧げ渡した愚かさの代償、と切り捨てるのはさすがに酷だな」

カツターを振りかざし、ゆらゆら近づいてくる少女に那由他是憐みの視線を向けた。

「千恵、下がつていろ」

もう一度厳命を下し、那由他が一步踏み出した。少女は那由他目掛けて刃を突き出す。那由他是あえてそれを避けもせずに素手で受け止め、刃が掌をつき通し手の甲まで貫通するのを冷めた目で見下ろしながら、それごと少女の手を掴んで捕えた。

鈍く光る刃の先で、ぬらぬら赤く染めていく血を、那由他是もう片方の手で拭つた。血に染まつた手を握りしめ、再び開かれたその掌の上には、見覚えのある赤い勾玉が乗つていて。

那由他是それを指でつまんで少女の唇に押し当て、口内へ そして喉の奥へと押し込み、無理矢理それを飲み込ませた。

「那由他の名に於いて命じる。今この場で京との契約を破棄せよ」

少女が、弱々しい小声で何かを呟き。途端、少女は糸が切れた様

に力クンと膝を折り、しなだれかかる様に那由他の胸へと倒れこむ。それを抱き止めた那由他を見た途端、千恵は胸がチクリと痛むのを感じ、ふと胸を押さえ、無意識に息を詰めた。……胸が、苦しい。

彼がそうしたのはほんの一瞬の事。

彼女を静かに地面に下ろし、掌を貫通したカツターナイフを抜きにかかる。

見るだに痛々しく血に染まつた手。

しかし那由他は何でもない様な顔をして抜いたそれを放り捨て、辺りを見回して苦々しく言つた。

「……逃げられたな」

「いや、それより……大丈夫なの、それ。超痛そうなうえ、ガンガン血が出てるんだけど。血が失くなると動けなるんじゃなかつたつけ？ 血、飲んどく？」

「この程度なら問題ない。それに、血なら先程既に貰つた赤から黒へと戻つた瞳に苦笑を浮かべ、那由他はもう一度、千恵の頬をなぞつた。

そうだ。確かにさつき血を舐めていた。ちょっと切つただけの小さな傷から滴つたほんの数滴の血。

うつかり思い出し、顔から火が出そうになる。全く、一々心臓に刺激的な行動ばかりしてくれる。

「……さて、この娘たち。さすがにこのまま放置するわけにはいくまい？ 千恵、起こすのを手伝え」

と、昼休み終了の予鈴が鳴り響いた。

「……あ、お昼御飯食べ損ねた」

くきゅるるる、と間抜けな腹の音を響かせた千恵に、那由他是つい噴き出しそうになつたのを慌てて堪えた。

「帰る途中で何か食べて帰るか？」

「うん。今日は寒いしラーメンとかうどんとか……あ、でも牛丼の新メニューも捨てがたいんだよね」

「帰るまでには、決めておけよ」

言いながら、堪え切れずに笑いを洩らし、肩を震わせた那由他の姿に、千恵の心臓が、無性にざわめいた。

「……さて。今回の敗因はやっぱり僕のキャスティングミス、だよね。あーあ、那由他には有効だったんだけどなあ」「京は屋上で寝転がり、ケータイをいじりながら咳く。

「大事なものは自分で守る、か……。なら……その大事なものが相手なら、君は……どうする?」

パタパタと、階段を駆け上がる音を聞き付け、京は立ち上がり、開いた屋上の扉から顔を出した少女を振り返った。

「やあ、柊木さん。ごめんね、突然呼びだしちゃって」

甘い笑みを浮かべて京は言つた。

「ねえ、僕と付き合つてくれない……?」

え……なくても一昨日の昼も、晩飯も。やつぱ、ざつか具合悪かつたんじゃないのか？」

那由他の隣で大盛り牛丼を食べていた夏也が言った。

「……昨日？……普通に一人前を平らげていた様に思うが？」

昨夜、夏也宅で出された鍋料理を、遠慮なく突いていた様に見えたのだが。

「ええっ、それは絶対におかしい！」

風花がすかさず突っ込んだ。

「一人前？ いつもの千恵なら鍋一つ平氣で食べちゃうのに！」

「鍋……、一つ？」

那由他の顔の引きつり具合が増す。

「最近の千恵、なんか変だよね。だって、突然倒れたのだってその一昨日じゃない？」

風花がすずいッと獲物を狙う目つきで千恵を下から覗き込むように見上げ、

「あやしーなー。やっぱり何か隠してるでしょ。悩み事があるなら言ってよ、いつでも相談に乗るよ？」

言いながら、彼女は一瞬ハツとした顔をし、

「……まさか。千恵、ホントに恋煩いとかじやあないよね？」

それを聞いてゴフツと夏也が汚く吹き出しだが、当の千恵は不思議そうに首を傾げながら、胸を押さえてキヨトンとしている。

「恋、煩い……？」

「千恵がおかしくなったのって、あのハロウィンの夜からでしょ？……もしかして、京に一日惚れしちゃった……とかじや……ないよね？」

その問いに、千恵は首をぶんぶんと勢い良く左右に振つて即座に否定する。

「違う、あり得ない！ 京とだけはそういうの、絶対ないから！」

「そう？」

風花は一瞬ホツとした顔をした後で、

「でも……京じゃないとすると……」

ちらりと那由他を見ながら、千恵の耳元にボソッと吹き込む。

「若宮君、とか……？」

胸に当たる手を見下ろし、考え込むように黙り込んでしまった千恵に、

「まさか夏也じゃないよね？」

更に尋ねた。

これには、

「え……、何でそこで夏也が出てくるの？」

と即座に逆に尋ねる答えがかえった。

隣で夏也ががくりと頃垂れる。那由他は取り敢えず、夏也の背をいたわる様に叩いてやつた。

「ねえ、千恵。今日これからヒマ? ヒマだよね? ひょつと私に付き合つて。たまには男抜きで女同士のお喋りしましょ。……若宮君、ちょっと千恵、借りてくね? ああ、夕飯時までこはりやーんと返すから」

皿が全て綺麗に空になつたのを見計らい、風花は相変わらずの強引さで千恵を引っ張つて行つてしまつた。

「おい、お前はこの後ヒマか?」

それを那由他と共に見送つた夏也が不意に尋ねてきた。

「いや、特に予定はないが」

「なら、お前は俺に付き合え。ああ、風花が千恵を解放するどうう頃合いには帰してやるから安心しろ」

ついて来い、と席を立ち店を出る。

「……?」

そうして連れて行かれたのは、

「道場……もしかしてここが千恵の言つていた……」

「ああ、祖父ちゃんがやつてる道場で、親父も通つてたつてんで、昔は俺や兄貴も通わされてた。千恵に……女相手に全然勝てなくて悔しくて、面白くなくなつて俺は早々にやめちまつたけどな

カラリ、と引き戸を開けて声を張り上げた。

「おーい、祖父さん居るんだろー？」

建物の外観は、この街に数ある住宅とほぼ変わらぬ装いだ。取り立てて古くも新しくもなく。扉の先には一本、縦に長い廊下が裏口の扉まで続き、左右の壁に幾つか引き戸が並んでいる。

その一つががらりと開き、柔道着を着た男 おそらくあれが夏也の祖父なのだろう、それを踏まえれば歳は七十前後と思われたが、年の割にはまだ若々しく、かくしゃくとした雰囲気がある。

その彼は、つかつかと孫へと歩み寄り。

いきなりガツンと、夏也の頭を容赦なくグーで、殴りつけた。

「い、痛つてー！ 何すんだよ！」

「ゴン、とかなり痛そうな良い音がした。」

「ふん、ここでは師範と呼べといつも言つてゐるだひつ。……で、

夏也。そちらさんは？」

「ん、ああ。千恵のイト……だつてや！」

那由他は軽く会釈をする。

「お初にお目にかかります。若宮那由他と申します。千恵のいとこで、訳あつて先日から彼女の家でお世話になつていています。その縁で、彼や彼のご家族にも良くしていただきまして」

「……それで、ちょっと部屋、貸して欲しいんだけど」

那由他の言葉を遮り、夏也が言つのを見下ろし、彼はハーツと拳に息を吹きかけ、もう一発ガツンと殴りつける。

「夏也。ここではきちんと礼節をわきまえ、田上の者には敬語を使え、といつも言つてゐるはずだな」

……やつぱりいい音がして、

「痛つつ！」

夏也がうつすら涙目になりながら悲鳴を上げる。

「夏也。今日は千恵はどうした、来ないのか？ それと……若宮君、と言つたかね。君は夏也の同級生かね？ 武術の方は？」

「はい、同じクラスです。千恵なら、柊木さんと一緒にですよ。武術は……正式に習つた事は一度もありませんが」

「ふむ。……それで夏也、部屋を何に使つつもりだ？」

「ちょっと、男同士の話し合いを」

するつもりで、と続けようとした夏也を、彼は三度殴つた。

「神聖な道場を、私闘に使う事は許さん。……自己紹介がまだだつたな。私はこの道場の師範を務める、橘<sup>たちばな</sup>柑吉<sup>かんきち</sup>、聞いてはいるどうが夏也の祖父だ。君は、何のためにここへ来た？」

「……すみません。行き先も聞かずについて来たので。ただ、昨日駅前の交番の 船越さん……でしたつけ、彼から千恵を心配していると聞きました。もし良ければ、話を聞かせては貰えませんか？」

夏也が、頭を押さえながら、こちらを見た。

「私はしばらくの間、彼女と同居する事になつています。簡単な事情は千恵自身から聞きましたが、彼女が話してくれた以上の事を、彼女の前で聞くのは良くないと控えていましたが、私は知るべき事をきちんと知つた上で彼女を支えたい、そう思うんです」

「……そうか。取り敢えず上がって……来なさい」

師範は廊下の一番奥の扉を開け、中へ二人を導いた。

「 で、どうなの実際のとこ? 千恵、まんざらでもないんじやないの、若宮君の事」

かなり強引に連れてこられたのは、風花の自宅。その彼女の部屋で、湯気の立つミルクティーを飲みながらビスケットをかじる。カーペット敷きの床に座布団を敷いて座り、適当に足を投げ出して寛ぎながらも、そう迫る風花の顔は全然寛いでいない。完全に真剣そのもの、何かしら有益な情報を得るまでは諦めないからね、と、言葉には出さずとも、その視線が雄弁に語っていた。

人間相手の喧嘩なら負けない自信のある千恵も、風花にこうやって迫られると弱い。

「……どう、と言われても、いとこ、つて言つても会つのは初めてで。本当にまだ会つたばかりなんだもん」

しかも人には言えないが本当はいとこでも何でもなく。それどころか人ですらない。

「でも、嫌いじゃないでしょ、彼の事」

……それは、そうだ。人ではないけれど、誠実で、律義で。よく心臓に悪い事もしてくれるので、責任感が強くて、契約とは

いえちゃんと千恵を守ってくれて。

「うん。嫌いじゃ、ない。ううん、私にとっては大事な人。でも、彼氏とか、そういうのじゃなく、風花や夏也や……お母さんたちを大事に思うのと同じで……」

言いながら、千恵は思い出す。

あの時、音矢さんを抱き止めた那由他を見てチクリと痛んだ心。怒りと悔しさに震えながら睨みつける赤い瞳に思わずドキッとしてしまった胸。

ここ最近、ショッちゅう爆発する心臓。

そして何よりも、彼の傍に居る事で得る安心感が。

例えば夏也や悠兄、風花や両親相手には今まで感じた事のない感情。

本当に……

「ねえ、千恵。それ本当に、例えば夏也相手に感じてるのと同じ？」

千恵の頭に僅かに過った疑問を風花が言葉にして尋ねた。

「最近、夏也ってばどこだかのバンドの女の子に夢中だけじゃ、それについて千恵、何か思う事ある？」 ここ、胸が痛いとか」

千恵は首を左右に振り、

「え？ ……ないけど」

一瞬ドキッとしながらも答える。そう、夏也相手には感じた事ない

い

「だよね。でもじゃあ、若宮君相手には？」 実はさ、昼間千恵がクラスの女子に連れ去られちゃった後、私、若宮君を呼びに行つたんだけど……その時さ、あのグループの一人が彼に告つてたんだ」

「え！？」

「まあ、若宮君の注意を千恵から逸らすのが目的だつたんだろうと思うし、若宮君もその場でソッコー断つてたけど」

「あ、あー、そ、そなだ……」

「ねえ、千恵。今、ホツとしなかつた？ 若宮君が告られてたつ

て聞いて、一瞬ドキッとしなかった？」

……した。胸がチクリと痛んで。その後で、すじくホツとした。

「ねえ、その時彼、何て言つて断つたと思つ？」

風花が何故か半眼になりながら言つた。

「『今、私にとつて一番大事なのは千恵を護る事。千恵との約束がある限り、私は彼女の傍に居ると決めている』」

それは それが、千恵が那由他と交わした契約だから。……分かつている、はずなのに。勝手にドキドキする心臓を思わず止めてしまいたくなる。

「ねえ、どこの少女漫画のヒーローなの、彼は。告つた女も凄い顔してたけど、私だつてしまらトトイレで鏡と睨めっこするハメになつたよ……」

意思とは無関係に火照る顔をクッショーンに埋める千恵に、

「……認めなさい、千恵。若宮君の事、好きなんでしょう？」

風花が突きつける。

好き。……那由他の事が、好き。

初めて会つた瞬間から蠶く心の奥の感情とは別に。

実際に彼と関わり合う中で育つたそれは、紛れもない千恵自身の想い。

でも。

彼が千恵を護るのは、契約だから。

彼は、モノノケで。

千恵は、人間で。

千恵は、彼の糧で。

彼の事が好き。……だけじきつと、この想いが叶つ事は無い。

だから。

「……好きじゃ、ないよ。彼の事、夏也より大事に思つてるのは

認めるけど。そういう好きじゃ、ない

午後五時半。……夕飯時までにはもうじき星が浮かび始めた空を

ケータイで時間を確認し、千恵はぼつぼつ星が浮かび始めた空を見上げた。

自覚してしまった想いと、分かりきった未来に痛む心。思わず泣きたくなつて、風花の家を飛び出してきた。

このまま家に帰ればきっと、那由他が待つてゐる。

「ちょっと、道場に寄つて行こうかな」

ちゃんと心頭滅却していかねば、きっと心が耐えられないから。そう思い、見慣れた道場の扉を開けた。

「こんばんわー。師範、いらっしゃいますか？」

ガタつ、と奥の部屋から音がして、ガラリと開いた扉から師範が顔を覗かせた。

「おや、千恵。風花と一緒にたんじやなかつたのか？」

何故師範がそれを知つてゐるのか。

「はい、ついさっきまで一緒にでしたよ。でも、帰る前にちょっと身体を動かして行こうかと思いまして」

千恵は首を傾げながらもそう答えた。

「……そうか、ちょうど良い。千恵、少し彼の相手をして貰えるか？」

「はい……？」

千恵はもう一度首を捻りながらも、道着に着替えて奥の部屋へ入る。

「え、那由他に夏也？……師範、相手つてもしかして」

「若宮君の実力を知りたい。夏也では不安だからな、私が相手をしてやるうと思つていた所なのだが、自分で相手をしながらでは、どうしても主觀が混じつてしまつ。ちょうど良い所に来てくれた」

……那由他への気持ちを冷ます為に来たはずなのに。

だが、師範には逆らえない。

千恵は畳敷きの部屋の真ん中で、那由他と向き合つた。

「千恵は空手に柔道、合氣道に剣道、弓道と一緒に心得がある。実力もお墨付きだ。若宮君、ひとまず型など気にせず自己流で構わん。一度千恵と組んでみる」

言われた那由他是少し困った顔になる。

それはそうだろう。

彼にとつて千恵は守るべき契約者で。

彼は、モノノケで。

千恵がどんなに強くても、どんなに頑張ろうとも勝てる相手じゃない。

そんな事は、分かっているけれど。

「 よろしくお願ひします」

軽く頭を下げた後で、那由他に足払いをかけ、そのまま彼の身体を投げ飛ばした。

不意を突かれ、割合簡単に投げ飛ばされた彼はしかし、床に転がりながら反射的に受け身を取つて衝撃を受け流し、即座に立ち上がつた。

そこへ、間髪入れずに突きや蹴りを繰り出すと、那由他是戸惑いながらもそれを全て完璧に受け止め、受け流す。

なかなか間合いが詰められず、懐に入れない。体勢を崩す為の攻撃は全て流される。

勝てる相手じやない、なんて事は、良く分かっているはずなのに。乱れた心が、ムカムカしてくる。

先程から殆ど動いていない那由他に対し、次から次へと攻撃を繰り出す千恵の息は上がり始めている。

不意に、外で雷鳴が響いた。……さつきまで、晴れていたはずなのに。夏でもないのに夕立だらうか？

その音に僅かに気を逸らした隙を逃さず、千恵は那由他の胸倉を

掴んで押し倒し、床に伏せる。

ざあざあと、音を立てて降りだす雨。

ぱたりと、那由他の頬に滴が、一つ、落ちて。

那由他是ここで向かい合ってから初めて真っ直ぐ千恵の目を見た。

戸惑いに揺れていた瞳が、その一点を見定め。

那由他の手が、千恵の道着の襟を握り、そして引いた。

力任せに体勢の上下を入れ替え、千恵の拘束から逃れた彼は再び立ち上がる。

転がされた千恵も、反射で立ち上がり、二人は先程と立ち位置を逆に変え、再び向き合つた。

那由他が、動く。

中段の回し蹴りを腕で防いで受け流した千恵は、その勢いを利用して那由他の懷に入り、那由他の襟を取ろうとするも、即座に体勢を整え直した那由他に逆に襟を取られ、そのまま背負い投げられた。パシン、と背が畳に叩きつけられる。もちろん、身体が即座に受け身を取っているからそう痛くはないが。

「 そこまで」

と、ここで師範が終了を告げた。

転がった千恵が、自分に差し出された那由他の手を取つた時には、いつの間にか心は凧いでいて。

「 ……とまあ、こういう訳だ」

師範は、そう言つて那由他の肩を叩いた。

「 もう、分かっただろう。自分の事も、今必要な事も、  
そして、師範は千恵を見た。

「 千恵、この若宮君とやら。今時の若者には珍しい良い男じゃな  
いか」

それは…… そうだね。

(だって、今時の若者じゃないし)

千恵は心の中だけで呟く。

「 久々に、仕込み甲斐のありそうな見込みのある奴だ。今度から

は一緒に来ると良い。一人で黙々打ち込むより、誰かと組む方が楽しいだろう、千恵」

「師範……」

「ほら、今日はもう帰れ。ああ、夏也。お前は残れ。たまには爺じい、孝行でもしてけ」

夏也の襟首を掴み、師範は裏口を開ける。そこには、二階にある自宅へ上がる階段があるのだ。

「貴い物の素麺が大量に余つててな。食べていけ」

「は？」この時期にソーメンで

夏也の抗議をまるつと無視して、師範は、

「良いから、来い」

と、ズルズル引きずつて行き、パタン、と扉は閉じられて。

「……取り敢えず、着替えて帰ろっか」

「ああ」

短いやり取りをかわし、千恵は更衣室で手早く着替えを済ませる。

「……済んだのか？」

更衣室を出ると、とっくに着替えを済ませた那由他がカバンを持つて立っていた。

「うん、帰ろう」

「ああ」

やつぱり短いやり取りの後、何を喋るでもなく、街を歩く。那由他は、じつと何かを考え込んでいる様だったから。でも、その静けさに気まずさはない。ただ、何かが少し、変わった気がした。

風花は、ケータイを開いた。千恵とお揃いにした、お気に入りのアイドルグループの最新曲の着メロ。

新着メールが、一件。

Time 11/3 18:39

From 京

Sub 明日、ヒマ?

今日、バンドメンバーから鱗町にある  
美味しいって噂のパスタ店の割引券を貰ったんだ(\*^-^\*)  
良ければ一緒に行かない?

あ、もちろん既には内緒で(^\_-)

「……千恵。夏也には悪いけど、私はホントに若宮君との仲、応  
援したいと思ってるんだよ。千恵にはいつも笑って欲しいし。  
私も、幸せになりたいから」

眩きながら、風花は返信メールの送信ボタンを押した。

了解)

店の前で待ち合わせしよう

時間はどうする?

すぐに返信が返ってきて来る。

11時半でどう?

いいよ、11時半ね( ̄ ̄ ) メモメモ  
明日、楽しみにしてるネ

風花はもう一度、返信メールの送信ボタンを押し、送信完了の画面が出るのを確認してからケータイを閉じた。

「私、昨日久々に見たんだよ、千恵がちゃんと笑ってるの。  
あれからそこそこ経つのに……。千恵の笑う顔が見たくて、夏也を

応援してきたけど。……夏也じや、ダメなんだね。……ねえ、私、千恵と一緒にダブルデートとかするの、結構楽しみにしてるんだから。絶対、若宮君をモノにしなきゃダメだからね、千恵……」

グワーン、ゴウン、グワーン、ゴオウン……

耳障りな鐘の音に、彼は暗い船倉の中で目を開けた。

積荷に混じつて密航を続けてきた彼は、荷物の影に横たえていた身体をむくじりと起にして立ち上がり、甲板へと続くはしごに手をかけた。

するすると上り、冬の太陽がつくる眩しい陽だまりの中へ頭を出した。

「ちひ、じこにも“先客”がいるのか。折角連中の居ない場所を求めてきたつてのに、着いて早々に頭の痛くなる嫌な音を聞かされるとはね」

船は、接岸するため岸へとゆっくりゆっくり近付いていく。港には、船へかけるタラップの準備をする船員が慌ただしく働く姿があるが、船と岸との間にはまだ距離がある。

見下ろせば、紺色の濃い青い水面がゆらゆら揺らめいている。強い、潮の香り。

吹き付ける潮風に舞いながらひるがく鳴き交わすカモメ。てくてくと、京は甲板を歩き、船の舳先に立つ。

「おい、君」

それを見咎めた船員が声を掛けようとするのを振り切り、京は船から飛び降りた。

「……もう、脂ぎつて不味いばかりの脳みそ筋肉族野郎の血なんざ沢山だ。久々に乙女の生き血にありつきたいね」

てくてくと、人気のある方へと歩いて行こうとして ふと、山の方へ目を向いた。

「何だ?」

ざわりと、肌が粟立つた。

「……魔物の、気配?」

京は、一やりと凶悪な笑みを浮かべた。

「丁度良い。脂っこい食事が続いた上、狭い船倉の中で体も鈍り放しだしな。食事の前に軽く暴れてくるか」町の方へ向いていた足を、山へと向け直し、京は再びてくてくと歩き出した。

「チ工様！ そつちの藪の方へ行つたぞ！」

初冬。落葉樹の葉はあらかた地面へ落ちて、裸の気が目立つようになつた山の中、迅の巨体が急な斜面をものともせず獲物を追つて駆ける。

「了解！」

人一人の体重くらいは軽く支えられる丈夫な木の枝の上、チ工はお手製の弓をキリキリと引き絞り、狙いを定め パツと矢尻を放し、番えた矢を放つ。

矢は一直線に獲物である鹿の腿へ命中し、鹿は枯れ葉の上、ずさり、と音を立てて足を滑らせ転倒する。

「お見事！」

すかさず迅がそれを前足で押さえつけ、首根っこに食いついて牙を剥き、とじめをさす。

「ええ、これだけ大きな鹿なら当分お肉には困らないで済みます。証分けの儀式の日も近いですし……しつかり食べて、栄養を摂つておかなければ！」

するすると木から降り、尾を振る迅の隣でチ工は張り切つて獲物に縄をかける。

「この時期の鹿は脂も乗つてて旨いからなあ 気の早い事に、迅はもう舌舐めずりをしている。

「だからつづつまみ喰いしたらダメですからね、 つ、て、痛

つ、」

ほんの少しそそ見をして疎かになつた手元が狂い、手にしていた

小刀で左手の甲を刺してしまつたらし!。

幸い、傷はそう深くない。小刀を抜くと、刃に付着した血がぱたぱたと地面に落ち、枯葉を赤く染めた。

「あちやー、やつちやた……」

とはいへ、この程度の怪我などチエにとつては田常茶飯事。

「あーあー、気をつけて下さじよ?」

迅も半眼で呆れる。

「まあ、この位の傷なら、那由他様にいただいた“印”的お陰ですぐ治るから……、今はまずこの獲物を小屋へ持つて帰ることに専念しましょう!」

ここへ来たばかりの時分に比べれば、背も伸び、身体の線も女性らしい丸みを帯びたものになりつつあれど、鹿の体躯はチエの軽く倍以上ある。

四足にかけた縄を束ねて肩に担ぎ、引っ張る

「……いくらなんでもそれは無理だろ?」

呆れたようにため息をつく那由他の声が、不意に沢の下から聞こえてきた。

「那由他様!」

一跳びでチエの隣へ並び、チエから縄を取り上げると、重たい鹿の肢体を軽々と小脇へ抱える。

「また怪我をしただろ?、血の匂いを感じた」

見せてみろ、と、空いているほうの手でチエの手に触れ、口元へと運び、既に閉じかけている傷口を舌でなぞる。

「なつ、那由他様……!」

カツと、チエの顔が真っ赤に染まる。

那由他是それをさも楽しそうに眺め、

「嫌なら、怪我などするな。お転婆も程々にしておけと、いつも言つておるのにお前が聞かないから、お仕置きだ」

悪戯っぽく言つ。

ここへ来た頃には考えられなかつた程に、最近の那由他のチエに

対する態度は柔らかく碎けたものに変わった。

「うなればなる程、チエの心は秘めた想いが今にも決壊を起こしそうで、苦しくなる。

「あー、主い、チエ様あ。ひと前でそーいうのは程々にして貰えませんかねえ？」

「うげーっ、と空氣を読むことも遠慮も無しに、迅が今にも砂を吐きそうな顔で茶々を入れる。

「俺、腹減つてるんすよ。もう毎時でしょ？ サツさと戾つて、メシ喰わせて下さいよー」

「うん、確かにそれは同感だな。……私も腹が減った。急いで戾るとしよう！」

言つが早いが、チエの身体をやつぱり軽々と肩に担ぎ、山の斜面を人には不可能な速度で走り出す那由他の後ろに迅が付き従つて駆ける。

そして誰もいなくなつた山の中。

「……血の、匂いがする」

クンクンと辺りを嗅ぎ回りながら斜面を登つてくる人影が、一つ。彼は地面を染める赤を指で拭い、その指ごと口に含み、ピクリと身体を震わせた。全身の毛が総毛立つ。

そして、恍惚と歓喜の笑みを浮かべた。

「これは……凄い……。こんな、滴り落ちて時間の経つた血ですらこの味……！ ふふっ、ようやく見つけた……僕のイヴ……」

スッと目を眇め、京は辺りの気配を探つた。

「まだ固まつてなかつたつて事は、そう時間は経つてない……まだ近くにいるはずだよね」

だが、すぐに面白くなさそうな顔になる。

「おかしいね、匂いはすれども近くに人の気配がない……？ それに……何だ、この魔物の気配の異常な多さは。この山、魔物の巣窟じゃないか」

麓の町を見下ろしながら、京は怪訝な顔をする。

「あの教会の主はこれに気付いてないのか、まさか……」「これだけ魔物が集まれば、町では相応の被害が当然出でているはずだろうに。」

しかし、気配が探れないのでは仕方がない。京は血に残る匂いを頼りに、辺りを探るため、しらみ潰しに周囲を歩き回つてみる事にする。

普段、面倒臭い事や肉体労働的な行動を嫌う彼にとつては破格の決断だ。

「……まあ、事は百年かけてようやく見つけた大事な大事なイヴの為だからね。多少の労力の浪費も事前投資の内……」

独り言を呟きながら、自然と口元が緩み、にやけてくるのを抑えきれない。

「ああ、ホント。長い船旅の間の退屈と粗食に耐えてまでこの国に来た甲斐があった」

堪えきれず、肩が震える。

「あ、あはは、ははははは」

高笑いが虚しく空に消えていくのも構わず、京は狂ったように笑い続ける。

「はは、ははははは」

グワーン、ゴウン、グワーン、ゴオウン……

最後の返信メールを見ながら、その耳障りな鐘の音を搔き消すよううに、京は声を上げて笑つた。

「全く、多多少どころかこの僕がこれだけ多大な労力を費やす事になるなんてね……もう、後にも先にもきっとコレっきりだろうな」蓋の転がつた真つ黒い棺を足で蹴り飛ばす。

「寝てるんだからつて、油断してたよ。折角無抵抗に寝てくれてたんだ、早々にとどめをさしておぐべきだったんだよね……全く、僕とした事が。とんだ失策だ」

はあ、と息を吐きだし。整然と並ぶ埃だらけの椅子の一つに腰掛け足を投げ出し、背もたれに両腕を広げて預け、高い天井を見上げる。

ずっと、頭の方から重たい音が降つてくる。

グワーン、コウン、グワーン、コオウン……

「あの日も、こうして鐘の音が響いてたな」

足元に、巨大な魔方陣が展開されて。

途方もない力の奔流に、京の血が己の意思に反して竦み上がった。本能、という名のそれが、相手との力の差を勝手にはかり、全身の筋肉を萎縮させる。

動けない。ギリッと牙を噛み締め、低く唸つた。

あちらも、もう息は絶えだえ……今にも膝をつきそうなのを氣力のみで踏ん張り、術の詠唱を続けているような状態だ。

あと一步、あと何か一つあれば、この状況をひっくり返せる。

その、確信があった。

そしてあと一つの“何か”的アテもある。

がくりと、その場に崩折れ、地に膝をつきながら、それ待つた。  
(……クソッ、何処で何してやがる、あのエクソシストめ!—)

遠く、山の麓で教会の鐘の音が響く。夜中の1-2時。

麓の村はもう寝静まっている頃だろう。

分かつっていた。独力のみで、はるか悠久の時を過ごしてきたこの山の主に適うはずなどない事は。

それでも、どうしても手に入れたかった。その、稀なる血を。それを手に入れる為には、那由他の守護を打ち破り、そこから奪い去らねばならなかつたから。

真っ向勝負で適わない分、知恵をこらし、謀略を巡らせ。そして今、こうしてギリギリのここまで追い詰めたといつに。あと、一步、なのに……肝心のシメが締まらない。目が、霞んできてる……。

そうして、あの時京は那由他の術によつて封じられたのだ。

当の術者本人 那由他也その後すぐに神父によつて封じられたため、術は完成せず、一時的なものとなり、数十年の後に京は封じから解かれ、自由の身になつた。

しかし、その時にはもう彼女はこの世になく。

「ようやく、見つけたんだ。彼女の魂を持った娘……彼女の生まれ変わりを」

あれから、さらに数十年の時をかけて。

なのに、彼女はまたしても那由他の庇護の内にある。

またしても、彼女の魅惑的な血は那由他のもの。

愉快すぎて、笑いたくなる。

「でも……」

ククッ、と小さく笑い、京は椅子に身を投げ出したまま口を閉じる。

ひゅう、と鐘楼に風が吹き込み、鐘を揺らす。

ガラアン、と一つ、鐘が鳴り。

「イヴ……君と永久の夜を生きるのは 那由他、お前じやない。

この僕だ」

それだけ呟き、静かに眠りへと落ちていつた。

ふつふつと音を立てて電気ポットから勢い良く蒸気が吹き上がる。茶葉を入れた急須に熱湯を注ぎ、とぼとぼと大きなマグカップへ交互に淹れる。

夕食の片付けも済み、静まり返った食卓に那由他と一人、向かい合わせに座りながら熱い緑茶を一口啜り。

テレビのスイッチは切られたまま。

他に誰もいないダイニングキッチンに響くのは、壁にかかった時計の秒針の音と、こうしてお茶を啜る音、カップをテーブルに置いたときのコトリとたつ小さな音、それに互いの息遣いの位のものだ。一つのカップが空になるまでの間、その静けさは続いた。

それは決して居心地の悪いものではなかつたが、飲み物が空になつてしまえば流石に少し手持ち無沙汰な感が否めなくなる。千恵はもう一度、急須にお湯を注ぎ、マグカップに少し色の薄くなつたお茶を注ぎ、また一口、それを啜る。

と。那由他の隣の席の空気が一瞬揺らいだかと思えば不意にバサリと翼をたたむ音がして。

「那由他様、千恵様。……少し、お時間よろしいでしょうか?」

「……? ああ、構わないが……何だ?」

「実は……今朝、お伝えしそびれたことが一つ、ございまして」

天羽は、今朝と同じように那由他の隣の席に現れ、恭しく頭を下げると、妙に重々しく告げた。

「那由他様の失われた記憶を戻す、もつ一つの方法について」

「それは……迅が持つはずだという勾玉無しにかなう方法、とう事か?」

「はい。今すぐにでも、全ての記憶と全てのお力を完全に取り戻せるはずにござります」

しかし、それを聞いた那由他是僅かながらに眉をひそめた。

「……天羽よ。なぜ、それを今朝言わなかつた？必要条件が揃わず、迅の行方も知れぬ今、勾玉を使っての方法がかなわぬことは当然分かつていたはずだ。なのに何故、まず先にそれを言わなかつた？」

「千恵様と血の契約、もしくは魂の契約を結ぶ事。……それが、その方法ゆえ」

「血の契約に……魂の契約……？」

「千恵様、我らモノノケと結ぶ契約には三つの段階があるのでござります。一つは、言靈の契約。今、千恵様が那由他様と結んでおられる契約がそれです」

「……ああ。そして私はそれ以上の契約を千恵にも、他の誰にも望むつもりはない」

一瞬、黙り込んで難しい顔で考え込む素振りを見せたが、しかし、那由他はきつぱりと断言した。

「迅を、待つ」

「ねえ、那由他。血の契約って、何？ちゃんと説明して。それをすれば、記憶がもどるんでしょう？」

その目をじっと見つめ、重ねて問うと、那由他是渋い顔をするも、「どうしても、だ。私は千恵、お前にそれを望むつもりはないんだ」もう一度、強く言い切つた。

「どうして？」

それに対しても千恵が食い下がると、那由他の渋面が濃くなつた。

「お前は、知らなくていい……いや、知らないほうがいい。千恵、お前もつい先頃見たばかりだらう、モノノケと安易な契約を結んだ

“結果”を

窓の外、小さく鐘の音が聞こえてきた。

もう、12時。

「私は……私もモノノケだからな」

茶を啜り、この話はもう終わりだと言わんばかりの空氣を漂わせる。

明日は土曜日で学校は休み とはいって、そろそろ寝支度をするべき時刻ではある。

「……ねえ、那由他。明日、ちょっと行きたい所があるんだけど、付き合ってくれない?」

「……? ああ、それは構わないが」

そして翌日。千恵に連れて行かれたそこは、無機質な銀色の扉が並ぶ、ロッカールームの様な場所だった。

「遺体安置室」。扉のプレートにはそう書かれている。縦に3つ、横に6つ並ぶ扉の中のひとつが開けられ、引き出し式に寝台が出てくる。

その台に横たえられているのは、まだ幼い少年 あの仏壇に置かれた写真と同じ顔をした子供の、遺体……。

「本当はね、こんな風に一般的の 遺族なんかが簡単に入れさせてもらひえる場所じゃないんだけど……そこは、コネの賜物つてヤツ?」

引き出しへはそれぞれ厳重に施錠がされており、その鍵を開け遺体を引き出したのは この若宮警察署の刑事部長様だ。

「すみません、我が儘言つて。でも、そろそろちゃんと向き合わないといけない時期なんだつて思うから。認めて、納得しないと……」

「前に、進めない気がして」

夏也の父でもある彼は、遺体を前に手を合わせた後で、気遣わしげな視線を千恵へと向けた。

「いや、……あの件は未だに有益な情報も無く捜査は行き詰まつたままだ。柚鷹や梨花さんのやり切れない気持ちも分かる。今の私にしてやれるのは、この程度だが……」

ちらりと、那由他の方へと視線を向け、

「君が、若宮那由他君、か。先日は夜勤で挨拶をし損ねたね。君の事は聞いているよ、息子はもちろん妻や父、……それに駅前交

番の呑んだくれからも、ね」

少し疲れた様子で言った。

そういうえば、彼からほんの僅か……人の嗅覚ではまず知覚不能だろうし、那由他の嗅覚をもつてしても言わなければ気付けなかつたかもしない程に僅かながら、酒精の匂いがする。

「あ……、おじさん、もしかして」

酒の匂いはともかく、千恵も彼の口調から察したらしい。

「……もう、一度とあの界隈には近寄りませんよ」

一つ、大きくため息をついてから、

「では、私は少し外しますから。帰るときには、一声かけてください」

彼は部屋に千恵と那由他を残し、静かに出て行った。

庫内から流れてくる冷気に冷やされた空気が白く煙る中に横たえられた少年の、顔形こそ、あの写真と同じである……が、白く凍つたその表情は、あの満面の笑みを浮かべ、はつらつとしていた少年とは似ても似つかない。

「一昨日の、今頃……だつたかな。小学生だつた秋刀が、学校から帰る途中で、行方不明になつたの。途中までは、通学路を友達と一緒に帰つて来て……その後、友だちと別れて一人になつた後で……」

冷たいばかりの頬に触れ、千恵は痛みをこらえるように目を伏せる。

「……まだ、犯人は捕まつてない。だから、何があつたのか、本当のところは分からぬ」

ちらりと、千恵は時計に目をやつた。 12時。教会の鐘が鳴る。千恵はその音にびくりと体を強ばらせた。

「サブちゃんやお母さん、私はもちろん夏也や風花たちにも頼んで探してもらつて……。秋刀を最初に見つけたのは、私だつたの。秋刀が行方不明になつた次の日の昼……そう、ちょうど今みたいにあの教会の鐘が鳴つてて」

知恵は、鐘の音がする方の壁を振り返る。

「あの時の、あの港……那由他と最初に会ったあの場所で……。あの時はまだ、辛うじて息はあつたんだ。……でも」

「一つ、大きく息を吸つて、吐いて。千恵は言葉を継いだ。

「脳に、損傷があるつて……運ばれた先の病院で言われて……。そんなね、怪我とかはなかつたのに……極度の貧血状態ですつて……それで、脳に行くはずの血も足りなくて、脳の機能を維持するのに必要な酸素やら栄養やらも足らなくて……つて」

もう一度、大きく吸つて、吐いて。そろそろとこちらへ向き直る。

「この街の病院じゃあどうにもならなくて。お父さんが赴任中だつた街にあつた大病院に紹介状書いてもらつて、去年の梅雨頃までずっと入院してたの。……でも、その間もずっと意識を失つたまま……一度も目を覚まさないまま秋刀は……」

そこまで一息に喋り、息を詰ませた。

「あの日 秋刀が行方不明になつた日は……あの頃は私もまだ中学生で、学校が早く終わる日だつたから、例の道場で、始めたばかりの剣のお稽古を見てあげる約束をしてたの。もしもあの日、私がもつと早く帰つてれば……秋刀が一人になる前に、一緒に帰つてあげられてたら……こんなことにはならなかつたかも、しなくて……」

堪えきれなかつた涙の零が一滴、寝台を濡らした。

「もつと、早く見つけてあげられてたら……見つけた時にすぐ、異変に気づいてあげられてたら……つて、あの日を後悔し始めたらキリがなくなる。あの時ああしてたら、こうしてたら……。そんな後悔は他にも沢山あるよ。でも、あの日の後悔は……もつと一度と取り戻せないものだから……」

「じじじ」と、乱暴に田元を袖で拭い、千恵は鼻を鳴らした。

「こんな辛い気持ち、もう一度と味わいたくなんかない。だからね、私はあれから一つ決めてることがあるの。今、出来る事をやらないままに何か取り返しのつかない失敗をして後悔するような事だ

けは、絶対にしないって」

弟の前髪を丁寧に梳いて整え、千恵は静かに遺体を庫内へ戻す。

「それと、もう一つ。前にも言つたけど。あれからずっと氣落ちしつぱなしのお母さんをこれ以上悲しませるようなことはしないって、決めてるの」

千恵は那由他を見上げ、真っ直ぐその瞳を捉えて言つた。

「だから、安易な気持ちで言つてるんじゃない。那由他、教えて。血の契約って、魂の契約って、何？」

## 第拾伍話 a sweet trap

休日は、いつも9時過ぎまで寝ているのが当たり前 そんな彼女が、今日は張り切つて6時に起きて朝シャンから洋服選び、髪のセットに化粧と、身支度にたっぷり4時間かけ、完成させた最高のファッショニ・スタイル。

パンツスタイルに七分袖のシャツにジャケットでスタイルシユに決め、大ぶりの首飾りで胸元を飾り、軽くウエーブをかけた髪の毛先をくるくると遊ばせて。足元は、今年になって初めて履くブーツで決めた。

ケータイで、何度も時間を確認しつつ、ナビに従い街を歩く。遅刻なんて以ての外だけど、だからってあんまり早く行きすぎて店の前に突っ立つたまま待ちぼうけ、なんてのもカッコ悪い。

（こういうのは、五分前くらいに着くのがセオリーなんだよね）ナビの指示に従い、横断歩道の前で歩行者用信号が青になるのを待つ。

少し右斜め上を見ると、ウェブサイトで確認したのと同じ店名のロゴが掲げられた看板が見える。目的地は、もうすぐそこだ。

風花はナビを終了し、もう一度時間を確認してからケータイを力バンにしまう。

（んー、11時23分、か。まあまあってト」「……かな？）

車道の信号が黄色に変わり、そして赤になる。ここは片側2車線、全部で4車線ある大通りで、信号の下部にある右折用信号が点灯する。

もう一度、黄から赤へ変わり、ようやく歩行者用信号が青になる。待ちわびた人々が一斉に車道へと溢れしていく中で人ごみを縫うようにして横断歩道を渡る最中、風花は向こうの歩道を今までに店の前へ歩いていく目立つ白い人影を見つけた。

「京！」

風花は大きく手を振り、彼に駆け寄った。

「やあ柊木さん、おはよう」

振り返り、相変わらず思わず痺れてしまいそうな笑顔を振り撒きながら彼は足を止めた。

「今来たとこ……だよね。良かった、危うく初デー<sup>ト</sup>の待ち合わせで女の子待たせるところだった」

制服でも、ステージ衣装でもない完全な私服姿を見るのはこれが初めてだ。

白いズボン、白いシャツ、白い上着。

ステージに立つ時、彼はいつも赤や黒、白い色の服を好んで着ているが、毎日中にこれだけ真っ白い格好に身を包んでいると、やはり目を惹かれる。

特に彼の場合、肌も白く、髪や瞳の色も白銀色だから、本当に全身白い。

元々破格に見目の良い彼が、そんな格好で極上の笑みを浮かべているのだ。

通り過ぎる女性 いや男性すらも皆一様に彼を振り返っては魂を抜かれたような表情を浮かべて行く。

ちなみに、その笑顔をモロに向けられた風花はといえば、つい開けたまま閉じるのを忘れた口からうつかり魂を飛ばしそうになっていた。

「昨日の今日でいきなり誘つたのに、来ててくれて嬉しいよ。ありがとう。さあ、外は寒いし、中に入ろう」「

さりげなく風花の手を取り、ドアベルの音を響かせながら店のドアを開けた京は、

「すみません、11時半に予約していた百世なんんですけど」と、応対に出てきた店員に告げる。

「あ、はい！ お待ちしておりました。ただいまご案内いたします」

爽やかなお兄さん、といった風の男性店員は、店内奥の窓際四人

がけのソファー一席を指し、

「お席はこちらでよろしかつたでしょうか?」

京は、ちらりと窓の外 空を気にする。

「はい。……すいません、ブラインドをもう少し下げて貰えませんか?」

席はちょうど日が直に射し込み、日溜まりが出来ていた。ちょっと見ただけでは暖かそうだが、実際に当たると陽射しが少し痛いくらいに暑い。

「かしこまりました。では、こちらメニューになります。」

言いながら頭を下げ、店員がテーブルから離れる。カウンターの奥から金属製の細い棒を持ち出し、ブラインドの下に下がる小さな取っ手にそれを引っ掛け引っ張る。

するとするとブラインドが落ち、直射日光が遮られると暑さも和らいだ。

店員はもう一度奥へ引っ込み、今度はプレートに水の入ったコップを乗せてやって来た。

「こちら、お冷とおしぼりで」わいこます」

薄いビニールの袋に入れられたタオル地のおしぼりと、レモンの浮かんだ水とを置き、

「では、ご注文がお決まりになりましたらお呼びください」

再びカウンターへと戻っていく。

テーブルの上、メニューをこちらに向けて広げてくれながら、京も向こう側から美味しそうな料理の写真の並ぶ冊子に目を落とす。

「定番なら、ボロネーゼ、アラビアータ、ペペロンチーノと……カルボナーラ?」

「京は、何が好きなの?」

「僕は……トマトソース系のが好きかな。柊さんは?」

「うーん、割と何でも好きなんだよね。パスタ自体、好物だから。あ、でも唐辛子のきついのはちょっと苦手かも」

「柊木さん、辛いのダメな人?」

「うーん、辛いの全般ダメって訳じゃないんだ。お刺身には普通にワサビ使うし、おでんにはカラシつけるし、生姜なんかも別に平気なんだけど。唐辛子系の辛さが苦手なんだよね。程よくピリ辛程度で済めばいいんだけど、キムチとか、“本場韓国製”とか書いてあるとつい躊躇しちゃう」

「これから時期つて、どこの店も辛いメニュー置きたがるよね。それこそ唐辛子たっぷり系の真っ赤なの」

クスリと、わざとらしく意地の悪い笑みを浮かべて見せながら、メニューの方、お勧めメニューとくくられた枠内に大きく載つた写真を指さした。

「ハバネロアラビアータ？」

まさに真っ赤なソースが絡むパスタに、これでもかと唐辛子を刻んだらしいものが入っている。

「……うわ、見てるだけで口の中が辛くなってきたわ」

「ははは、だね。僕はこっちの秋茄子のトマトクリームこじょっかな」

「ああ、今時期のナスって美味しいもんね」

相槌を打ちながら、風花はメニューに載る写真を真剣に見下ろす。（トマトソースとかミートソースとかだとつかりソースで口周り汚しちゃつたりしたら格好つかないよね……。見ついたまんまのボンゴレとか、綺麗に食べれる自信ないし。やっぱここは無難に……）

「じゃあ私はキノコと鮭のクリームソースにする」

「デザートとか、どうする？　ここ、スイーツも評判らしいから開いたメニューを折りたたみ、背表紙部分を表に向けると、確かに見るからに美味しいそうなケーキやらパフェやらの写真が並んでいる。

「うーん、どうしよう……。千恵ならきっと迷わずこの大きなイチゴのパフェを頼むんだろうけど……」

「僕、これ気になつてるんだ、このデザートピザってやつ。ピザ

の上にアイスが乗つててどうなんだうね?」

「写真では大きさが今ひとつ分かりづらいが、ピザ生地の上にアイスとバナナ、生クリームが乗つていて、上からナッシュとチョコレートソースがかかっている。」

「一人で食べるには多分多過ぎる気がするんだよね。良ければ一緒に食べない?」

テーブルに肘をつき、頬杖をついた京が上目遣いにこちらを見上げてにこりと笑う。

背丈は、風花と比べれば頭半分くらい高いが、同じ年の男の子達に比べるとやや低め。顔も童顔氣味でかつこっこ、より可愛いくいう方が正しい。

まあ、この年頃の男子が女の子から可愛いと褒められても嬉しいはないだろうから言わないが、その破壊力ははかり知れない。果たして、この笑顔を前にこのを突きつけられる女の子など存在するのだろうか?

風花はといえば……もちろん、一もにもなく即座に「くくくと無言のまま何度も頷いた。

「ん。じゃあ決まり。 すいません、」

カウンターの前に立つ店員に京が声をかける。

「きのこと鮭のクリームソーススパゲッティと秋茄子のトマトクリームスパゲッティ、食後にこのデザートピザのチョコバナナピザを」

「 お飲み物は?」

店員の問いかに、風花は「デザート欄の下に書かれた文字の一覧に目を滑らせる。

ありきたりなソフトドリンクの記載はなく、コーヒーと、よく分からぬ名前の飲み物が並ぶ。

「紅茶でいい?」

京に尋ねられ、風花は頷くが、見る限り「紅茶」とか「アイスティー」等の文字はメニュー表には見当たらない。

「じゃあ、食後にアッサムティーをホットでオーダーを済ませ、メニューを店員に返す。

「アッサムティー……」

店員が去つていいく背を見送りながら風花が小さく呟く。

「あれ、もしかしてアッサムは苦手だつた？」

「え、ううん。えっと……アッサムティーって？」

「うん？ 紅茶の名前……正確に言えば茶葉の名前だけど……」

言いながら、風花がよく分かっていないのを察したらしい。

「紅茶つてさ、一口に言つけど実は世の中には色んな種類の葉っぱがあつてね。リーフが違つと、味も香りも全然ちがうんだよ」

と、説明を始めた。

「アールグレイとか、セイロンとか、ダージリンとか、聞いたことない？ 全部、紅茶の葉っぱの名前なんだ」

「へえ、京つてそういうの詳しいんだね」

風花が感心して呟つ。

「 そうだね。人間が作り出した飲み物の中ではワインの次に魅惑的な飲み物だと、僕は思つてるよ。ワインと違つて淹れ方一つで変幻自在つてのが紅茶の面白さだよね」

「へえ、つてか……その言い方だとなんかワイン飲み慣れてます一つて聞こえるよ？」

京は、人差し指を立てて唇に当て、ニヤリと笑つた。

「うん、飲み慣れてるからね」

「わあ、不良だ……。つて、私もお酒を飲んだことの一度や二度はあるけどさ、ワインで……スーパーで売つてるような安いやつでも結構するよね？」

「まあね。でも僕は酒が呑みたくてワインを嗜んでるわけじゃないから」

「え、じゃあどうして

「秘密。今はまだ言えないな」

水の入つたコップに口をつけ、喉を潤しながら京は意味深に笑う。

「ああ、それより。」『飯食べた後だけじゃ、……柊木さん、こういつの観る？』

上着のポケットを探り、丁寧に一つ折りこまれた紙を出し、テーブルの上に置いた。

「映画のチケット？ あ、これ今話題のドラマを映画化したやつだよね。わー、これ観に行きたいって思ってたんだ」

「なら、この後行こうよ。1時半開演で、開場はその10分前だから……時間的にはちょうどいいと思うんだ」

店員が、注文した料理を運んできたのに気づき、京は再びチケットをポケットへ入れ、反対側のポケットからケータイを取り出す。テーブルに置かれた料理の写メを取り、手早く打ち込んだメールに添付して送信する。

「あ、もしかしてブログの更新？」

「そう。ああ、見てくれてるんだ？」

「ふふ、もう常連だよー。ライブハウスの方もね。ハロウインパーティーも楽しみにしてたんだけど……、夏也に花持たせてあげようと思って行かなかつたのに。あのカイシヨーなしの本念仁てば見事に大口ケしてくれちゃつて」

「ああ、橘君の方は愛羽さんに気があるんだね」

「そう。もうずいぶん前から、ね。でもあいつ馬鹿だから」

風花は頭痛をこらえるようにこめかみに手を当てる。

「いつもの外れなことばっかりやつて。千恵は全く気づいてないし、当然その気もあるでないし」

小さくため息をつく。

「夏也の方はもう、どうでもいいんだけどね。……でも、千恵の辛そうな顔はもう、見たくないの」

ぐるぐると、スペゲッティーをフォークに巻き取りながら目を伏せる。

「あの日……私が……してなかつたら、もしかして……」

『ぐるぐる小さく呟いて、風花はふるふると首を左右に振り、気を

取り直して目の前の京に視線を戻す。

京は綺麗に巻いたスペゲツティを口へ運ぶ。例えば夏也のような粗野さは微塵も感じられない、綺麗な所作だ。

うつかり気を抜いたら、彼に見とれたまま自分の分を食べ進める」とすら忘れてしまいそう。

「……食べる？」

それを分かつているのかいないのか、京は可愛く微笑み、半月切りのナスを刺したフォークを差し出してきた。

（えつ、ええつ！ そ、それ、か……間接キスつ！？）

さすがに軽く混乱をきたす心の中で叫ぶ。

だが。「はい、あーん」と二二二二しながら言わわれては、逆らえない。

ドキドキしながらナスを頬張り、味も良く分からないままでに囁みしめ、飲み込んだ。

京はといえばそれをにやにや笑つて見ている。

「美味しい？」

……分かつてゐる。絶対分かつてやつてゐる。風花は確信した。

「……ずるいー！」

京はクスクスと肩を震わせて笑つ。

「「「めん、つい楽しくて。お詫びに」」」は僕がおこるから」まだ小刻みに震える肩を竦めてみせ、片目を閉じる。わざとらしい仕草だが、京がやるとそれがまた妙に様になるのだ。

……悔しいけど。

「しょーがないなあ

という氣にさせられてしまつ。

昨日、突然屋上に呼び出されて「付き合つて欲しい」と言われた時には何の冗談かと思つたし、今でも正直、そのうちそこら辺からドッキリの看板が現れたりするんじゃないかとドキドキしている。

あの京とこいつじでこ飯を食べて映画に行けるなんて。京が

……彼氏、だなんて。

幸せ過ぎて心が、痛い。

（今頃……千恵と若宮くんは……何、しているのかな……）

ふと、ブラインド越しに窓の向こうの景色に目をやる。小さく、  
小さく。遠くから、教会の鐘の音が聞こえた気が、した。

「那由他様、お待たせいたしました。念願の牡丹鍋でござります！」

この山で那由他に次ぐ力を持つ狼の九十九神、迅を従えたチエは、天気の良い日であれば弓矢を手に山を駆け回り、獲ってきた新鮮な食材で毎日の食事を作ってくれる。

天気のすぐれない日は繕い物などしながら、他愛もない話を那由他と交わし。

暮らしへの不満など一つもない、とばかりにとにかく毎日生き生き過ごす彼女が、くつくつと煮える鍋を囲炉裏に据え、得意満面の笑みを浮かべて那由他に取り箸を差し出してきたのは、彼女が初めてここへ来てから、ちょうど10日目の事だった。

これまで、10日に一度のその日以外はその日の気分次第で山の中のあちこちで好きに過ごすのが当たり前だったというのが嘘のようだ、この10日間はその殆どをこの住居で過ごした。

これまで長い事一組しかなかった布団は二組に増え、朝・昼・晩とこつして一人で食事を摂るのも既に当たり前の習慣になりつつあつたが、今日はもう一名食卓を囲むものが居た。あの日、一体何がどうしてそうなつたのか……決して語ろうとはしないが、今は湯気を立てる鍋の前でパタパタ尻尾を振りながらきちんと「お座り」している。

「あの猪を仕留められたのは、迅のお陰ですから」と、ご相伴に預かる事を許された迅は、

「人間の喰うメシなんざ初めて喰いましたが、……結構旨いもんですね」

と、どうやら氣に入つたらしく喜んで食べていた。

食事の後片付けをする彼女の背を見ながら茶を啜る那由他に、迅が言う。

「……主」

「ああ、分かつてゐる。 チ工」

片づけものが済んだ頃合いを見計らい、那由他は彼女の名を呼んだ。

「チ工、お前がここへ来て、今日が10日だ」

「はい、『お食事』の日でございますよね」

呼ばれた彼女は、やつぱり嬉しそうに寄つて来て、ここで答えた。

「今、お召し上がりになられますか？」

すぐ傍に立ち、嫌がる様子もなく那由他に向いて立てる。

「いや。その前に少し出かける用事がある」

「……主、折角だからチ工様と一緒に連れになつたらいどうですか？」

のそつと立ち上がつた迅が、下から口を挟んだ。

「今日は月に一度の大仕事の日。地靈の主としてのお役目を済ませた後、すぐ傍にチ工様が居れば色々楽でしょう？」

迅の提案に、那由他是渋い顔をし、対してチ工は首を傾げた。

「那由他様のお役に立てるのでしたら、私は喜んでお供いたしますよ？」

それでも、当たり前に言つチ工を前に、少し逡巡し。

「まあ、確かに迅の言つとおりではあるが。……さて、その後でもお前は果たしてそうと言つてこられるかな」

寂しげに言つた。

満月の明るい晩。だが、木々の生い茂る山道は暗い。

那由他は、チ工に暖かい恰好に着替える様命じ、着替えを済ませて外へ出てきたチ工を横抱きに抱え、山の頂にそびえる巨木まで軽々と運び、その一枝まで登るのでさえも軽く一飛びで済ませる。

チ工をその枝木に腰かけさせ、自身はその場に堂々と立ち。

瞬間、山がざわざわと妙に賑やかに騒ぎ、ざわめく氣配が立ち上る。

下から、迅の遠吠えが聞こえる。

不意に、落ち着かなかつた周囲の空氣がシン、と張りつめた。周囲の空氣がビリビリと緊張していくのが、肌に直に伝わる。ふと、見上げると常は美しい黒色の那由他の瞳が爛々と燃え光る赤色へと変わつていった。

柔らかな月の光を浴び、そうして立つ那由他の姿はとても綺麗で。

「今宵は満月。月に一度の証分けの日。」 那由他の名に於いて命づる。風伯よ、我が眷族らに我が力を届けよ」

那由他を取り巻く空氣が、陽炎のように揺らめいたかと思えばたちまちに膨らみ旋風となり、那由他を中心に渦を巻く。

突風と言つべき強風に取り巻かれた那由他の髪や着物の裾が遊ばれ、あおられて翻る。

その中で、那由他是懐から小刀を取り出し、左の袖を捲つたかと思えば、いきなり無造作に刃を剥き出しの腕に突き立て、肘から手首までやけに景氣良く切り裂いた。

一筋の線から派手に血が噴き出し、旋風に巻かれて那由他を取り巻く空氣が一気に血色に染まる。旋風の全部が那由他の血に染まった。次の瞬間、ぶわっと風が爆ぜ、四方八方へと血の赤が霧散していく。血色の霧が、山全体へと降り注ぎ。

何時にも程、山がざわめいた。まるで、何十万羽ものムクドリが一斉にねぐらの取り合いを始めた様な賑わいだ。

「我が力の恩恵に預かりし我が眷族らよ。那由他の名に於いて命ずる」

対して、静かな声で那由他が命じる。

「人里へ降りる事、人間を害する事を禁ずる。禁を犯せば相応の制裁が下るものと知れ」

一つ、大きなため息をつきながら目を閉じる。

暗がりに月明かりの中では分かりにくいが、……少し、顔色が良くなき気がする。

もう一度開いた瞳は暗がりの中でも赤く灯り、それがこちらへ向

けられた。

枝を不用意に揺らしてチエを振り落とすよう、静かにこじらへ歩み寄り、チエの隣にいしょと腰を下ろし、もう一度、大きく息を吐く。

下からは、きゅうきゅうきゅうと興奮しているらしい迅が鼻を鳴らす音が聞こえる。

「あのつ……お怪我の手当……」

チエが困った様に真っ赤に染まつた那由他の腕に触れる。こんな場所へ、手当の道具など持参している訳がない。せめてもど、着物の袖を破こうと裾を咥えたチエを、那由他がそつと制した。

「私の身体は人のそれとは違つ。手当などせずとも、この程度の傷はすぐに治る。触れてみると良い……ほら、もう傷など無いだろう？」

腕を染める赤は、既に流れ出た分の血で、傷自体はとっくに消えて無い。

それでも、血で赤く染まつた腕が痛々しく見えるのか、疲れの滲む吐息を吐き出す那由他を心配げに見上げる。

「……怪我などどうという事もないが、血は私にとつて力そのものでな。あまり多くを失うのは良くないのだが、月に一度のこれは、地靈の主であり土地神である私の義務だからな。欠かす訳にはいかない」

那由他の言葉で、察したらしく。

「血が、『必要』の『必要』ですね？」

チエはその煌々と輝く赤い瞳を真っ直ぐ見上げ、躊躇い無く襟の合わせを緩め、首周りの肌を晒す。

「私は、那由他様の巫女でございます。那由他様のお役に立つのが、私のお役目。那由他様が必要だとおっしゃつて下さるなら、私はどこへだって共に参ります」

「……そうか。またしても私の取り越し苦労だったようだな」

当たり前に捧げられた言葉に、那由他は苦笑した。

「この儀式は身体に著しい負荷がかかるのでな。この状態での小屋まで行くのはなかなか骨の折れる仕事だったのだが……どうやら5年ばかりは楽ができるそうだ」

晒されたチエの首筋へ口づける。

「新たに選ばれた巫女が、お前で良かった……」

とろとろと、心地よい眠りを離れ、意識が浮上する。ぽかぽか暖かい陽だまりの中、草原の地面の上でついた寝をしてしまったようだ。

（また……何か夢を見てた……）

やはり、内容は覚えていない。でも流石に千恵も察し始めていた。

（那由他が失くした記憶……）

京に声をかけられたとき。那由他と会つたとき。千恵の心の奥底の感情を動かすそれに繋がる夢。

（　血の、契約……か……）

千恵はそつと胸に手を置き、今し方 眠り込む前に聞かされた話を思い返す。

夏也の父に挨拶をしてから警察署を後にした。

千恵は、コンビニ弁当のビニール袋を片手に歩いていた。

「ちやんと説明して欲しい」

そう求められた那由他は、それでもまだためらいを残すように、ぽつぽつと話し始める。

モノノケと契約を交わすには、3通りの方法がある」と。

一つは、言霊の契約。

一つは、血の契約。

一つは、魂の契約。

言靈の契約は、契約の約定を契約者の言靈によつて縛る。血の契約は、それを契約者の心血によつて縛る。

魂の契約は、それを契約者の魂によつて縛る。

「お前と今の契約を結ぶ際、私は言ったな。モノノケ相手の契約に、書状の類など必要はないと」

あの祠の前を通り過ぎ、ここまで道より更に荒れた道なき道を登りながら、那由他は言った。

「当然だ。我々モノノケにとって、たかが紙切れ一枚に何の価値がある？ 破くか燃やすかしてしまえば容易く破棄される契約に、何の意味がある？」

先を行く彼が、下草を踏みつけ、道を塞ぐ蔓や小枝などの障害物を除きながら進むその後ろに従い、千恵も同じ道を登る。

「モノノケにとって力は生命、命が力だ。使った力分が回収できないとなれば、モノノケにとって即死活問題だからな。使った力以上の一見返りが確信できねばモノノケは契約など結ばない」

山の中は、時折鳥のさえずりが聞こえるだけでとても静かだ。

「契約の際に捧げられるもの まず言靈はモノノケにとっては担保の様なものだ。例えば契約が不条理に破棄されることを防ぐための、な。だが、心血と魂は違つ。それそのものが、モノノケにとっての報酬となる」

彼の後ろを歩く千恵には、彼の顔は見えない。ただ、彼の背を見上げながら、彼が語る言葉に耳を傾ける。

「心血とは、心臓を流れゆく血 精神と肉体の全てが凝縮された、モノノケにとっては最高のご馳走。魂は 言うまでもなく最上の糧だ。人や動物のように確かな肉体や生を持たぬモノノケは、より確かな生命を欲する」

パキッと小さく乾いた音を立て、葉の落ちた細い枝の先をへし折り、折つたそれをしばし眺めた後で地面へ放り捨てる。

「無論、ただでそんな報酬など得られない。契約者の方にも、差し出したものの分だけの見返りは……まあ、そこは人それぞれの考

えようによりけりだが

ふと、歩く足元の地面の傾斜がなくなり、足首にかかる負担が軽くなつた。

「今、お前が私と結んでいるのは、言靈の契約。私がお前の血を得る代わりにお前を守る、そういう契約だ。つまりお前は血という対価で私を護衛として買い、私を通して私の力を間接的に使つていいわけだが」

すでに無いに等しかつたような道が、そこで完全に無くなり、僅かながら、木々のひらけた空間に草原が広がり、暖かそうな日溜まりができていて。

「契約者が心血を差し出し、モノノケがそれを取り込み自らのものとした場合、他のモノノケらからはその契約者はそのモノノケと同一の存在と見なされ、そのモノノケと同じ力を自分で扱えるようになる」

そこで那由他は振り返り、こちらへ向き直つた。

「そして契約者が魂を差し出し、それがモノノケのものとなつた場合。契約者はその瞬間、人間という生き物ではなくなり、我ら同様、モノノケとしての生を歩むことになる。老いや寿命は無くなるが……もはや、次の生で人として生まれ変わることはかなわなくなる。『永久に、な』

じつと見下ろしてくる那由他を見上げ、千恵は頷いた。

「それは……。うん、私は……私も、魂の契約はしたくない……できない。それは、分かった。人じゃなくなつたら……きっともう普通の暮らしへできないもんね」

そんなことになれば、当然両親は悲しむだろう。それでは本末転倒だ。

「でも、あれば血の契約のほうでもいいんでしょ？ 魂の契約である必要はないんだよね？」

血の契約に必要なのは心血　　心臓を流れる血。

「ああ、そうだな。確かに血の契約を結べばお前と私の場合、今、

印の力によつて得てゐる加護ではなく、辺りに住まう我が眷属らを従え、使役を可能とする力がお前のものになる」

……単純に聞けば、いいことづくめのよつて思えるのだが。

でも、ひとつ気になることがある。

「ねえ、ひとつ聞いてもいい? ……心臓を流れる血なんて、どうするの?」

聞かれた那由他はひどく嫌そうな顔をする。

「本当に、聞きたいのか?」

正直に言えば、あんまり知りたいと思える情報ではない。でも、知つておかなければならぬ情報もある。

「ある意味当然だが……胸に心の臓まで届く傷を穿ち、そこへ直接牙を立てて血を啜る」

言いながら渋面を深め、

「……ほらみろ、聞かない方が良かつたらう」

それを聞いて片眉をひそめた千恵に言つ。だが千恵は首を左右に振りながら、

「あのさ、でもそれって、そんなことしたら死んじゃわない?」と続けて尋ねた。

「言つただろう、血の契約を結べば私と同じ力が得られる。まあ、肉体の素地が人間である事には変わりないからな、瞬時にとは言わないが……一日大人しく寝ていれば治るだらうな」

那由他はため息をつく。

「だが、それに伴う苦痛は当たり前に甘受する事になる」

陽の当たる草原に腰を下ろしてあぐらをかけて寛ぎつつ、那由他是手を地面につきながら上半身<sup>じゆ</sup>と空を仰いで上向いた。

「私は封印される以前、巫女<sup>みこ</sup>とう名の生贊の血を糧に、常に恐れられながら存在してきた」

那由他是、苦い笑いを浮かべる。

「それこそ氣の遠くなる程の時をここ<sup>よ</sup>で土地神と呼ばれて過<sup>く</sup>じてきたが、こうしてまともに人と契約を交わしたのは……この土

地に棲まうよくなつてからおそらく初めてのことだ」

千恵はその隣に腰を下ろして草の上に直に座り、買つてきた弁当を袋から出す。

「私という、血を吸う化け物を人の住まう場所から遠ざけるため、人は私に供物を捧げてきた」

だが、それに関しての契約などは一切なかつたのだ。

「しかし、その供物を受け取る限りは、最低限の安寧を返すべきだろうと……そう思い、私は土地のモノノケに加護を与えて従え、決して人里に降りぬよう制してきたが……」

渡された弁当を受け取りながら、那由他は周囲の景色をぐるりと見渡す。

「人の手による手入れを受け育つた木々は、世話をする者の手が離れば独力では生きられず、枯れゆくだけだといつ。……どうやらモノノケも同じらしい。私が封じられ、加護を受けられなくなつたものたちの大半は力を失くし、滅びの道を歩んだようだ」

そう言う彼の顔は寂しそうで。

「今の私には、地靈の主の名も土地神の名も相應しくない。ただ、生き血を糧に存在しているだけのモノノケだ。そんなもののために、今以上の犠牲を望むなど……」

パックのおにぎりを頬張り、言葉を途切れさせる。

もぐもぐと口を動かし、飲み込む。また、一口。

途切れた言葉はそのままに、那由他是黙々と食事を続ける。

小さめのおにぎりが二つ、唐揚げと卵焼きと漬け物が入つているだけの至つてシンプルな弁当など、食べきるのにそう時間などかかりはしない。

プラスチックでできた透明のパックはあつという間に空になる。

だが、それでも那由他は黙り込んだまま。パックをコンビニの白いビニール袋に戻し、ごろりと草原に身体を横たえ、仰向けに寝転がつた。

さわさわと風が吹き、周囲の草木と那由他の髪とをなびかせる。

今日も、天氣は上々。風は少し冷たいが、ここは日が当たって暖かくて。

そして、いつのまにかついうた寝をしてしまったのだ。

那由他はまだ、目を閉じたまま草原に身体を横たえている。

やはり、その光景は一枚の絵のようで。その絵に見覚えがある気がいや、もうこれは氣のせいなどではないのだろう、……見覚えがあるはずなのを、忘れている。

（記憶を失くしている……？ 私……も？）

時折、さわさわと木々をなびかせていた風が、突如「コウ」と強く吹き付けた。

平和に揺らいでいた木々の枝が大きくしなり、ざわざわと音を立ててる。

不意に那由他が目を開け、緊張感も露に跳ね起き、即座に臨戦態勢をとつた。

「 控えよ、卑しきモノノケよ」

「ぶわっと、ひときわ強い風が吹き付け、あれだけ晴れていたはずの空が見る見る間に厚い黒雲に覆われていく。」

その中空から、莊厳な声がそう命じるのが聞こえ

バリバリと耳がおかしくなりそうな大音声と共に稻妻が走る。

それは、すぐそばの草原を焦がし

そのぴりぴりと肌を焼くような緊張に張り詰める空氣の中で、その声は彼の名を、呼んだ。

確認するような口ぶりで。

「……そうか、お前が那由他か」

轟々と荒れる空に姿を現したのは とぐろを巻く巨大な龍。

青みがかつた緑色の鱗は、光の加減でキラキラ金色に輝き、背のたてがみは燃えるような赤い金色の毛が、美しく翻る。背には巨大な鳥の翼が生え、長い胴体には一本の手と一本の足とが生え、その

右手には不思議な色をした美しい玉を握っている。

口元から伸びる一本の長いひげは、吹き荒れる風などものともせず優雅にたなびき、頭に生える鹿のような形状の角も、美しい木材を丁寧に研磨したような。

どこをとつても美しく、神々しい。

降るような威圧感と、それに相応しい威厳に満ちた姿の前に、身体は本能的にひれ伏そうとする。

見れば、那由他もまたその存在の前に膝を付き、頭を下げている。「本当にやり遂げるとは……。成功率など五分五分、……どころか無いに等しいと思っておったのにのう。人の子の執念といつものまあの……まあ……。しかしそれにしても」

ギロリ、と、猫のように細い瞳孔を持つ瞳で、那由他を睨みつけた。

「まだ年端もいかぬようであつた娘にあれだけの覚悟で愛されながら……お前は何をしている?」

「 結婚しよう

夜景の美しい海沿いの公園で、差し出した小箱を開ける。中には小さなダイヤの嵌つた対の指輪が。

「 でも……あなたのお義父さまが……」

「 ……これ。明日の明朝に出る定期便のチケットなんだ。このまま、僕と一緒に逃げよう。どこか遠くの土地で、二人だけで結婚式を挙げよう」

ぐしゅっと、隣で鼻をすする音がした。見れば彼女の瞳が潤んでいる。

京は、何も言わずにそっとポケットティッシュを差出してやる。

(……くだらないな)

内心、冷ややかな視線を彼女とスクリーンに向けながら、表面には優しく甘い表情を取り繕う。

今年の夏、昨今にしてはまあそこそこ流行ったドラマ 金持ちのお坊ちゃんと、一般庶民の少女の恋物語……ありがちなストーリー展開だが、坊ちゃん役の若手俳優の人気に後押しされる形で映画化までされる事になつたらしい。

そしてこの彼女もまた、スクリーンの中で彼女の指に指輪をはめている彼に夢中になつていて、一人らしいが、京にとつてはそんなのはどうでもいい事だ。

つまらないラブストーリーが観たくてチケットを用意したわけじゃないのだから。

映画館の暗闇で、京は彼女にさとられないよう小さくため息をついた。

先日の少女らと似たようなタイプだと思っていたのに、なかなかどうして隙がない。

京の隣で楽しそうに笑つてはいるが、ムードたっぷりの闇の中で、彼女の髪や肩に触れようとしても、さりげなくかわされる。彼女の中ではきちんと線引きがされていて、まだその一線を越えさせてはくれないらしい。

(厄介だ　　が、まあまだ昨日の今日だしな)

どうやら、中長期戦になりそつだが、それならそれでもいい。彼女は、重要な情報源にもなりうる。手駒に墮とすのは、必要な情報を得た後でも遅くはない。

京はポップコーンを一つ摘み、口へ放り込んだ。甘つたるいキャラメル味のそれをかみしめ、激しく口づけあつスクリーンの中の一人に目を向ける。

(　くだらない)

あのまま、“彼女”の唇に牙を立て、その血を啜れたなら……。脳裏に、欲望がちらつく。“ゴクリ”と、喉が鳴る。京はコーラの入った紙コップを取り、ストローのついたプラスチックの蓋を取つて直接口をつけ、ガブガブそれを飲み干し、渴きをごまかす。

(……いいさ。腹が減れば減るほど、その後の食事は旨くなる)  
じつくり時間をかけ、墮としたイヴの血　　その心血は、きっと極上の味がするに違いない。

一度、手に入れてしまえば後は永遠に自分のものになるのだから。映画に見入るフリをしながら、京は新たな戦略展開を頭の中で試行錯誤しつつ練り上げていく。

京は、暗闇の中でニヤリと笑つ。こういう作業は、案外嫌いじゃない。

(さて、この後はどう攻めよつか　　?)

ジロリと質量さえ伴つていそうな鋭い眼差しで貫かれながら、那由他はそろそろと龍神の姿を仰いだ。

「娘……、愛……？」

途方もない神氣が、ちりちりと力を削ぎ落としていく。あれこそ、まごうことなき本物の神たる存在だ。

元は確かに同郷だが、あいにくと那由他は「こちらの神との親交などあるはずもなく、顔を合わせるのも初めてだ。

何故か訳知り顔で非難されたが、その内容にも残念ながら心当たりはない 少なくとも、現時点では。

「何だ？ 娘だけでなくお前も記憶を失くしているのか？ それでも尚、共に連れ立つてあると……？」

龍神は驚いて目を見張ったあとで、面白そうに一人を見下ろし、楽しそうに笑い始めた。

「ほほう、これは面白い。成程、お前たち一人の絆とやらはひとつやら本物のようだな。実に興味深い」

「イイツツと笑みを深めると、ワニのよつた口の中に並ぶ鋭い歯牙があらわになる。

「一つ、助言をやるつ。 娘。お前の中の魂の奥底に封じ込められた記憶が紐解かれれば、このものの記憶もたちどころに戻るだろつ。 覚悟を、決めよ」

言い置いて龍はとぐろを解き、厚い黒雲を突き破り、天へと消える。

姿が黒雲の中へ完全に隠れた途端、あれだけ暗かった空から黒雲が吹き払われ、元の青空が戻り、暴れていた風も静かなそよ風へと変わる。

那由他は、大きく息を吐き出しながらへたりとその場に尻をつき、いつの間にかかいていた脂汗を拭つた。

そして、振り返る。

千恵は地面にぺたりと座り込んでいた。自分の胸に手を置いたまま俯き、拳を握り締める。

「記憶……覚悟……」

やつぱり。那由他だけでない。自分も、何か大事なことを忘れている。

忘れていても尚、残像のように残る記憶が、ずっと不思議に思い続けた心の奥の感情の正体。

それを解く鍵は。

とくん、と一拍、千恵の心臓が跳ねた。

「大丈夫だったか？ 人の心身での重圧を受け止めるのは大変だつただろ？」

自分のほうがよほど疲れた顔をしながら、彼は千恵を気遣い声をかけた。

千恵は首を左右に振った。

「ううん、……私、たぶん 初めてじゃ、ないと思つの……あの龍の神様……前にも……よく、というか殆ど……ううん全然つて言つてもいいくらいまともに覚えてないけど」

ギュッと、握った拳をさらに強く握り締める。

「ねえ、那由他。……お願いがあるの」

必要なのはただ、それだけ。

「那由他……お願い。私と」

ただ、その覚悟を決めればいいだけ。

難しいことじやない きっと。千恵の心次第で、それは易くも難関にもなりうること。

「私と、血の契約……して」

「たぶん……「うん、きっと私にもあるんだ。那由他と同じよ」に……今は忘れていい……でも大事な記憶が」千恵の願いを聞き、一瞬言葉を失つてしまつた那由他が反論の言葉を口にする前に、千恵は続けた。

「昔から、自分じゃよく分からぬ感情に振り回される事、結構あつたんだけど。ここ最近 ていうか、京や那由他と会つた日から、今までになかつた程に頻発してて。それにね、ここんとこちよつと眠り込むと、いつも必ず夢を見るの。全部、起きたら内容を忘れちゃつてるんだけど、でも」

そこで一度言葉を切り、息を継ぐ。

「思い出せないつて、こんなに辛いことなんだね……那由他……」

そして、ぽつりとこぼすように呟いた。

「どうして胸が騒ぐのか分からぬつて……何か、大事なことを夢に見た気がするのに思い出せないつて……こんなにも、もどかしいものなんだ……」

胸の前で握りしめていた拳を解き、その手を地面につけ、俯く。

「でも……それが……誰なのかも分からなかつた京相手に、嫌な気分になつたのは確かだから。きっと、私が失くしてゐる記憶の中に、どうして京がこうも執拗に私にこだわるのか……その理由の答えもあるんだと思つ」

もう一度そこで息を継ぎ、那由他を見上げる。

「だから……私は、今、出来る事をやらないままに何か取り返しのつかない失敗をして後悔するような事だけは、絶対にしないつて決めてるから」

知らないままにしておいてはいけないと、そう思つから。

「だからね、これは、私の我が儘。お願い、私と血の契約をして改めて、もう一度言つ。

那由他は渋面どころか無表情にそれを聞き、黙り込んだまま目を、伏せた。

地につけた手で地面を搔き、奥歯を噛み締める。

「……どうして京がお前にこだわっているのか。その答えならば、もう分かっている」

低く、静かに唸りながら那由他是言った。

「え……？」

「京の言う、イヴとは……花嫁のことらしい」

「は、花嫁つて……！」

「無論、人の世で言う婚姻とは関係ない。我らの種族において花嫁とは、永久の供血者を意味する言葉だ」

那由他是無表情のまま、淡々と語る。

「一度に一人だけ。我らには人の肉体の時を止めることができる。魂の契約とは違う。あれも肉体の時は止まるが、その身体はもう人間のものではなくなるからな。 美味い血は吸えなくなる。

だが、花嫁にすれば、身体は完全に人間のまま、その時間のみを止められる」

「つまり……京が狙っているのは私の血、ってこと？」

「私は、生贊として捧げられた多くの巫女らの血を吸い存在してきたが……確かにお前の血は上質だ、彼女らと比べても五本の指の内に入るだろう。多少個々の好みはある……いやだからこそ、好みに合つたなら……極上の血と言える。そう、永遠に味わっていたいと思うほどに」

那由他の伏せた瞳が、一瞬僅かに赤みを帯びた気がした。

「自分好みの血を持つた人間を、自らの花嫁にするにはその人間の心臓に直に印を埋める。言霊の契約にしろ血の契約にしろ、魂の契約でも常の契約は両者の合意がなければ成立しないが。こればかりは相手の意思は関係ない。無理やりでも、それをしてしまえば……ただ虚ろな人形にしてしまうことも、不可能ではない」

ペットボトルのお茶に手を伸ばし、乱暴に一口煽る。勢いよく傾

けた容器の口から漏れた分が口の端から顎を伝い、服の胸元を濡らした。

「血の契約と偽り、心血を啜る代わりにそこへ印を埋めるなど造作もないこと。人を欺き誑かし 化かし、襲う……化け物の常套手段だらう。」

不意に、ニヤリと不敵な笑みを浮かべ、俯けていた顔をこちらへ向けた。

瞬時に黒から赤へ染まつた瞳。

地べたに座り込んでいたはずの身体を起こし、目にもとまらぬ速さですぐ傍に迫り、とん、と肩を軽く押して千恵の身体を地面へ押し倒す。

両の手首を片手で掴んで頭の上で固定し、両足も彼の脚がその動きを封じる。

ビリッと、彼らしくもなく乱暴に服の胸元を破り、ひんやり冷たい手が肌を直になぞつた。

ぐつと、彼の顔がやけに近づいてきて。

どんなに武術を極めようとも、こいつがつちり動きを封じられたら後では、女の 人間の力で、男の それもモノノケの腕力をどうにかすることは難しい。

その事実を、千恵は思い知らされる。どんなに頑張つても、手も足もビクともしない。

間近に迫る赤い瞳と、胸に触れるひんやりした感触が、千恵の心臓に拍車をかける。

「 ここのままで……」

那由他の口から少しかされた声が漏れる。

「このまま、お前の心臓に牙を立てることも、印を埋めることも、私にとつては造作もない 赤子の手を捻るようなものだ」

ドクバクと派手に打ち鳴らされる拍動。それを奏でる臓器の真上で、彼の手が止まる。

そつとそこを押さえられると、その鼓動をよりストレートに感じ

る。

(……あれ?)

肌に触れる、ひんやりした感触。千恵の頭に疑問が浮かぶ。

「……那由他。今、もしかして血が足りてないんじゃないの?」

初めて彼の肌に触れたあの時程冷たくはないが、その後血を吸つて温もつた肌と比べれば明らかに冷たい。

「どうして……十日は保つって言つてたじゃない。やっぱり昨日の怪我のせい? ちょっと舐めたくらいじゃ足りてなかつたんじゃないの?」

「違う。今のあの龍神のせいだ。どう名乗ろうと所詮私はモノノケ……聖邪の理からすれば邪に属するものだ。聖の極地のあの神気は私にとつて身の内を灼く毒に等しい」

皮肉な笑みを浮かべた後で、呆れたようにため息をついた。

「それでも……この状況であるのが何故自分の身の心配でなく私の事なんだ」

千恵の胸に置いた手に視線を落とし、じっとそれを見下ろす。手に伝わる強く早い鼓動と少し高めの体温。ぐつと、わずかにそこに力を込めるごとに、爪が皮膚に食い込み、血が滲んだ。

ふわりと甘い香りが那由他の嗅覚を刺激し、欲を誘つ。あともう少し力を込めれば指は容易く心の臓に届くだろう。

このまま肉を裂き、そこへ牙を立てれば、脳裏を過ぐる危うい欲を振り払うように那由他是目を閉じ、首を振る。いくつと唾を飲みこみ、牙で自分の唇を咬む。

「……何故、抵抗しない?」

両手両足を拘束した直後はあつたはずの、そこから逃れようと暴れる気配がいつの間にか失せている。

手首を押さえていた手から力を抜き、拘束を緩めて、足にかけた体重をどかしても、自分に覆いかぶさる格好の那由他の手から逃れようとしない。

代わりに、胸に当たた手に千恵の手が触れた。那由他の手に、被

せるように置かれた手。

「何で？ だってこれ……血の契約は私が望んだ事だよ？」

温かな手に力がこもる。それに押されるように食い込んだ指が第一関節まで中に埋まる。

「花嫁にされるのは困るけど。……でも。本当に、那由他はそれを見むの？」

千恵は寂しそうな笑顔を浮かべた。

「本当にそれを望んでいるなら……すればいい。京の“花嫁”<sup>イガ</sup>になる気はさらさらない……ううん、なりたくないけど。那由他が……私をそうしたいと思うなら、すればいい」

「 つ、」

思わず、手に力が入る。ズブリ、と指がさらに深く傷を穿ち、指の先が胸の内で暴れる心をつづいた。

「年を取らなくなつたら……この先、きっと誤魔化すの大変だろうなあつて思つ……けど、人のままでいられるなら、誤魔化しようはある。少なくともあと三十年か四十年か……お母さんたちさえ心配させなければ……」

寂しげな笑顔を僅かに歪め、その額に汗が浮かんでくる。

「どうして？」

低く唸りながら苦しげに那由他は呟く。

「だつて……」

千恵は悲しそうな笑みを向けた。

「私は、那由他のことが好きだから」

面白くない、那由他の表情が驚愕一色に染まる。

信じられない。

そう言っているのが、声に出して言葉にせずとも一目瞭然な表情。ハハッと、思わず自嘲の笑みに肩を震わせ、千恵は目を閉じた。その目蓋の裏がやけに熱くて。

千恵は腕で両目を覆う。

（……分かってた。 言いつもりなんか、なかつたはずなのに）

その場の雰囲気というのは、げに恐ろしい。

（ううん、違う……。 本当は……）

先ほどからしくしく痛む心に刺さつた小さな棘とげ。あの龍神が那由他に放つたセリフ。

『まだ年端もいかぬようであつた娘にあれだけの覚悟で愛されながら……お前は何をしている？』

自分と同じ いやそれ以上に彼を好きだつた娘が居た。那由他が忘れているのはまさにその人の事であるらしい。

そうと知つて、千恵の心は大いに揺れた。

（そんな人のこと、思い出しても欲しくない……。でも……）

「フェアじゃないよね、こんな。記憶喪失で大事な人のこと忘れてる間に告つちゃおうなんて」

頬を、冷たい感触が撫でる。

これは……昨日から那由他が胸に下げているあの勾玉。

「そんな……よりもよつて……」の状況で言つ事か……お前はつ……、正氣か……

那由他の声が震えている。

「言つただろ、私はモノノケで……雄だ、と」  
ぎりぎりと手に力がこもり、胸に開いた傷が大きくなる。

今まで栓代わりに傷口を塞いでいた那由他の指より広く開いたそ

の隙間から、生暖かい血が溢れ、肌を伝う。

「食えた獣の前で……無防備にも程があるだらつー。」

苦しげに吠え、荒い呼吸を繰り返す那由他の唇が、ゆっくりと近づいてくる　吐息が肌を撫で……唇が、肌に触れ　湿った感触が肌を伝う血をなぞり　その源泉へと近づいていく」と彼の呼吸はいつそう苦しげなものになつていく。

つپپ、と傷口を押し広げていた指が抜かれ、みるみるうちにそこから湧いてきた血が、四方へと流れ出そうとするより早く、それを強く吸い上げる。

( つ、つ、あ、……またつ )

閉じた視界の暗闇が覚えのある酩酊感に揺らぐ。

遠のいていきそになる意識の端で、ビリビリと着ていた上着が派手に破られる音が聞こえ、これまで以上に胸元の風通しがやけに良くなる。

( え? )

ぱつと田を見開くと、今まさに服の胸元から腹部にかけての布地が力任せに引き裂かれているところだ。

「ちよつ、なゆ……た……」

痛みと、押し寄せる至福の波とに揉まれて揺らぐ視界の中、彼の苦しげに歪んだ表情に浮かぶ脂汗と、服の布地を掴んでいる手が小刻みに震えているのがやけにはつきり見えて。

ぢゅつ、という音がして、那由他の喉仏がゆくぐり上上トするのと同時にじくじくと喉が鳴った。

「 つー? 」

血で赤く染まつた唇が傷からわずかに離れたかと思えば小さく呻き、那由他是息を飲んだ。同系色の瞳が埋まつた目が限界まで見開かれ、傷口を凝視する。

「 何故、 」

震える声。

「 何故……お前の心臓に……これが? 」

胸の傷に指を入れ、そこから何かを取り出した。

その色とそれを濡らす血の色とがまだになつた勾玉

那由

他が下しているのと同じサイズの赤い勾玉。

「これは……この勾玉は……間違いない、私の“印”

それが

何故お前の心臓に埋まつてている？」

千恵は、後頭部を地につけたまま、首を左右に振る。

「私には、分からぬよ……少なくとも今の私には

意識を飲み込む前に引いた波は代わりに傷の痛みを引き戻し、今度はそれが思考を支配しようとするのをどうにか押しとどめる。

「でも……やっぱり私が忘れる記憶は那由他が失くして記憶と何か関係あるんだよ。だつてそうでしょ？ それ、那由他の印のはずが自分じゃ覚えがないんでしょ？」

那由他是そろそろと首から下げる勾玉を外し、手のひらに一つの勾玉を載せて見比べる。

「……そうだ。これは間違いなく私の印。だがこちらの……天羽のものにはやはり何も感じない……が、同じものに見える」

「じゃあ、それも……那由他の印？」

「いや、まさか……効力だけじゃない、本来一、三日でそのものごと消えてなくなるはずのものが……どうして……」

天羽は三つの勾玉が、と言つた。あと一つ。迅が持つはずのそれも……では……

「私の……印？」

迅との付き合いは確かに長い。だが彼に加護を「えた覚えはあっても、印を受けた覚えなどない」というのに？

「全ては失われた記憶の内に、か……」

今開いたばかりの傷に牙を埋めれば戻るはずの記憶。そこから溢れる血はまだなお那由他の欲を煽る。

永遠に味わつていて思える極上の血。まるで人事のように言つてはみたが……所詮は同族、同じ穴の貉ということか。

「……常により確かなものを求め、欲している。モノノケとはそ

うにうものだ。お前は…… 一体どれだけ理性の限界に 我慢の限界に挑戦させたら気が済むんだ！？」

血の契約を結べば確かな記憶が戻り、“花嫁”にすれば常に確かな存在が傍らに在る確約が得られる。

だが

「それでは、京と何が違つ？」

京から守ると言つたのに、当の自分が欲に抗いきれずに彼女をこうして傷つけて。

あれは単に自らの欲に忠実に生き、行動しているだけ モノノケとしてはむしろまつとうな生き方と言えよう。

もしもあれが那由他じぶんの繩張りの外のどこかで誰ともしれない女を相手にしていたなら、たとえその事実を知つても自分はそれを歯牙にもかけなかつたはず。

「ああ、もう本当に 土地神だなどと……過去の話としてすら言えそうにないな」

自嘲を多分に含んだ苦い声で呟く。

「私を封印の眠りから喚び起こしてまで乞い、無いはずの心鼓を逸らせるお前が……こゝして私の印を持つお前が一体何者なのか……。まるで不確かな夢の中で見えては起きるたびに霧散する過去の記憶の中にその確かな真実があるのなら」

那由他がかすかに苦く微笑む。

「もう、我慢も限界だ。……いいだろう、契約を 新たな契約を結ぼう

第弐拾話 turn a key

「新たな契約を結ぼう」

待ち望んだ彼の答えを聞き、千恵は頷いた。

「私の力と引き換えに、お前の心血を差し出せ」

那由他の要求を了承するため、もう一度千恵が頷こうとした時。遠くで犬の遠吠えが聞こえた。

「え？」

山の麓にあるのは学校だ。その周りにあるのは駅前に比べ閑散とした商店街で、犬を飼うような住宅などなかつたはずだし、お散歩コースにもあまり向かない。

だいたい、最近は室内飼いが定着し、緊急車両のサイレン音につけられて吠える犬、なんてのも最近はあまり聞かなくなつた。なのに。アオーン、と、また 今度はもつと近くで聞こえ、那由他が顔を上げた。

落ち葉を踏み荒らす音が、すゞい速さで近づいてくる。がさつと、頭の上のほうですぐそこの中木の枝葉が激しく揺すられ、同時に大きな影が千恵と那由他の上を飛び越えて行つた。スタッフと身軽に着地したそれは振り返り、

「主つ、チ工様、お約束通りお持ちしましたよ！……つて、アレ、……もしかして俺つてば、いい雰囲気のとこ邪魔しちまつた感じ……だつたりします？」

得意そうに胸を張つたが、その場の状況に気づくと途端に尾を丸めて股に挟み、及び腰に尻を落とし、半分お座りしたような中途半端な格好でそろそろと後ずさるそれは

「おお……かみ？」

まさか。絶滅したと言わされて久しいそれが……人の言葉を喋つている？

「迅」

那由他が聞き覚えのある名で、そのやけに大きな狼を呼んだ。

「はいっ、お楽しみ中のところをお邪魔しまして申し訳ないです、

反省します」

狼は慌てて、今では昔懐かしグッズに分類されるようになった首振り赤ベコ人形よろしく、ペコペコ頭を下げる。

「大丈夫です、今すぐ消えます。これだけ受け取つてもらえたらい即刻消えさせてもらいますんで！」

首から下げたそれがよく見えるように下げていた頭を上げ、胸をそらせる。

「チエ様から、お預かりしてましたのです」

那由他の手にある二つと同じ色、同じサイズの勾玉。

「チエ……とは……それが、お前に鍵を預けた最後の巫女とやらの名か？」

「やだなあ、主つてば。いや、お邪魔したのは謝りますけど、だからつて妙な冗談でからかわないでくださいよ。それとも何ですか、たつた百年ばかり寝てた間に呆けたんですか？ チエ様の前でチエ様の名を俺に尋ねるなんて」

「いや、この彼女の名も確かに千恵だが、お前が言うチエという名の女は私が封じられる以前……百年近く前の人間なのだろう？」

百年。大方の人間は寿命が尽き天へ還り、仮にまだ生きていたとしても、相当に老いているはず。

「ええ、チエ様は主が封じられた後、主を封印から開放するための術を得る代償に命を差し出し、その魂は輪廻の輪へ組み込まれた。……主、もしかして分かつて彼女と居たんじゃなかつたんですか？」

「お前の言いようは気に食わんが、あながち間違いではないのでな。封印の影響なのか、一部、記憶がない。……天羽に聞いた。お前の持つ最後の鍵が揃えば錠が開くと。それを、どう使えば良い

？」

「……え」

迅が、言葉に詰まつた。

「あー、うー、えーと、その……天羽のやつと一緒に聞いてちやい  
たんですがね……話がややこしそうで俺には……ちょっと」

首に勾玉を下げたまま、迅は再びそろそろ後退を始めた。

「待て。お前が知らなくとも天羽なら知つておるのだろう? な  
らば……共に愛羽家に参れ。色々積もる話もあるわ。」

「え、那由他 契約は?」

「記憶を戻すもう一つの方法の条件は揃つた。『記憶を戻すため  
』の契約はもう、必要なかろう。 だが

「上着の袖を破り、それを止血のための包帯替わりに巻きつける。  
「記憶が戻つたなら もう、迷うまい。必要ならばもう、躊躇ためら

いはしない」

千恵の上に覆い被せていた身体をどけ、袖のない上着で自分の裂  
いてしまつた服の下の肌を覆い、そつとその体を抱き上げる。

「迅」

名を呼ぶと、渋々彼は背を向けた。那由他是知恵の体を抱えたま  
ま、その背に跨る。狼の巨体は、二人分の体重を乗せても崩れるこ  
となく立ち、悠々と一步を踏み出す。

「落ちないでくださいよ」

言つが早いが、力いっぱい地面を蹴りつけた。

とん、と軽く蹴つただけのようにしか思えなかつたのに、その一  
飛びで周囲の木々より高く、宙へに舞い上がる。

ひょい、ひょいと空氣以外何もないはずの空を蹴り、駆ける  
そのスピードは眼下の通りを走る車より速い。

高いところで強い向かい風を浴び、体が寒さに震える。

しかし、高校から自宅まで、自転車を飛ばして十分弱の距離をそ  
れだけの速度で、それも直線距離で走れば、ほんの数分で到着した。  
一階の屋根に着地した迅の背から降りた那由他是一階の窓を開け、  
その窓枠を跨いで室内に入る。

それに続けて部屋へ入ろうとした迅を制するよつこ、中から鋭い  
声が飛んできた。

「迅……その薄汚れた足で我が家に踏み込むな。庭の水場で足を洗つて来い」

天羽の声だ。

「……那由他様」

迅に向けた冷めた声音を改め、那由他の前に畏かしこまった天羽は腕の中の千恵をの様子を窺う。

「那由他様……千恵様と血の契約をお交わしになられたのですか？」

「記憶は……」

「その、つもりだつたんだがな。いざ、といつその時に迅が現れた。だが迅は鍵の使い方をよく分かつておらぬようでな、それをお前に尋ねようと、一先ず戻つたのだが……それを聞く前に、天羽、千恵の寝床の支度を手伝つてくれるか？」

「かしこまりました」

天羽は鳥の足で部屋の引き戸の方へと那由他の前を歩き出す。天羽が扉の前まで来ると、扉はひとりでにスライドし、開いた。歩を緩めることなく廊下を横断し、今度は千恵の部屋の扉の前へ立つと、ドアノブが勝手に動いて扉が開く。

千恵がいつも使つているベッドの前に立ち、翼でそれを指し示しながら、

「こちらが千恵様の寝床にござります。まずはこちらへ」

千恵の身体をそこへ降ろすよう進言する。

「ああ。それと……」

「はい、お着替えはこちらの箪笥たんすに一揃え入つてござりますが……見たところゆつたりした部屋着のよつな物の方が良さそうでござりますね。申し訳ございませんが那由他様、上から四つ目の引き出しに入つております服を出して差し上げていただけますか？」

「上から四つ目……これが、この服でいいのか？」

トレーナーと、同じ生地で仕立てられたズボンを取り出し、天羽に確認する。

天羽は頷き、千恵を振り返る。

「……千恵様……お一人でお着替えは……」

「さすがにそれは辛いだろ。天羽、済まないがしばらく出ていてくれるか?」

「えつ、だ、大丈夫、それくらいできるから! 那由他も一緒に出てて……つ、たつ、」

慌てて上半身だけ起こうとするも、胸に穿たれた決して浅くない傷の痛みを無視するのは流石に無理というもの。

うつすら田尻に涙を溜めつつ悲鳴を殺した呻きを漏らす羽田になる。

「ほらみる、いいから寝てろ」

「ああそれと、天羽。救急箱の類はどこにある? 千恵の事だ、手当道具一式くらいは常備してあるのだろ?」

「はい、それでしたら先ほどの箪笥の隣の……ああはい、それです、そのクローゼット式箪笥の下の引き出しにござります」

「ああ、あつた。これか」

「では、迅が部屋へ踏み込むことのないよう、廊下で見張りを兼ね、お待ちしておりますので、済みましたらお呼びください」

天羽は丁寧に頭を下げて部屋を出て行く。

パタン、と扉が締まる音が静かな部屋にやけに響いて。

那由他是救急箱を開け、中から消毒液や包帯を取り出し、ベッドの脇に立つた。

「えつと……あの、那由他?」

さつきは、契約のためだとつて耐えていたけど。

実年齢はともかく、見た目は夏也よりかは若干大人に見えるくらいの男の前で肌を晒す羞恥心くらい千恵だつて持ち合わせている。だけど。

(ああ、……するによ、那由他。そんな顔してたら……)

傷の痛みに耐えている千恵より余程辛そうな顔をする那由他を前にろくな抵抗もできなくなる。

那由他是随分と手馴れた様子で傷の手当を済ませ、手際も要領も

良くなつさと千恵の着替えの介助も終わらせた。

「何、何でこんな慣れた風なの？ プロの介護士か看護師みたい

……」「

「ござ終わつてみれば下手に羞恥を感じる暇もなく済んでしまい、拍子抜けした気分になる。

「さあ、おそらく失くしている記憶に関係しているのだろう。何故かは分からぬが……身体が覚えていたようだ。天羽、済んだから入つて来てくれ。それで、例の件だが……」

「はい、鍵の使い方でございましたね。鍵さえ揃えれば難しいことはございません。全ての鍵を千恵様がお飲みになり、その後で那由他様が千恵様の血をお飲みになれば良いのです」

「飲む……？ これを……？」

那由他が懐にしまつたそれを取り出し、手のひら乗せるのを見ながら千恵は呟いた。

「お水など、お持ちしましょつか？」

確かにそんなに大きなものではないから、いきなり直接飲み込むのは難しくても、錠剤やカプセル剤を飲む要領で流し込めば何とかなるだろつ。

「大丈夫か？ もう少し傷が癒えるまで待つたほうが良いのではないか？」

那由他是心配そうに言つたが、千恵は首を左右に振つた。

「そうか。ああ、天羽、いい。私が持つてこよう」

パタン、と再び扉が締まる音が静かな部屋に響いて、今度は天羽とふたりきりになる。

「……傷、痛みますか？」

無意識に傷のある場所に手を当てていた千恵を見上げ、天羽が尋ねる。

「いえ、痛まぬ怪我など御座いませんでしょうが……」

言葉の途中でドアが開いた。

まあ、そつだろつ。台所で水を汲んでくるのにそう時間などかか

るまい。

三つの勾玉と、水の入った愛用のマグカップを差し出され、千恵がベッドの上でもう一度身を起こそうとするが、那由他はそれらを一度ナイトテーブルに置いて千恵に手を貸した。

テーブルの上のマグカップを手に取り、まず一口、口に含んで口内を湿らせ、飲み込み、喉も潤す。

次に勾玉を三つじつぺんにザラッと口へ放り込み、水と一緒に一気に飲み込む。

すぐに溶け出す小さな錠剤とは違う、大きく硬く冷たい塊がその存在を主張しながら食道を降りていき、その感触が消えるまで、しばらくかかり、千恵はマグカップの水を何度も口に含んで飲み込んだ。

ようやく落ち着いて息がつけた頃にはマグカップはすっかり空になっていた。

「那由他様」

「ああ。千恵……いいか？」

千恵は頷く。

「身体を起こしているのは辛いだろう、まず横になれ」

那由他に手伝われ、愛用の枕に頭を埋める。

寛ぐためのゆつたり造られた部屋着のトレーナーのそこはあえて寛げなくとも既に外気に晒されている。

那由他の脣がそこに触れ、間髪入れずに牙が埋め込まれる。

ついでつき直前で逃した波が、再びやってくる。

「那由他様……」

頭の隅で、知らないけれど良く知った声が響く。

「チエよ、私と永久を生きる覚悟はあるか？」

ああ、これは那由他の声だ。間違いない。

でも……永久を生きる覚悟って……？

パチツ、パチツ、と「ママ送りでスライド写真を見せられているよ

「…、頭の中で覚えのない記憶がはじける。

（「…私が忘れていた記憶？」）

至福に浮かされ酔わされながら、かすかに残る思考で思つ。

（私…、私、は…）

眠りに落ちていくよつ、瞬く記憶の中へ意識が沈んでいく。

（ なゆ、た…れめ…）

「チエよ、私と永久ヒカルを生きる覚悟はあるか？」

寂しそうな顔で那由他は言った。

にこにこ嬉しそうな顔で那由他を見上げていたチエは、少し首を傾げた。

「チエ、私の番つがいとして永久の生を生き、私の子を産み育てる未来を歩む その覚悟はあるか？」

「永久を生き、那由他様の御子を産む……？」

重ねて問いかけた那由他の言葉に、チエは少し驚いた顔をする。「もちろん、叶うのでしたら私にとつてそれ以上の幸せなどありませんけれど……本当に、それが可能なのですか？」

那由他是、老いも寿命もないモノノケだが、チエは違う。普通に年もとるし、いつかは寿命を迎える。天に召される日が来る。

「可能だ。人の姿かたちをとれるものならば皆、その永すぎる生のうちにただ一度、そのただ一人だけとのみ交わすことを許された契約がある。永久の時を共に過ごし、血ながりの子を産んでくれる伴侶を得る、その為の契約が」

那由他の説明を聞きながら、火照りのぼせてくる脳みそに活を入れるために、チエはパンツ、といい首を立てて自分の両手で両頬を思い切り叩いた。

「那由他様……私、ちゃんと起きて目を覚ましてますよね？ これ、夢じやないですよね？」

すでに真っ赤に染まつた頬に新たに刻まれた赤い手形はあまり目立たないが、痛みの方はしつかり自己主張してくる。夢じや、ない。

「モノノケは、モノノケ同士で子は作れない。元々不確かな存在だからな。子孫という確かな存在を残すためには他の確かな存在のあるもの 人や獣に頼らねばならない。だが、人と獣の間に子を

もうけることが不可能なと同じよう、そのままで伴侶にはなり得ない」

那由他は、痛みを堪えでもしているような辛く悲しげな顔でチエの頬を撫でる。

「だから、契約を交わす。……魂の契約と違い、肉体は人間のまま、その“時”だけを止め、モノノケの子を宿す事を可能にするそのための契約を。だが、本来あるべき理を曲げたその結果を元に戻すことは不可能となる。歳を取らず、……モノノケの子を宿せるようになつた身体はもう、人の子を宿すことが出来なくなる。たとえ身体が人間のままで、それはもう人とは言えまい」

那由他は、空を仰いだ。

「不老不死……一体そんなものにどれだけの価値がある？それを望む人間はいつの時代、どんな場所にも存在する。だが……永すぎる生など、いはずは苦痛としか思えなくなる」

同じように空を見上げれば、刻々と暗くなる空に、ぱつぱつと星の灯が瞬き始める。

忙しなく変わり続ける地上と違い、まさに那由他程の時の間ずつと変わることなく存在し続けている儚く淡い光。

「その苦痛の程は、自らの身でもう嫌といつほどに味わい尽くし、誰よりも理解しているというのに。そんな生へと招く罪深さも充分に承知の上だというのに」

辛そうな顔のまま、那由他は苦笑を浮かべる。

「それでも……これまでの当たり前が当たり前でなくなつてしまつた今はもう……これまで当たり前だったはずの孤独な生に耐えられそうにない。ただそれだけの理由でお前を手放したくないと思う私は……果たして、お前を花嫁にしようと躍起になつている京と一体何が違う？」

その笑みに自嘲を含ませて。

「お前の傍に居る事で感じる居心地の良さを手放したくない。……お前が私に向ける負の感情の一切を感じさせないその笑顔も。お

前の甘い血も。何より、その心を。 それを失くしてはもう、私は永き孤独に耐えられない」

空を仰いだまま、一度深々と深呼吸をし、覚悟を決めるように田を開じた。

「京の件が片付いたら。……チエ、我が伴侶として永久を共に生きる未来の為に……私と新たな契約を結ぶ覚悟ができるか？」

言いながら、那由他は真っ直ぐチエの瞳を見下ろした。

「ずっと望み続けた、私にとつて一番の幸せに直結する願いを全て叶えていただけると言つのに……どうして迷う必要があります？」  
せっかく、彼からとても嬉しい言葉を貰えたのに、当の彼がこんなにも辛そうな顔をしていては素直に喜べない。

「那由他様が何ものであるうと、人ではない……それだけはもう10年以上前から周知の事実。人の世の道理が通用しない位の事は巫女になりたいと望みを抱いた時から覚悟はとうに決めておりました。その那由他様に想いを告げるというのがどういう事なのかも、もちろん承知の上で、それでも……那由他様のお傍に在りたくて……」

チエは彼の表情の曇りを少しでも取り除きたくて、必死に言葉を連ねた。

「あの京というものが欲しているのは私の血だけ。私の想いなど無視して、傀儡かいらいにしてしまおうとしているのでしょうか？ けれど那由他様はこうして私の身を案じてくださる……。人間同士の結婚とて、例えば愛のない政略結婚に泣く娘だつて少なくはないのに。私は大好きな人にそんなにも必要とされて……これ以上の幸せなどございません」

那由他の腕がチエの腰を引き寄せ、きゅっと抱き締められる。チエは身体を彼の胸に預け、そつと抱きしめ返す。

「那由他様、チエは決してあなたの傍を離れたりは致しません。いつでも共に在り、那由他様を孤独ひとりになどさせは致しません」

チエは誓いの言葉を彼に捧げる。

頬に触れる手が、チエの顎を少し持ち上げ、彼の顔が間近に迫つてくる。チエはそっと目を閉じた。

あたたかく柔らかい感触が唇に触れる。

一度は乾いた目尻から、また涙がこぼれて。

「ああ、私も誓おう。これから先ずっと、常に傍らに在ると、ささやかな口づけの後で、那由他が言つた。……少しだけ、曇りが晴れた表情で。

ドーン、と腹に響く重低音が、海辺の方から響き、春の夜空に花が咲く。

毎年、春の祭りの締めに打ち上げられる花火。今年の春祭りもそろそろ終わりを迎える。

チエが那由他の糧であり続ける限り、もうこの先ずっと、春祭りで村長が新たな巫女を選ぶ占を執り行う必要はない。

チエは那由他の最後の巫女。これから先ずっと……永遠に。

「ぐり、と喉を鳴らして飲み込んだそれは、常のものとは明らかに質が違つた。

暖かくて甘い、熱と生命力に満ち溢れる、極上の血。それは変わらない。

だが、それに含まれる力の濃度はまるで別物。まるで、魂の欠片を飲んでいるかのようだ。

喉を通過して腹に溜まつたそれが沸き立つ溶岩のようにカツと熱を持ち、その熱が瞬時に脊髄を伝つて頭を突き抜ける。

骨じと燃え溶けてしまふんぢやないか 本氣で一瞬そんな事を考えてしまふ程の灼熱が頭の中を駆け巡つた。

たつた一口だけでこれだ。那由他は千恵の肌に埋めていた牙を慌てて引き抜いた。

人間が体調を崩し熱を出した時も、こんな風に感じるものなのだろうか？

チエが熱を出して寝込んだ時には、顔を火照らせて額に汗を滲ませながら荒い呼吸を繰り返しては苦しげに呻いていたが。看病などしたことのない那由他是何をしていいのかもわからず、ただ彼女の手を握つていることしかできず、もどかしく思つたものだったが。

（待て、なんだ今のは……。）

覚えのないはずの光景。でも、確かに覚えのある光景。まるで、他人が書いた自分の記録を読んでいるような感覚。

（でも……そうだ。あれは、京が現れてしばらくした頃……）

山に、異質なものが入り込んだ。

ふわっと、離れていても香る彼女の血の芳香。また、どこかに小さな傷でも抱えたのだろう。いつもの事だが、今は。甘く香る魅惑的な香りは、モノノケを誘う絶好の撒き餌だ。

ざわめくモノノケたちの気配でそれを察した那由他は、まずチエの保護に向かつた。

寒さも厳しくなり、日々冬らしさが増していく今日この頃だが、この冬が明け、暖かくなり始めた。彼女は。

春になれば、麓の村で祭りが行われる。あれから5回目の春祭りが。

たった5年。気の遠くなる程の時間を存在してきた那由他にとっては元々あつてないような時間が、この5年間は常より尚短かつたように感じる。楽しい時間ほど早くすぎる、といったやうな感じだ。

本当らしい。

那由他の印を持ち、迅を従えた彼女は、今や山に棲まつモノノケたちからも一目置かれる存在だ。

この山で、彼女に手を出そうとするよつた愚かなものなど最早存在しない。この山に棲まい、那由他の庇護下にある者たちの中には。

だが、今は、十中八九、よその山の香りを辿り、彼女のもとへ向かうだらう。

(……この気配。同族、だな)

果たしてどれくらいぶりになるだらう。少なくともこの島国へと渡つてくる以前のことだ、自分と同じように、血を糧に存在するものの気配をこつして直に感じ取るなど。

同族であるのであれば尚更、この香りはより強烈に欲を煽るだろう。極上の血を味わいたいと、喉を鳴らしているに違いない。あわよくば、全身の血を全て吸い取らてしまいたいと。

それが、自分たちの本能なのだから、そう思ひは當然。……なのに、そう考えたら、腸が煮えくり返った。

那由他にとつてかけがえのない存在が、あさましい欲に穢された気がして。

怒りも露に感情のまま、那由他是棲み慣れた山を全力で駆けた。

「あーあー、気をつけて下さによ?」

迅の声が、沢の上から聞こえた。

「まあ、この位の傷なら、那由他様にいたいた“印”的お陰ですぐ治るから……、今はまずこの獲物を小屋へ持つて帰ることに専念しましょう」

チエの声も。

よそのの気配もまだ遠い。那由他是ホツとして、上を見上げれば、自分の身体の軽く倍以上はある鹿を引きずつて行こうと縄を肩に担ぎ、引っ張つて行こうとする彼女の姿が目に入った。

「……いくらなんでもそれは無理だろ？」

「那由他様！」

呆れたようにため息をついてみせながらも、嬉しそうに自分の名を呼ぶ彼女の笑顔を見れば腹の奥底に渦巻いた穏やかでない感情もたちまちのうちに解けて消え、代わりに熱い衝動が心を占拠する。

「また怪我をしただろ、血の匂いを感じた」

見せてみろ、と、衝動が突き動かすままに空いているほつの手でチエの手に触れ、口元へと運び、既に閉じかけている傷口を舌でなぞる。

「嫌なら、怪我などするな。お転婆も程々にしておけど、いつも言つているのにお前が聞かないから、お仕置きだ」

最もらしい事を言つてチエを誤魔化しても、もう、自分の感情は誤魔化しきれない。

もうじき、手放さねければならないこの温もりに、もっと触れていたいと、もっと深く溺れたいと思う。

「愛おしいと、 そう想うよになつてしまつたのだ。

忌避される当たり前が当たり前でなくなり、暖かく受け入れられ惜しみない好意に包まれる毎日が当たり前になつてしまつた今、那由他はもう、新たな巫女を受け入れられる自信を失いかけていた。

「俺、腹減つてゐるんすよ。もう昼時でしょ？ さつさと戻つて、メシ喰わせて下さいよー」

迅の平和なセリフに乗つかつて、那由他是鹿とチエの身体を抱え

る。

「うん、確かにそれは同感だな。……私も腹が減った。急いで戻るとしよう」

確実に近づいてくる同族の気配を背に感じる。山の斜面を人には不可能な速度でその場を離れる那由他の後ろに迅が付き従つて駆ける。

「……主」

迅が、チエには決して聞き取れない声で囁いた。

「分かっている。忠告は、一度だけ。それを聞かぬなら、今夜中に狩つてやる」

主の意を汲み、迅はすぐさま踵を返し来た道を駆け戻った。

だが、結果として忠告は受け入れられなかつた。

その夜 草木は眠れども、この山が一番賑わう丑三つ時という時刻だが、今日はその気配を恐れてかいやに辺りは静まり返つた。

「まだ百からそこのヒヨックのくせに、小生意氣な小僧でしたよ」迅はそう言つていた。百からそこの若造など、那由他の相手ではない。狩るのは造作もないこと。

しかも、異質な気配を追い、駆けるこの場所は那由他の庭だ。地の利すらこちらにある。

すぐに済む。だから、那由他是当たり前にそう考えていた。白い月明かりに照らされ、風に揺れるそれを見た時。してやられた、そう気づいたときも。

向こうが透けて見えるほど薄く、半透明な赤い色をした魚の鱗が、紐で木の枝にぶら下げる。それこそが、この気配の元。これは、那由他の勾玉と同じもの。この気配の主の“印”だ。それを疑似餌代わりにしたらしくと知り、那由他是慌ててチエの居る小屋へ駆け戻りながら、チエに迫る危機にザッと血の気が引く思いがして、思った以上に悪知恵の働く奴だと歯噛みはしたもの。

那由他はまだ、簡単に屠れる相手だと侮り、油断していた。

夜陰に、狼の遠吠えが轟いた。　迅だ。念のためとチエと共に

小屋で休んでいたはず。

那由他是舌打ちをしながら、風伯を呼び出す。

「我が身を、チエのもとへ運べ。今すぐだ」

荒つぽい旋風に巻かれるに任せ、凄まじい空気の塊と一緒に宙へ吹き飛ばされる。息もつけぬほど乱暴に投げ出され、さすがに身体が悲鳴を上げるが、それでも自分で駆けるより格段に速度が出る。投げ出されたと思った次の瞬間には小屋の庭先へ叩きつけられる。よう投げ出され、「ぐつ」と思わず呻きながら、背中で迫る地面を受け止めていた。

小さくない衝撃を受け止めた身体が訴える痛みの全てを黙殺し、那由他是立ち上がり、血溜まりの中に蹲る狼に駆け寄つた。

「おい、迅！」

「あ、主……、俺は大丈夫です、足を折られちまつて動けないだけ……」

薄く目を開け、迅は呻くように囁く。

「すいません、たかが小僧つ子だと油断しました。早く、俺はいいから、早く……っ」

力の入らないらしい前足を痙攣させ、迅は鼻先を小屋へ向ける。那由他是扉に駆け寄り、スパンと勢い良く引き戸を開けた。

「チエ！」

素早く視線を巡らし、中の状況を把握する。

チエは、土間の壁際に追い詰められていた。台所にあつた鉈を構え、必死に抵抗を試みている真つ最中　その刃を、血で濡らしながらも楽しげに掴み、じりじり押し戻しながら、もう片方の手でチエの肩を壁へ押し付けている、白い影。

黒髪黒目が当たり前なこの國の人間を見慣れた那由他の目には違和感たっぷりの白銀の髪に、濃灰色の瞳、それにやけに白い肌は最近やつて来るようになつた外国人のものに良く似た色をしてい

る。

「……あんたが、ナユタサマ？」

少年か、青年か。見た目だけをいえば那由他より若干若く見える風貌。

「ハジメマシテ、ナユタサマ？」　　僕の名前は京  
彼はチエを押さえつけたまま、視線だけこちらへ向け、いんぎんぶれい慇懃無礼に名乗りを上げた。

「はるばるノルウェーからスウェーデン、デンマークからオランダ経由でここまで来んだけど」

まさに小生意氣という言葉がよく似合つ笑みを浮かべて、京はチエの首筋をぺろりと舐めた。

「ねえ、この娘はあんたの何？　僕、彼女を僕のイヴにしたいんだ」

「　イヴ？　何の事だか知らないが、とつととその手を離せ。昼間の忠告を無視して我が縄張りを荒らしたのだ、当然覚悟はできているのだろうからな、改めては聞かない。　　その身をもつて贖あがなえ」

田もくらむ程の怒りに臓腑も脳みそもグツグツ音を立てて沸き返る。煮えたぎつた腹の奥で鎌首をもたげる黒い衝動のままに、京と名乗った同族を睨みつけ、抑制なしの殺氣を向ける。

だが京は、笑みを深め、刃がさらに深く食い込ませながらがつちりとチエの手ごと鉈を掴んで押さえ込む。

こうしてチエが自分の手の内にあるつちは、那由他が下手に手出しえきないことを十分理解した上での行為だ。

「あと10分、いや5分でいい。ちょっと待つてくれない？  
　　彼女の心臓に、僕の印を刻む間……」

肩を抑えていた手を外し、チエの着物の胸元をまさぐる。

怒りに震える手を那由他が抑えていたのは、その行為にチエが嫌がる素振りを見せるまでの僅かな間だけだった。

「夜陰に遊ぶ鬼火たち、我が那由他の名において命ずる。　燃

やせ

低く命じると同時に、那由他の目が赤々と燃え上がり、京の視界いっぱいに青い炎が揺らめいた。

パツと、瞬く間に燃え広がった炎が京の体を包む。

「な！？」

突然の事に怯み、チエから手が離れた一瞬の隙を、那由他是逃さない。

「風伯、その眷族たる鎌よ 我が名のもとに具現せよ。……切り刻め」

鋭い風の刃が京に向かって飛び、血の花が咲いた。

「ぐつ、」

衝撃の反動と痛みによろめいた京の体がまた一步、チエから離れる。

チエも、その隙を逃さなかつた。力いっぱい京の身体を突き飛ばし、那由他のそばへ駆け寄る。

震える彼女に怪我がないのを確かめ、那由他是その身体をしつかり抱きすくめた。

「あーあ、逃げられちゃつた。……今日はもう潮時、かな？」

「今日は、だと？ 残念だな。縄張りを荒らし、我が眷属を傷つけ、我が印を持つ者に手を出した貴様に明日などあるはずなかろう？」

腹に渦巻く衝動を手に集め、持てる力を凝縮させる。

「 終わりだ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4541z/>

---

Eternal a Contract

2012年1月14日15時51分発行